財団法人日本タイ協會々報

第三十號

昭和十七年十月

昭和十七年十月

財團法人 日本タイ協會々報

第三十號

財團法人 日本タイ協會

財團法人 日本タイ協會編 最新刊

タイ國通史

タイ國は昨年十二月の日タイ攻守同盟に續いて本年一月五日に至り、遂に米英に對し干戈を執つて起つたが、去る四月下旬、プラヤー・パホン中將を首班とする同盟慶祝使節及びそれに先行せるワニット無任所相等の經濟委員と、わが關係者間にすゝめられた具體的交渉により經濟諒解成立し、こゝに日タイ兩國は今や軍事的經濟的に完全なる協力態勢成り、相共に米英撃滅大東亞共榮圏建設の大業に邁進しつゝあるのである。

かくてわれらはこの友邦タイ國の完全なる認識理解の要、今日程急なるはない。而して一國の認識理解はその國の歴史に徴することが捷徑であり、最良の方法であることは論を俟たない。本書はその要求に應へるべく東邦に於ける唯一の書である。

規格B列6號三〇〇頁
美麗口繪・寫眞十七頁
定價貳圓五拾錢（送料二十錢）

——内容目次——

タイ國黎明史——タイ國の位置—タイ國の先住民族—優秀なるタイ民族—南詔王國の建設—ムアン・タイの建設
スコータイ王朝史——偉大なるラーマカームヘン大王—スコータイ王朝の末期
アユタヤー王朝史——神秘的英雄見ウトーン—トライロック・ナート王の治蹟—ポルトガル人の渡來—ビルマのアユタヤー侵寇—アユタヤー王國の復活—和蘭の東洋侵略—日本民族のタイ國發展史—英國のタイ國進出—ビルマとの葛藤—日タイ國交と山田長政の活躍—アユタヤー王朝の滅亡
バーンコーク王朝史——チャクリー王の覇業—英國のタイ國工作—チュラーロンコーン王の偉業—タイ・佛事變と獨立保障
タイ國近代史——プラチャーティポック王の功業—人民黨と立憲革命—急進派の凋落—武斷派の擡頭—十月兵亂の經緯—國王の退位—武斷、文治兩派の抗爭—タイ國最初の議會解散—ピブーン内閣の確立—新興タイ國の動向—最近の日タイ交通
附錄、タイ國憲法—日タイ歴史年表

東京市麹町區内幸町二丁目二ノ四 富國別館
興亞日本社
振替東京六七六番 銀座五二一五番 電話四一六一番

財團法人 日本タイ協會々報第三十號 目次

口繪寫眞
一、日タイ同盟慶祝答禮特派使節歸朝歡迎晩餐會
一、日タイ學生の夏季錬成
一、タイ國名譽領事への勲章傳達式

巻頭言
大東亞省と東亞の諸國……常務理事 川村 博……一

說苑
日本とタイ國……駐日タイ國大使館參事官 タウィ・タウェティクン……二
泰國醫療の一瞥……醫學博士 磯部美知……五
南詔の文化(四)……前嶋信次……一三
タイ國新首都建設……江尻英太郎……二八
英米抑留のタイ國同胞が故國歸還の感激放送……二四
本協會主催日タイ學生夏季林間寮の記
總記……タイ國學生會館學監 高久正義……三七

感想ノ一（タイ國人の立場から）……國際學友會日語學校學生　サワン・チヤレンポン……四
感想ノ二（日本人の立場から）……東京外國語學校學生　田中正明……四九
タイ語音聲學ノート（二）……江尻英太郎……五三

新聞論調

ピブーン首相萬歳……バーンコーク・クロニクル紙六月二十六日附社說……五七
南京政府の使命……バーンコーク・クロニクル紙七月二日附社說……五八

資料欄

タイの外棺の由來……ターニーニワット殿下……六〇
アユチヤ時代の宗教—ファン・フリートの「暹羅王國誌」による（二）……奥村鐵男譯……六九
昨年度タイ國檢定試驗結果……バトンコーク・クロニクル六月三十日……六八
タイ國に於ける新國旗揭揚法……バーンコーク・クロニクル五月二十日……六八
タイ國七會社の定款登錄……バーンコーク・クロニクル六月三十日……七七
タイ國關係雜誌記事……本協會調査部編……八三
同盟慶祝答禮使節訪泰日誌……在タイ日本大使館商務書記官　丸山眞壽夫……七九

雜報欄

○タイ佛印國境劃定調印式……八七
○日タイ合辦米會社設立……八八
○タイ國名譽領事勳章傳達……八八
○タイ國紡績局長、技師來朝……八八
○輸入調整機關追加……八八
○ピブン首相夫人中佐に任命……八九
○日タイ文化會館候補地……八九
○タイ國民の國防獻金……八九
○日タイ親善の舞踊會……八九
○ピブン首相の戰時小賣商……八九
○タイ國攝政ヨチン大將逝去……九〇
○ピブン首相の令塊救出……九〇
○タイ國の帽子奬勵運動……九〇
○日タイ學生の鍛錬會……九〇
○タイ國女兵團組織……九一
○東京のウエーサーカ祭……九一
○日タイ首相メッセージ交換……九一
○殘留する在タイ敵國人……九二
○タイ、スペイン外交關係再開……九二
○タイ國勞働法制定準備……九二
○タイ國外相、日本外相宛謝電……九三
○ヴ・タイ國駐滿大使赴任……九三
○共榮圈棉業設備精紡機……一二
○バーンコーク・クロニクルから……一五
○タイ國關係名簿……一五

協會記事

○日タイ同盟慶祝答禮使節歸朝歡迎晩餐會……九四
○藤間節子孃舞踊會……九八
○日タイ學生夏季錬成會……九八
○タイ國畫家個人展覽會……九八
○役員異動……九八
○會員異動……九八
○會員の消息……九九
○寄贈圖書……九九
○購入圖書……一〇二
○財團法人日本タイ協會總裁及役員並職員……一〇四

編輯後記

昭和十七年八月四日　大東亞會館に於ける本協會主催の日タイ同盟慶祝答禮特派使節歸朝歓迎晩餐會

日タイ學生の夏季錬成

日タイ兩國學生の身心錬成を目的として本協會は今夏奥日光龍頭に林間寮を開いた。今その樂しい思出を新たにする事としやう。

東照宮參詣→

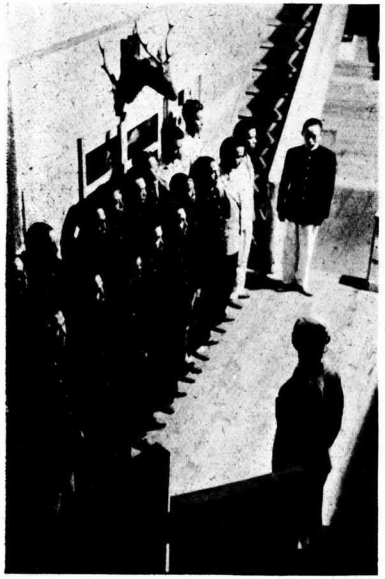
←湖畔散策

菖蒲ヶ

濱の水錬

ヴェランダで讀書に耽る

夜の點呼



使大クツレイデ。氏巡査部長。氏部孫田倉（りよ左列前廣寫）式準備章勳ノ〇事前響名國イタトツキラソ。氏部太悦住安（りよ左列後）。官記書等ーブツチナタラ。氏靈谷著。氏部太勝藤加。氏吾省川中。官武國海ンーブシソ。官武軍空淺

會報　第三十號

巻頭言

大東亞省と東亞の諸國

常務理事　川村博

大東亞戰爭は第二段階に入り、東亞建設の工作が槌音高く進められてゐるが、當面の急務は大東亞諸邦の協力關係を戰爭目的に向つて高度に組織化し大東亞の防衛を全たからしめると共に、長期戰必勝の體制を大東亞の規模において完成するにあることは何人にも明瞭である。帝國政府が一大英斷をもつて大東亞省の創設を決意したのは、この組織の確立とこれが運營の萬全を期するためであるのも明らかである。

然かし東亞諸國の組織化は民族搾取を排すると共に、世界舊秩序下において行きづまりを生じた諸國家諸民族の利己的對立關係の弊を是正するものでなくてはならぬ。これ新任谷外相が初の新聞記者會見において大家族主義を唱へ、大東亞諸國の獨立尊重とその有機的結合との兩全を期する倫理的新國家關係を說いた所以であらう。谷外相の談話は興亞の理念とその具現方式を語るものであり、大東亞省はこれを推進するものと思はれる。

興亞の大願によつて結ばれる東亞諸國をして我が傘下に蹶起せしめた動因は、日本の宣言した東亞解放の道義的意圖と、我が實力への信頼であつた。今や戰爭は一段と深刻な階梯に進み、東亞諸國の一層積極的能動的協力を必要とするに當り、帝國政府が大東亞省の新設によつて興亞の礎を愈々固くするの決意を示めし、又東亞建設の倫理的理念が谷外相によつて一層具體的に强調せられたことは、東亞諸盟邦の大いに滿足とし歡迎するところたるべきを確信する。

かくて興亞の理念が各種の形體をとつて逐次具體化せられむとするに際し、益々必要を感ぜしむる要件の一つは、內外をして興亞理念の把握を一層確實ならしむることである。そのためには理念の正しく且つ平明な表現を必要とする。第二の要件は、東亞諸國の傳統とその國民的要望に對して理解と同情とを深くし、もつて興亞理念の圓滿なる具現を期するに誤ちなからしめることである。

日本とタイ國

駐日タイ國大使館參事官　タウィ・タウェティクン

余は今回日本タイ協會から、同協會々報に寄稿の御依頼を受けたが、この著名な會報が、日タイ兩國間の兄弟の如き友好關係を增進する上に、極めて重要な役割を演じてゐる事實を思ひ、同協會の御依頼を非常に光榮とする次第である。同協會の貴き使命遂行上、些少なりとも何等か御援助が出來るならば、余の最も滿足とするところである。

日タイ間に存する極はめて滿足すべき國交關係は、遠く昔時に始まつたものであるが、其の間、兩國は未だ曾つて一回も衝突したことがない。「昔の同盟國」、「曾つての盟邦」若しくは「昨日の友は今日の敵」といふが如き言葉は、兩國間の輝かしき歷史の頁には存在しないのである。國家間の歷史に於て、かゝる事實は稀有のことゝ考へる。

それどころか、現在は勿論、過去に於ても、日タイ兩國は機會ある毎に常に扶け合つて來た。日本國民は、一九三二年の滿洲事變に際して、タイ國が國際聯盟の投票に棄權したことを忘れてはゐない。一九四一年のタイ・佛印國境紛爭に於ける日本の調停は、タイ國民の記憶に生々しく殘つてゐる。その他、日タイ兩國が眞實なる協力の精神を示めした多くの事例があるのは言ふまでもない。而して之等の相互扶助は、その儼然たる歷史的背景と相俟つて、自から兩國間の友情を固くしたのみならず、アジアの獨立國家としての兩國民間に、同情と親愛と同朋意識とを深からしめたのである。

大東亞戰爭の勃發、日タイ同盟條約の締結、次いでタイ國の米英兩國に對する宣戰によつて、兩國は戰爭完遂の不動の決意の下に、國運の前途を共同の運命に托し、茲に兩國間の協力はその最高潮に達したのである。

日本とタイ國が結局提携して行かねばならぬことは、今次戰爭勃發の遙か以前から豫知せられた既定の事實であつた。而して日タイ兩國の結合を促進せしめた力强い原動力は、前述したものゝ外、更に他のものがあるのである。就中最も有力なものは、次の二つである。

一、東亞新秩序の建設

二、アジア諸國民を歐米の桎梏より解放すること

一九三二年六月の無血革命以來、外國勢力就中アングロ・サクソンの經濟的束縛から離脱することが、タイ國の不斷の熱望であつた。經濟的隸屬は、總ての事に於て奴隸となる階梯であることは吾々の熟知するところである。而して世界のこの地域に於て、勞働及び莫大なる資源の飽くなき搾取が行はれて來たことは疑ひもない事實である。彼の印度、蘭印及び其他の不幸なる國々の實例は說明の要もない。事實は極めて明瞭であつて、如何に無智なる者にも能く看取出來るのである。所謂「白人の重荷」は既に過去のものとなつた。束縛されてゐた諸國民は、如何によく其の本當の意味を悟つたことであらうか！

今や日本は、アジアの新秩序を宣言するに當つて、アジア人の血と肉とを代償として、今日迄長く行はれ來つた經濟組織を一掃すると明言してゐる。而してアジア新秩序の基本原則は、生存し、生存せしめ、アジアの諸民族をして太陽の下各其の處を得しめるにあると、承知する。搾取は終焉し、原料及び生產品の公平なる分配が確立せられねば

ならない。かゝる原則は、タイ國民の要望と完全に一致するものである。否、獨りタイ國のみならず、搾取制度の怖ろしき經驗を嘗め來つたアジア諸國民の全幅的支持を得べきものである。舊秩序は、アジア諸國民に對して、計り知れざる損害と言ふべからざる苦痛とを與へた。彼等は、その富と道義心とその威嚴とを奪はれ、絶望と失意のみが殘された。故に日本の新秩序宣言は、正に其の時宜を得たものである。吾々、タイ國民は、吾等の「兄」の此の巨大なる仕事に對して、一部のさゝやかな役割を分擔せんことを願つてゐる。我等は、今や全アジアの國民が、日本の指導によつて希望の大地に達せんことを大なる期待を持つて待望しつゝあることを知るものである。而してタイ國は、この劃期的事業につき、日本と協力し、之れを援助しつゝあることを名譽とするものである。

タイ國史を繙く者は、吾々が獨立のために絶えず戰ひ來つたことを知るであらう。或る時は之れを失ひ、或る時は之れを回復した。而して獨立維持のために、吾々は甚大な代償を拂つて來た。吾々が獨立を措いて他に尊むべきものなしとの信念を持する所以は、全く之れがためである。獨立は、吾々にとつて總てを意味する。獨立なくしては、人生は無意義であり、無價値である。此の感情は、苟も自覺ある諸國民の總てが持つ感情であると、吾々は確信する。之れ吾々が他國民の獨立を尊重し、また他國民に對して、タイ國の獨立尊重を衷心期待する所以である。然るに我が大陸を一瞥するならば、其の隨所に奴隷と壓迫を見るのであつて、不幸なる彼等諸國民に同情を禁じ得ない。而かも彼等が吾々と同色同人種であることを思ふとき、その感一層切なるものがある。故に、任俠にして强大なる盟邦日本がアジアの被壓迫民族解放のため干戈を執ることを全世界に宣言したとき、タイ國は滿腔の熱意を以つてこの宣言を迎へた。タイ國が日本に與みして、今次聖戰に參加したことは、全く自然であり自發的であるのだ。吾々の戰爭目的は明確である。吾々はアジア民族のために、身命を献げんとするものである。日タイ兩國の萬歳を祈る。

泰國醫療の一瞥

醫學博士　磯部美知

泰の國史と醫學

泰國は印度支那半島の中央に位置し、北緯五度の所から大凡そ二〇度位の所に達し、東經九七度より一〇五度のほとりに及んで居る。

讀者は最近の東亞の現勢から一度は詳かに共榮圏の地圖に思ひを凝らしたことであらう。長政の名前以外に泰國に就いては誰も知らなかつた所の此の國が、俄然最近檜舞臺に登場して、單に東亞に於てのみならず世界の視聽を此の半島の王國に集むるに至つた。日本は東亞の盟主として是非是等南方諸民族の指導扶掖に當らねばならないから、勢ひ泰國にも大きな關心を寄せざるを得ない。從つて我々日本の醫人は、醫療的方面から一應泰國を吟味する必要がある。

由來泰國の成長はメナムの流れに沿うて發達した。漸く國を成す頃には既に印度の文化が相當多量に攝取消化されて居た。卽ち宗教、藝術、科學、文學等の渡來があり、文字も亦傳へられた。八世紀頃回教徒の擡頭に遭ひ印度の文

化劣勢となり、その頃又北方蒙古族が支那に侵入したので、その結果多數の支那人がカムボヂア及び泰國に移動した

この交、元朝から泰と交誼を結ぶべく大使さへ派遣した（一二八二年）。當時スコタイは此の國の首都であつたが、爾來支那の文化が泰國に流入し始めた。八世紀の頃始めて獨立が完成され、カムヘング王がスコタイ王朝を建設し、カメーン（Khmer）と戰つて大いに威武を振ひ、全メナムの溪谷を平定、馬來半島のリゴールに迄勢力を張つた。この王期は八―一四世紀迄續いた。畢竟カムボヂアからその羈絆を斷ち切つて獨立したのである。カメーン文化がその沒落後、アユチャ王朝に傳はり、泰國の今日の文化の根幹を成すに至つた。榮華百年、束の間に過ぎてスコタイ王朝は新たにアユチャ王朝に變つた（一三五〇年）。一五世紀以來泰人はビルマ人と屢々事を構へ隨分長期に亘つて戰爭をした。一八世紀に再びビルマ人の侵入に遭ひ、四年の後アユチャは陷落し殆んど完膚なきまで破壞された。支那人の義に燃ゆる英雄兒タクシンが敢然立つて泰の殘兵を集めて、ビルマ軍を掃蕩し、大いに武勇を誇つて王位を踐んだが、少しく精神に異常を呈し、たしか在位一五年にしてその將チャクリーが之に代つて泰國王位に上つた。チャクリーはカムボヂア遠征から歸つて踐祚した（一七八二年）。そして都を現在のクルンタープ（盤谷のタイ名）に奠めた。現王朝の始祖である。

歐洲の泰との交渉を持つやうになつたのは葡萄牙人が最初訪れてからのことである。一五一一年頃修交の爲め來り貿易の許可を得た。續いて澤山の葡萄牙人來着、アユチャに土着するに至つた。當時ビルマと交戰中であつたが、百人計りの同國人は直ちに泰側に應援して大捷を博し、泰國王は感激して彼等に賞するに土地を以てした。同時に又教會の建設を許した。即ち基督教もこの時初めて泰に入つたのである。

由來、葡萄牙政府は東洋に關心深く、常に勢力を遠く張らむと念願した。基督教を弘めながら葡萄人が遠く到來したる土地には、同國人を其處に繁榮せしむる樣努力した。一面結婚政策により葡人と土人との結婚を奬勵し、子供が葡人として基督教徒として生れることを待望した。

葡萄牙のかゝる政策は印度、セーロン、泰その他の國々に多數の葡人の進出を見た。

ビルマ戰爭の勃發より葡人は泰國に鐵砲と火器製造と築塞法とその戰時使用法とを敎えた。當時泰王から日本の將軍に火器が進物として送られ、將軍から非常に感謝された（一六〇六年）。又一六〇六年に和蘭人が初めて泰國に現れた續いて一六一二年には英人、一六二一年にはデンマーク人が泰國を訪問した。彼等は主として船舶を作る技術を以て此の國に見えた。佛人は越えて一六六二年に最も遲れて到着した。彼等は基督教の宣傳弘布にやつて來たのだけれども、貧困者を勞はり、病人をよく世話をし、又他面刑餘の人を救濟した所から泰人に非常に歡待された。プラナライ王の時であつた。王は性非常に寛大で進取的であつた爲め、宣教師をあつくもてなし、教會を作る許可を與へて學校も立派に之を起させた。佛蘭西はプラナライ王をはじめ、その臣下をうまくゆけば基督教徒に改宗せしめんと企てたギリシヤ人フオルコンがその聰明の資を以てプラナライ王の首相として活躍し、大いにその敏腕を揮つた。歐洲の醫師の處方が此のプラナライ王の爲めに始めて用ひられたと曰はれる。何か外用の軟膏らしきものであつたらしい。その後佛蘭西に於ては那翁戰爭や革命の勃發があつて國狀に大きな變革があり、泰との交渉は爾來四十年間計り全く途絕えた。

西洋醫學の渡來

支那は地理的に泰とは惠まれた環境にある關係上、此の佛蘭西との交通停止狀態の間にその往來一層繁を加へ、又支

那は實に東洋に於ける唯一の大國なりし爲め、依つてその泰國に與ふる所の影響寔に甚大なるものがあつた。印度も曰はば一葦帶水の隣邦で、泰にとつてはその關係又密なるものがあり、從つて相往復する所自ら頻繁であつた。殊に印度人の一部は商賈の才敢て支那人に讓らざるものがあるので、南方一圓にその商勢を張つた。泰國内に於ても印度商人の勢力決して侮り難きものあるはこの理由による。

一八〇九年ラマ二世の登極あり、この交歐洲との交渉復活を見、米國宣教師も亦一八一八年に泰國に現はれた。本來米國は支那人を對象として支那にその基督教の弘布を目的とした。泰國に多數支那人の在住するを聞きて、茲にその宣教師を泰國にも派遣するに至つた。米人は印刷術を泰人にも教えた。たしか活字などの、色々曲折を經て泰國に輸入されたのも此の時代である。

一八四二年の英清戰爭は泰の人心を強く刺戟した。三人の皇族は支那人の强大を信ぜず、將來西洋の文化が江河の決するが如く東洋に横溢して、必ずその勢ひの下、東洋民族は雌伏せざる可らざるに至るべきを憂慮した。即ちモングクット王兄弟の達見は先づモングクット王とその弟二人は西洋の知識の急速なる吸收によつて、將來の不測の災害に備へねばならないと深刻に考へた。彼等は造船術や砲兵の兵術などを專心研究し、傍ら英語を非常に勉强した。泰には此の外二人の篤學の士があつて、その一人は西洋の醫學を學んだ。即ちそれはクロムウオングズ親王で、この方は米國宣教師から醫學を修得した。これは泰人として始めて西洋方を學んだ第一人である。他の一人はナイモート・マテイヤクーンで、此の人は化學と機械學とを學んで造幣局長の椅子に就いた。以上五人が當時の最も尖端的な親歐派の所謂歐米知識吸收派の急先鋒であつた。

其後時移り星變りて英國の勢力が次第に增大し、泰國の皇族を始め貴族富豪の英國に笈を負ふ者簇出し、チャクリー王朝隨一の英邁と讃へられるチュラローンコーン王の治世となつてからは、文物一途に向上發達し、泰國はその相貌を一變した。

醫療も在來草根木皮による印度の民間療法的、或は支那より傳はれる漢法の療法に甘んじて居た民衆も、洋方の優れたるを悟り、殊に專制王國の常として國王の聰明な教育の革新により醫科の設立を見、その綜合大學の一分科としてメナム・チヤオピヤーの西岸のシリラージ病院内に之を置かれた。

醫學教育の發祥

醫學教育は即ち一八八九年に病院内に發祥し、一八九三年に九人の卒業生を世に送つた。越えて一九〇一年に官制を以て茲に始めて醫學校の名を冠せしめるやうになつた。一九〇二年迄はその課程は三年修業で、一九〇二年以來四ケ年に延長せしめた。次で一九一一年からは之を五ケ年延長し、一九一五年よりは六ケ年に改めた。一九二三年諸方の寄附とロックフェラー財團の共同工作により政府の管理する所となり、六人の派遣教授が大學にデヴューした。是等の教授は内科、外科、解剖、生理、病理、産婦人科、細菌、藥物、生化學を分擔した。醫學校の入學は政府の中學校の第八年（最上級）の修了者に限つた。物理化學、生物學、英語を專門學校程度に於て二年間修得せしめられる。二年間の豫備的醫學教育は科學部に於て教育せられ、前記の派遣教授を加へてその組織は再編成されたものである。四年間の實際の醫育はシリラージ病院に於て施される。此所には又醫學圖書館を附隨し、二五〇〇部に達する參考書を藏し、その閲覽室には常に約八〇種の醫學雜誌を備へて居る。病院の幹部は學校の幹部を兼ねて居る。醫學四年間の講義は四六二〇時間を數へる。四四〇〇時間が實際指導される時間である。學期は五月十七日に初まり三月十五日

に終る。X光線學と衛生と公衆衛生とは二人の大學教授と內務省衛生局よりする三人の教授により擔當されて居る。細菌學と寄生蟲學とは病理學に包含され、二學年全體を通じて教授される。

醫學校教授群は三〇人の幹部、若干の助手より成つて居る。學生は二〇人より成り一九二九年より女醫學生も採用するやうになつた。學生の年齢は男は一七歳より二四歳迄、女は一九歳より二二歳までである。卒業生はMBと曰ふ稱號を附與される。その後の經歷や希望により大學にて審査されゝば更にMDの稱號も贏ち得られる。海港檢疫も一九〇一—一九〇五年の間に設定され、相當の權威を有つて居る。パストール研究所は一九一一年に建設せられ、この年赤十字の支配下に痘苗研究所と共に入れられた。ソワパア記念研究所もこの組織の上に作られた。國際健康局や、健康團體や彼のロックフェラーの醫學部は泰國の公衆衛生に非常に大きな貢献をした。

熱帶は、もの凡て繁榮する土地柄である。殊に寄生蟲は此の天惠の荒野に於て低文化民族の間に思ふがまゝに繁殖する。熱帶の醫療對象の大部分は寄生蟲問題にかゝつて居る。マラリアの如きは則ち血液寄生蟲の尤なるものである腸內寄生蟲もそれは夥しい數に上つて居る。蛔蟲も蟯蟲も十二指腸蟲も或は日本の何倍あるか判らない。泰國に於ても十二指腸蟲はその國民的惱みであつて、一九一七年に十二指腸蟲驅除陣營を張つた。ロックフェラー財團の專門家もその調査研究に滯在した。泰國には所謂熱帶病と稱する獨特のものは極めて罕で、只だマラリア、フラムベジア、アメーバ赤痢などが屢々見られるに過ぎない。

他の熱帶諸國にある所の例へば睡眠病乃至黃熱、又は再歸熱と曰ふ種類のものは殆んど未だ見つからない。檢索が不充分の爲めか乃至は實際泰國には類例の少ない疾病が、將來の研究に俟つものがある。乾燥期にはよくペストやコレラや細菌赤痢が猖獗する。フキラリヤ、ギニア蟲、象皮病、又病原菌類による皮膚病も殆んど珍しいと考へてよい

洋化した現代醫學

現今は全く歐化して泰國の治療なるものは我が國と等しく洋方に變つた。そして赤十字病院、それは獨逸の軍醫中佐故シェファーのプランに成れるもので、最も斬新の設備をもち全く堂々たるものである。盤谷に於ける數個の大病院の外に、地方にそれ〴〵小規模の病院をもち、癩病々院を始め蛇の飼養所（之は世界第二、第一は南米のオスワルド・クルーズにあるもの）も作つて毒蛇の咬傷の治療に成功して居る。

學校衛生、軍陣衛生、獸醫衛生等も相當に努力して、今や多々見るべきものがある。保健所の數も既に二〇〇を越ゆるに至つた。基督教病院に佛蘭西系のもの、亞米利加系のもの等があり、是等は相當歷史があるので泰人間には夙に知られて居る。

泰國に於ては最近醫藥の分野に職とする人々を全部二種に分類して之を一等醫及び二等醫に分かち、一等醫と稱するものは正規の醫育を受けて立派に醫療行爲がやつてゆけるものを意味し、二等醫と稱するは要するにわが古への漢方醫の類を包含する。後者は卽ち極めて低級の曰はゞ助手級の人々である。注射技術も何も出來ないし、又はしては不可い人々で、藥劑師もこの中に含まれて居る。泰國の新しき醫育を經たる有資格者は、漸く五、六百名の域を上下する。他の所謂醫者と稱する草根木皮黨は、何千あるか想像する事も出來ない。泰國人にして醫を學ぶもの、多くは始め英國に留學し、その後獨逸、佛蘭西、瑞西、米國、比律賓、最近日本にも現はるゝに至つた。泰國滯在の西洋醫は獨、佛、英、印度、伊太利、米國、丁抹、日本等一時は多數之を見たが、今はあるものは歸國し、あるものは歿しその數を減じた。日本の醫者は尙ほ數人留つてその聲價を高めて居る。醫療藥品材料等も價格の點より又地理的に便

利な關係上、本邦より泰國に輸入されるもの甚だ多かつた。

今度大東亞戰爭によつて日本が揮つた正義の大鐵鎚は亞細亞同根民族に人生の再出發を促した。大東亞の平和の基礎工事は、その端緒に於て既に吉左右よく一〇〇%、情勢は決定的我が大勝利に變つた。泰國は將來凡そ日本に教えを請ひ、その國土の繁榮を企圖せねばならない。決して又斷じて迷ふ可らずである。最近泰國の醫業を擁護する意味から外國の醫師の泰國内に開業する際には、語學（英語又は泰語）の試驗を受けなければならない制度が設けられたが、之は恐らく蘭印政廳の既往に採つた方法をそのまゝ模倣蹈襲したに過ぎない。之に由つて泰國醫人の生活の保護を圖つたものである。泰としては苟くも瞬時もその國家の成長發展を庶幾ふ國柄にあるに關はらず、斯ゝる逆效果を招く如き手段を講じたることは蓋し賢明なる策ではなかつた。寧ろ進んで、殊に我が日本の優秀なる醫人を自由に導入して衆庶の健康增進、疾病治癒の大策に活動せしめねばならぬ筈である。

東亞の大勢は近時激變した。この際日泰兩國醫人の大東亞保健工作協調も焦眉の急に迫つた問題となつて來た。識者の活動が待望される。

南詔の文化（四）

前嶋信次

（本文中の括弧内は譯者の附加と補註である）

鄭回德化碑々文（承前）

「天寶十一載（西紀七五二、ここでは尙唐の年號を使用してゐる。）正月一日に（チベット王は）鄧川にあつた詔（南詔王）に詔書を下し贊普鍾南國大詔（ツアンポ・チユン、卽ちチベット語の王弟の義と、南國大詔は南國大王の意である。）の稱號をあたへ、長男鳳迦異には大瑟々告身・都知兵馬大將を授けた。（註、大瑟々告身とは大瑟々のしるしを身に帶びることで、告身とは官等の意味であらう。チベット人はこの瑟々を非常に尊重し、その切子玉を婦人は髮飾りとしたが、一顆が良馬一頭に價したと新五代史に見えてゐる。（…卷七四）それで、このものの別名を馬價珠とも云つたと云ふ。それでは瑟々とはどんなものかと云ふと、エメラルド（綠松石、祖母綠）の一種であるらしく、原音 sirsir でペルシヤ系の言葉であらうと云ふ說もある。尙此についてはローフアーのシノ・イラニカ頁五一六以下、又は章鴻釗著洛氏中國伊蘭卷金石譯證頁六三―七一を參照されたい。

南詔には官等としてその外に大頗彌告身、大金告身、小金告身、大小銀告身、大小銅告身等があつた。恐らくは大瑟々告身に對し、小瑟々告身もあつたことと思はれる。都知兵馬大將とは勿論、國軍總指令と云ふやうな意味であらう。贊普鍾南國大詔と云ひ、大瑟々告身都知兵馬大將と云ひ、南詔、チベット、支那各語の混合した稱號であることに注意される。)其他凡そ官僚に列するものは、皆特別の恩顧を蒙つた。そこで我々も山河の長久にかけて同盟の約を守り、永く互に城となつて助け合はんことを誓つた。そして年號を改めて贊普鍾の元年とした。(これより南詔は唐の年號を捨ててゐる。)

翌贊普鍾の二年に漢帝(唐の玄宗)は又漢中郡の太守たる司空襲禮と內使の賈奇俊に命じて、師を帥ゐて再び姚州府を置かしめ、將軍賈瓘をその都督に命じた。皆の者が云ふには『支那は德を以つていつくしむのでなくて、暴力を以つて爭つてくるので御座ゐます。若し速かに(この禍根を)とり除けなければ、恐くは後世の患根となりませう。』そこで遂に軍將王兵各を派して唐の糧道を絕たしめ、大軍將洪光乘等を派して、神州(チベットを指すと思はれる)の都知兵馬使たる論綺里徐などと協力して姚州府城を圍ましめた。信宿いまだ踰えずして(註、二日を要せずして)まるで朽木をぬくが如く破つてしまつた。城將賈瓘は手を背中にまはして縛つて降參し、その士卒は悉く逃亡してしまつた。

翌三年(西紀七五四)に唐はまた前の雲南郡都督兼侍御史李宓や、廣府節度(廣東總督)何履光、中使薩道懸等に命じて秦隴地方(陝西省)の英雄豪傑や、安南(今の佛印東京地方)の子弟を召集し、軍營を隴壩方面に設けしめ、廣く軍威をはつた。そこで舟棹も準備され、水陸二道から並進せんとはかつた。わが方でも、これに對し軍將王樂寬等をして軍を潛行せしめて、造船中の敵軍を襲はしめたので、伏屍は毘舍の野を蔽ふ有樣であつた。それでも李宓は尙、自軍の力を量らずに、進んで蓬川に逼つて來た。その時神州(チベット)の都知兵馬使(軍司令官)論綺里徐が來援し、すでに巴蹻山まで進んで來た。我が政府は大軍將段附克等に命じ、(論綺里徐の援軍と)內外相應じて奮戰せしめた。(競角競衝。)敵軍は弓は張る暇もなく、劍も拔くことさへ出來ぬ有樣で、白日ためにくらく、紅塵天をかげらし、血は流れて川となり、屍は積んで河をせきとめた。敵の三軍潰滅し、總大將は江に沈んで死ぬと云ふ次第であつた。

詔(王)の云はれるには『(あの者達は)生きては禍の始をなしたけれども、一度び死ねばもう怨恨も終りとなつた。前の非行のみを考へてゐて大禮を忘れてはならぬ。』と。遂に亡將等の屍を收めて之を葬り、もとの厚誼を忘れぬようにとした。

(贊普鍾)五年(西紀七五六)に范陽の節度使安祿山は河洛(河南省)をぬすんで此に據つたので、開元帝(玄宗)は都を棄てゝ江劍(四川省)に蒙塵された。

(その時に)贊普(チベット王)は御史の贊郎羅を恙結に遣はして、(南詔王に)勅書を齎らさしめたが、その中で云ふには『德を樹てるにはその成長に對し、また惡を去るにはその根本を除くことに努むべきである。(四川省南方の)越嶲や會同地方が我に對し策動する所が多い。これに對する對策をめぐらすことこそよけれ。』と。詔(王)は恭しく上命をうけたまはり、早速大軍將洪光乘、杜羅盛、段附克、趙附于、望羅遷、王遷羅奉や、淸平官趙佺鄧等をして細於藩(藩とは軍の意か?)を統べて昆明路より進ましめ、(チベット方の)宰相倚祥葉樂、節度尙檢贊等と共に越嶲を伐たしめた。詔(王)は親しく太子藩を帥ゐて(註、太子藩とは太子直屬軍の意味か?)ひしひしと會同を圍んだ。越嶲は頑强に抵抗したので、(その住民は)殺戮されたが、會同の方は降を請うたので害を受けなかつた。多くの

子女や玉帛等を得て、百里もの道が、これらで塞がるほどであつた。牛羊や食糧の貯藏は一月分もあつた。

六年（西紀七五七）唐期はまた越嶲府を復興し、楊庭璡を以つて都督とし、また臺登（地名）に築いた。贊普（チベット王）の使が（南詔）に來て云ふには『支那は越嶲郡を復興し昆明を援けて（南詔の支配から脫せしめんとして）ゐる。もし、かさねて之を除き去らねば、恐らくははびこり茂つて處置なきに至るであらう。』と。（南詔王は）起つてこの明旨を奉じ、早速に長男鳳迦異を遣はして軍を瀘水に駐して、善處せしめ、大軍將楊傳磨伴等をして軍將（チベット側ならん）欺急歷如と策應して、數道ひとしく進み入らしめたのである。そして越嶲は再び平げられ、臺登は肅清され、都督は捕虜となり、兵士も盡く虜となつた。ここに於いて、邛部（四川省の地名）で兵の行賞を行つたが、唐軍の幹部は皆逃げはしり、昆明城では族を引き下げ、傾いた城で、平身低頭してゐると云ふ有樣である。これぞ謂はゆる家を紹ぎ業を繼いで、世々賢人に乏しくないと云ふにあたり、昔の十萬横行（註、前漢の上將軍樊噲が、臣願はくは十萬の衆を得て、匈奴の中を横行せんと云つたと云ふ故事を指す。）七擒縱略（註、諸葛亮孔明が孟獲を七擒七縱した故事を指す）で名高い人々も（南詔王の偉業に比較すれば）まだ〳〵大した事はないのである。

ここに尋傳と云ふ國があつて、土地豐沃で住民稠密であり、物產も夥しく出る。（註、尋傳は上ビルマを指す。當時イラワヂ河の中流方面には驃國があり、その北にこの尋傳があつた。尋傳蠻と呼ばれたその住民の風俗は絹絲、絹布なく、荊棘の上でも平氣で裸足で歩き、弓矢で猪を射て之を食ひ、戰鬪の際は竹を網んだ兜をかむる。またこの種族の西方には裸蠻、又は一名を野蠻と云ふ種族があり、山野に散住し、首長がない。木皮を以つて身體を蔽ひ、野耕を知らぬとある。（唐書南蠻傳）しかしこの碑文ではビルマ全體を指してゐる如くである）ここは南は渤海に通じ（ベンガル灣を指すとすれば溟海と云ふ方が妥當であると云ふ。）西は大秦に近い。（大秦は東ローマ帝國を指すとするのが通

說である。勿論、鄭回等が大秦についてはつきりした知識を持つてゐたか否かは疑問である。）そして此の國は開闢以來聲教の及ばぬ所で、太古の伏羲氏以來、討伐を加へたことはなかつた。詔（王）はこの（風俗を）革めて衣冠の風を入れ、（その民を）化して禮義を知らしめんと考へられたので、十一年（西七六二年）の冬に官僚や軍の將星等と共に木を伐り、道を通じ、舟を造り、橋をかけ、耀すに威武を以つてし、さとすに文辭を以てした。恭順の意を表して降參するものは慰撫し、安居せしめ、反抗するものは、頸に繩をかけて一連に繫いでしまつた。しかしその愚をあはれんで、縛を解き、形勝の地を選んで城を置いた。（尋傳の西方の）裸形（裸蠻）はこちらから討伐しないのに、自ら進んで投降して來た。祁鮮（註、唐書に祁鮮の山の西に瘴癘多しとか、太和祁鮮より西などと云ふ言葉が見え、雲南とビルマ境の山地の一部を指すらしい。）も風を望んで來り降つた。（舟をつくつてとは、イラワヂ河を舟によつて下つたものであらう。）

また東方の安寧も雄鎭で、ロロ諸部族の要衝であり、その山は碧雞山に對し（註、碧雞山は今の昆明市の南西三十支那里にあつて、安寧と相對してゐる。金馬、碧雞と並稱して雲南の名勝になつてゐるが、金馬は黃金、碧雞は碧玉を意味し、此等の產出を禱るために金馬、碧雞をまつた廟が存したのであらうと思はれる。）、その波は碣石をめぐつてゐる。（註、滇池が汪洋として安寧の東方に展開してゐることを指すのであらうが、碣石は渤海灣にのぞんだ半島であるから、此處では修辭上に用ひたのではないかと思はれる。鹽池（安寧の西方に鹽井である。）で產出に努むれば、その利は牂牁（註、貴州省思南の邊）あたりまで及ぼすことが出來る。城邑は延々とつらなつて、その形勢は戎や僰の諸族を連ねてゐる。（註、僰は元來はパイ、又はタイ族、卽ち南詔の中心部と同族のものを指すに使用された場合が多い。）（王は）そこで城監と云ふ役人を置き、離散したものを集めよせたので、遠近相たすけ、村々の門は櫛比する

と云ふ狀態となつた。（註、此の項で 南詔が唐から 安寧を奪ひとり、その統治に大に成功したことを述べてゐる。）

十二年　西七六三）の冬、詔（王）は政務のすきを見て、領内を巡視し、民の風俗を觀察し、隱れて暮すものをあはれみいたはつた。昆川（今の昆明市）に足をとどめ、自然の形勢をつらつらと見て言はれるには「山河は國土の藩屏となすべく、水と地とは人民を養ふことが出來る。」と。

十四年（西七六五）の春には長男鳳迦異に命じて昆川に柘東城を置かしめた。（註、今の昆明市のある所）そして二人の詔（ここでは地方長官の意味ならん。）を居らしめて、鎭撫にあたらしめた。ここに於いて、その威勢は步頭地方までを恐れさし、その恩德は曲靖の民を心服させた。命令が一度び發せられると、皆翕然として俯き從ふのであつた。

我等の王は氣は中和を受け（註、中庸に中なるものは天下の大本なり。和なるものは天下の達道なりとある。）德は（天地の如く）覆育の大きな力を含み、才は人の右に出で、その分辨は世に雄高を稱せられ、その視野は萬尋の高きに立つてゐるが如く遠きに及び、謀をめぐらせば勝を千里の外に決し、好機を見て動き、利に因つて功を興すのである。その爲す所は神意にかなひ、まるで天啓によつて動くが如くである。故に能く城を攻め敵を挫いて勝を取ること神の如くである。又、危を以つて安きに易へ、禍を轉じて福となしてゐる。祖先の業をつぎて更に擴大し、王業を擴張し、南面して坐して自ら「孤」と稱し、東方を統べて、その主となり、しかる後、文を修め武を習ひ、官としては百司を設け、尊き者と卑き者とをそれぞれその正しい位置に置き、位階は九等に分ち、敎は三敎（儒道佛）をゆるし四方の門を開いて外國と友交した。陰陽は順調にととのひ、日月もその役目を誤らない。賞罰は明で、奸邪は跡をひそめた。王はまた天地人の三才の理に明通してゐて、それによつて禮法を制定し、六府（水火金木土日）を用ひて國家の筋道を立てた。その信義は豚魚に及び、恩は草木を潤ほした。汎濫した水をふせぎとどめ、高原を稻や黍の田とし、貯水池を開き、低い地に植林して住みよくし、貧困者を富める者にし、物產を交易して有無相通ぜしめた。家々も五畝の桑園を持つほどに生計が豐になり、國には九年間の收穫の貯が出來た。深く博い恩惠は極めて卑賤の者にも及び（蕩濊之恩累沾蠢動）、寶玉や絹織物は六十歲を越す老人達にもれなく惠み與へられた。（珍帛之惠徧及耆年）險要の地を設けて非行を防ぎ、要地によつて堅城の固きを起した。靈水は疾疫をのぞき、重巖は沐浴するための泉を湧き出した。越賕（今の騰越＝モーメイン）の郊外には天馬が生れ、大利（大理）の流水では錦をさらすことが出來る。西の方は尋傳（ビルマ）を開き、祿郵地方からは麗水の砂金がとれる。（註、麗水は揚水江の上流、別に金砂江の名がある。）北は陽山に接し、會川からは（四川省會理府附近）からは瑟々の寶がとれる。（瑟々は前文にも述べた如くエメラルドの一種である。唐の樊綽の蠻書には會同川に瑟瑟山があつて錫を出すとあり、明皇雜錄卷二、杜陽雜編等に雲南から藍寶石を產するとある。前者は名が瑟々山であるが錫を出す所とあり、後者は雲南のどこから藍寶石（エメラルド）を出すのか明記してゐないが、この碑文に會川から瑟々が產するとあるのを見れば正に瑟々山とは、この寶石をも產する所から出た名稱であることと、その產出の位置とが明に知られるのである。）南方の國境近くの諸民族は王の下に集り來り、敗殘國の詔（王）達は皆外臣とならんことを願ひ出た。東方のロロ諸部族は皆歸屬し、步頭方面は南詔の內地領となつた。都を建て、國防を嚴にした。銀は墨莠の鄉に出た。（師範の滇繫卷一に「威楚は蒙詔の時にあつては銀生墨莠の鄉となす。よつて銀生節度を置く。」とあつて墨莠は威楚の地に當ると云ふ。威楚は今の楚雄である。南詔の六節度使は、この銀生に、拓東、弄棟、永昌、劍川、麗水であつた。楚雄は現在はどうか知らないが、既に南詔時代から銀の產地として知られてゐたことは此の碑文によつて知られる。）王は暇をうかがつては領內を巡視し、駕

は洞庭の野に憩うた。(これは修辭上用ひたので、實際に洞庭湖畔まで來たのではあるまい。)(これまで述べて來たことは)けだし人は傑出し、地は靈に、物産はすぐれ、氣は秀麗なるによるものであらう。

ここに於いて犀象や珍貴な品々等獻納品は悉く來り、東西南北戰塵はあがらずして泰平となり、遠近となく盜賊の恐れはなくなつた。人民は擊壤鼓腹して泰平を樂しみ、よく首を卬南にあげ、やすらかに海表をのぞめるのである。

(かくの如き大業は)どうして我が鍾王(鍾はチベット語チュン、即ち「弟」の義で、チベット王の弟の誼ある故にかく云つたものであらう。)が獨力でなしとげたものと爲し得るであらうか。實にわが聖神の天帝贊普(ツアンポ即ちチベット王の稱號)に御賴りした爲であつて、その德は無限にひろがり、その威は有截(よくととのひし國の義)に加はつてゐる。誠に春雲が蔽へば萬物があまねく潤ひ、霜風ふき下れば四海は波だつて凋衰するのである。かくの如く(チベット王は)亂を爲すものを併せ、道理にくらいものを攻め破り、京邑(都)を定めて民をやすませ、暴きものを包含して自ら亡び行くものを輕侮した。漢帝(唐朝の君主)に書を送つて友好をつづけた。

時に(南詔の)清平官段忠國や段尋銓等が皆一齊に奏上するには『國があつて、道理の最も正しいことをするのは、君王の美となるものであります。君王の美となるものがあるのに、それを御奬めしないのは臣下たるものの過失であります。それ德はそれを以て功を立つべきもの、功はそれを以て業を建つべきもの、業が成つて之を記錄にとどめなかつたならば、どうして後をつぐ人々が(祖先の偉業を)知ることが出來ませうか。よろしく石を切り、碑文を彫り功業を誌し、德を稱へ、以つて不朽に傳へ、將來に達せしめなければなりませぬ。』と。けだし我等(段氏)は昔から代々中國に仕へたもので、八王は晉朝建設の大業に功があつたものである。(宣帝の兄弟八人は晉の創立に功があつた。この八王と段氏とは特別の關係があつたのであらう。)(段氏の功績は)鍾銘(に鏤られて)代々に傳はり百世の下、當朝に確然と定まつて居る。ただ我々が生れたときは(中國に正しい)天なく、衰世にめぐり合はして居たが、先君の遺德に賴り求舊の鴻恩に浴し(これは段氏が先代の王皮羅閣の時に拔擢されたことを云ふのかと思はれる。シヤヴアンヌは先君の遺德を段氏の祖先の遺德と解釋してゐる。又、求舊の恩とは書經に「人はこれ舊を求む。器は舊を求むるに非ずして、これ新」即ち人材を求めるには舊家の出ほどよいが、器物は古ものよりも新しいものほどよいとあるから出てゐて、段氏一門がその名門の故に南詔王家に重用されたことを云つてゐる。)改めて、清平官の重任に置かれ、(王の)耳目として用ひられてゐるのである。されば、今、心持は古代の吉甫の如くして(その作にかかる詩經大雅中の數節の如き名詩を以つて君王を頌へたいと思ふが)周詩(の如き高い格調)には到底及びもつかぬことを愧ぢる。しかし乍ら、せめて奚斯にならひ(詩經の)魯頌に比肩する聲調をなさんとは思ふが、功を紀し績を述べるは誠に大仕事(鴻徽)である。しかし、ここによく自身等の不才を顧みつゝ僅に敢て(國主の)風烈を歌はんとするのである。

其の詞に曰く

降祉自天　榮えは天より降り來て
福流後孕　福は後世に流れゆく
瑞應匪虛　瑞祥あればしるしあり
正祥必信　空しくすぐることはなし
聖主分憂　聖主は民と苦をわかち
遐荒聲振　遠きえびすも名に恐る

(一)

襲久傳封　古き國土をうけつぎて
受符兼印　割符印璽も缺くるなし
兼瓊秉節　章仇兼瓊大命うけて
貪榮構亂　榮をむさぼり世をみだす
開路安南　安南にゆく路ひらくとて
攻殘東爨　ロロのやからを攻め破る
竹倩見屠　竹靈倩が殺されて
官師潰散　唐のいくさは潰えたり
賴我先王　我が先王の力にて
懷柔伏叛　そむきし者を手なづけぬ
祚不乏賢　幸多き國賢人多く
先猷是繼　祖先の偉業はつがれゆく
郡守龍隨　郡守李宏の腹黑さ
貶身退裔　遂に遠きに追はれたり
禍連虔陀　されど憎きは張虔陀
亂深豎孼　深き亂れをかもしたり
殃咎匪他　とがをうけしは他ならで

塗豕自瘞　どぶどろゐの子運のつき
仲通制節　鮮于仲通權をとり
不詢長久　永き計りをなさざりき
徵兵海隅　津々浦々に兵をめし
頓營江口　營をつらぬる江口に
矢心不納　かたくな心きかざれば
白刃相守　白刃をとりて相向ふ
謀用不臧　よからぬ謀せしために
逃師夜走　その兵達は夜逃しぬ
漢不務德　漢朝德を修めずに
而以力爭　力を以て爭ひて
興師命將　いくさびとらを動かしつ
置府層城　府を置き城をかさねけり
三軍往討　わが三軍がゆき討てば
一舉而平　たゞ一戰に平ぎぬ
面縛羣吏　縛り上げたる役人ら
馳獻天庭　吐蕃の王にさし出しぬ

李宓總戎
猶尋覆轍
水戰陸攻
援孤糧絶
勢屈謀窮
軍殘身滅
祭而葬之
情繇故設
贊普仁明
審知機變
漢德方衰
邊城絶援
揮我兵戎
攻彼郡縣
越嶲有征
會同無戰
雄々嫡嗣

(一八)李宓代つて兵をすべ
前のわだちにかかるとか
水攻めくが攻め推寄せたれど
たすけは絶えて糧もなし
勢つきて策もなく
軍はほろびて身もむなし
あつく祭りて葬りしは
わが情あるあつかひぞ
(一七)吐蕃のツアン・ポ仁また明
時局の變をよく知れり
漢德まさに衰へて
邊城のまもり援なし
われ軍兵をはげまして
かの郡縣を攻めたつる
越嶲ここに征せられ
會同敢て手向はず
勇略嗣をつぐ閣羅鳳

高名英烈
惟孝惟忠
乃明乃哲
卭濮一掃
軍羣變滅
觀兵尋傳
擧國來賓
巡幸東爨
懷德歸仁
碧海效祉
金穴薦珍
人無常主
惟賢是親
土宇克開
煙塵載寢
鼙擊犂坑
緋熙羣品

その名もたかき英材にて
これ孝これ忠
明また哲
卭濮はここに一掃され
いくさも土地も滅びたり
(九)ビルマの國に兵みそなはし
全土を擧げて服屬す
親しくめぐるロロの國
德になつき仁に歸す
青海原は海の幸
黃金の山は山の幸
民それぞれの主を持つも
ただ賢王ぞ心服さる
(十)土地は開かれ
戰塵ひきて
民業さかえ
人みな富めり

出入連城　町々にぎはひ
光揚衣錦　綺羅はかがやく
業留萬代之基　あゝ、その業はよろづよのもと
倉貯九年之廩　倉は貯ふ九年の糧を
明々贊普　聰明なるツアン・ポ
揚干之光　武器はかがやく
赫々我王　赫々たるわが王も
實賴之昌　げにその偉光に賴りたり
化及有土　教化は諸國の王等に及び
業著無疆　業績じるくかぎりなく
河帶山礪　河かれ山の消ゆるまで
地久天長　天地と共にながからん
辨稱世雄　分辨この世に卓越し
才出人右　才能すべての右に出づ
信及豚魚　信義は及ぶ豚魚のたぐひ
潤深瓊玖　情愛は紅碧玉のこまやかさ
德以建功　德化を以つて功を建つ

是謂不朽　これこそ眞に不朽のわざ
石以刊銘　いま貞石にえりしるす
可長可久　行末ながくのこれかし。」

鄭回德化碑は以上で終つてゐる。前節に述べた如く、南詔と云ふ大王國が後世に殘した文獻としては、此が代表的なもので、その歷史、文化等種々の問題を研究する根本的資料である。支那の古典、特に書經、詩經などを多く引用しながら、南詔政府の立場を或は誇り、或は辨明してゐるが、その中に南詔人としての特殊な風俗や言葉が散見する。そして南詔に歸化した漢人等の思想感情等もよくこの中から酌みとることが出來るのである。（つゞく）

○共榮圈棉業設備精紡機

		錘	織機
日本内地（昭和十三年二月末）	一三、〇八三、四〇〇	三七三、五七七（臺）	
朝鮮（昭和十六年）	二一四、五〇〇	七、八二八（力織機）	
滿洲國同〃	四七六、五〇〇	八、四五〇	
支那〃	四、一六〇、四〇〇	五四、二九五	
佛印〃	一三〇、〇〇〇		
タイ〃	一五、〇〇〇		
比島〃	二七、六一二	一、一六四（〃）	四四〇（力織機）
蘭印〃	一五、〇〇〇	四一、六〇〇（力織機六、六〇〇臺）	
ビルマ〃	一二、〇〇〇	六〇、〇〇〇（平織）	
計	一八、一三五、二一二（錘）	五六七、三五四（臺）	

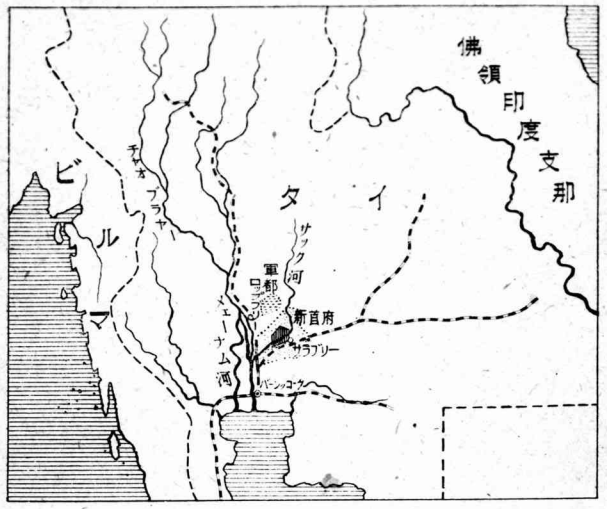
タイ國新首都建設

江尻英太郎

豫て西暦一九三七年タイ國政府並に議會に於て討議されてゐた新興タイ國の文化中心地に相應しい新首都建設は、この程意見一致、首府をサラブリーに建立し、かつて首府になると豫想されてゐたロッブブリーは軍都に、又現在首府バーンコック市は經濟産業中心地たるべき商都に改造される事に決定するに至つた。

新首府建設地サラブリーはチャオプラヤー河支流パーサック河畔にあり、縣廳の所在地であつて、バーンコークを距る一一三キロの地點にある。新首府はこのサラブリー市を中心にサラブリー縣の全部と、アユッタヤー縣一部を含有したる約一三〇〇平方キロで第一次計畫約三〇〇平方キロ、次期擴張豫備に八〇〇平方キロの用地が區劃され、南洋第一の大都市となる筈である。新都は二區に分かれ、經濟と住宅區に區劃され、設備も近代文化の粋を集める計畫である。今回の新都建設は從前の都市計畫と異り、既に出來てゐるものに改良を加へるのではなく、新たに建立するのであるから、他に追隨を許さぬ相當豪華にして設備も完備した大都市が豫想されるのである。

經濟區域には諸官廳がバーンコークより引移され、これを吸收する諸建築物、商社の本支店、デパート其他種々の事務所等が建立される。建築も全部鐵筋のビルディングであると豫想され、同區域の到る處に公園其他公共的の建物が建てられる。住宅區域にも公會堂や公園等



が建設される。

西暦一九三七年に新都建設が喧傳された時、バーンコークを距る一三三キロのロッブブリーが候補地と見なされてゐたが、ロッブブリーは舊都であり且つ國寶的遺蹟がある。新都建設の場合當然この遺蹟は取除かれねばならぬ。然し今タイ國は永い眠りより醒め、タイ本來の姿に立ち歸るに當り、種々の意味に於て古來タイの興亡を物語り、つねにタイ全民を鼓舞奬勵してゐる、貴い歴史の表象でもある遺蹟は、永久に保存するのは當然要求される處である。又他の理由として佛教の中心となるべき何物もない。勿論新たに設ければ良いのであるが、成可く佛教の緣故がある方を可とする。尚最後の理由としてはロッブブリーの土壤は殆んど白堊で脆質であつて、高層建築には不適當である。これに比しサラブリーはロッブブリーの如く遺蹟がなく、又佛の足跡が印されたと云ふ山の寺院は佛像が著名である。正に新都の寺院の中心延いてはタイ全土の佛教の總本山としても好適である。又サラブリーはタイ國の丁度中心の地點にあり、メエー

ナム・チャオプラヤーの支流があり、水運の便も非常に良好である。土壌は一帯に硬質で、種々建築の土臺をも支へられる。右諸點に基きサラブリーが今回の新首都建設地に内定されたものと思はれる。

尚新首都建設地に相次ぎロップブリーの東全域に亘り大軍都が建設される豫定で、これも議會の協贊を得て企畫が決定された。

右新首都並に軍都建設に關し去る昭和十七年三月二十二日に首府建設法が發布された。參考のためこゝに右法令を飜譯掲載して置く。

國土永久ノ基礎ヲ目的トシ新首府建設ノ必要ヲ認メ、タイ國憲法第五二條ノ規定ニヨリ本法ヲ公布ス

事變勃發ノタメ議會召集ガ間ニ合ハザリシタメ緊急勅令トス

佛暦二四八五年三月十五日

國王アナンタ・マヒドン陛下攝政

アーティット・ティップアーパー

ウム・ピチャヂェンヨーティン大將

プリディー・パームヨング

（佛暦二四八〇年八月四日並に佛暦二四八四年十二月十六日付人民議會々長告示ニ基ク）

第一條　本法ハ「緊急勅令佛暦二四八五年首府建設法」ト稱ス

第二條　本法ハ官報ニ公布ノ日ヨリ、直ニ之ヲ施行ス

第三條　本法ニ於テ「大臣」トハ本法ニ基キ事務執行ヲ爲ス主務大臣ヲ謂フ

「委員會」トハ本法ニ基キ設ケラレタル委員會ヲ謂フ

第四條　大臣ハ五人以上ノ委員ヲ任名シ委員會ヲ設ケ本法ニ基キ首府建設事務ヲ執行セシム

第五條　本法別表ノ圖面ニ指定セラレタル「サラブリー縣」及「アユッタヤー縣」所在ノ不動産ハ首都建設用地トシ左記事項ニ基キ政府ニ返還セシム

（一）本法別表圖面上黑線内ニアル不動産ハ直ニ返還セシメ政府ニ歸屬ス

（二）本法別表圖面上點線内以外ノ地域ノ不動産ハ勅令ヲ以テ全部又ハ指定セル期間ニ區分返還セシム

第六條　本法又ハ本法ニ基ク勅令ニ規定サレタル不動産ノ返還事務執行ハ本法條規ニ相反セザレバ佛暦二四七三年不動産返還法ヲ準用スルヲ得

第七條　委員會ハ右法執行官廳ト同樣ノ權限ヲ有ス

大臣ハ五名以上ノ返還事務ヲ管理セシムル事務官ヲ設ク

事務官ハ佛暦二四七七年不動産返還法ニ規定サレタル土地返還委員ト同樣ノ權限ヲ有ス

第八條　第五條ノ（一）及（二）ニ基ク返還不動産所有主ニ辨償スル代償金ハ本法施行日六ケ月前ニ於ケル市場價格ヲ單位トス

第九條　第五條ノ（一）ニ規定サレタル返還土地ハ大臣ノ認定シタル都市計畫ニ基キ委員會之ヲ整理ス

第十條　前條規定ノ都市計畫ハ商業區域ト住宅區域トニ分ツ、縣廳、區役所、市役所之ヲ掲示ス

第十一條　代償辨償濟ノ第五條ノ（一）及（二）ニ規定サレタル返還不動産ハ、委員會之ヲ監督ス辨償不濟ノモノニシテ事務執行上必要ト認メタルトキハ、委員又ハ事務官コノ内ニ侵入スルコトヲ得

第十二條　第五條ノ（一）ニ規定セラレタル返還土地ガ住宅區域内ニアリタルトキハ其所有主ハ其土地ヲ左記事項ニ基キ返還シタルトキ受ケトリタル辨償金ト同價格ヲ以テ買戻スヲ得

（一）都市計畫中一戸ニ定メラレタルモノ以上ノ土地ヲ買戻シスルヲ得ズ

（二）返還シタル自個所有原土地ヲ買戻スモノトス但シ其土地ガ國土公益建築物敷地又

ハ公益ノタメニ空除サレタルトキ委員會ハ極ク近イ土地ヲ選定シ賣却ス

第十三條　返還土地ガ全所有土地ノ半分未滿ナルトキ前條ノ規定ニヨル買戻シスルコトヲ得ズ

第十四條　都市計畫ニ基キ第五條(一)ノ規定ニヨリ返還サレタル土地ガ商業區域ニアリタルトキ其所有主ハ住宅地域ノ土地ヲ買フコトヲ得委員會ハ適當ナ土地ヲ選定賣却ス

第十二條及第十三條ノ規定ニシテ本條規定ニ相反セザル限リ之ヲ準用ス

第十五條　第十二條及第十四條ニ規定サレタル土地買戻シノ權利ハ辨償ノ日ヨリ一ケ月ヲ經過シタル時ハ消滅ス

第十六條　商業及住宅地域ノ土地ニシテ本法ノ規定ニ基キ賣却又ハ公益ニ控除サルベキモノヲ除キ委員會ハ適當ト認ムル範圍ニ於テ建築物敷地トス建築物既ニ建立セラレタル敷地又ハ建立未濟ノモノハ委員會ハ省令ニ基キ之ヲ貸與又ハ賣却スルコトヲ得

第十七條　本法ハ內務大臣コレヲ執行スルモノトス、省令又ハ諸手數料ニ關スル規則、本法遂行ニ必要ト認メル事務ノ規定ヲ公布スルコトヲ得、省令及規則ハ官報告告ニヨリ直ニ施行ス

首　相　ポ・ビブーンソングラーム元帥

謹デ勅命ヲ拜受ス

尙ほその后七月十日內務大臣より左の如く新都建設委員が任名された。

1、マングコーン・ブロムヨーティー中將　委員長
2、土木局長　委員次長
3、道路局長　同
4、厚生省次官　委員
5、檢事局長　同
6、內務局長　同
7、土地局長　同
8、衞生局長　同
9、地圖局長　同
10、ブンローム・ブラカムコーウォット氏　委員
大藏省代表
11、チャラン・チョーティカサティアーン氏　同
鐵道局代表
12、アート・ビチャジェンヨーティン中佐　同
遞信局代表
13、サニット・トウングカマニー氏　同
14、モム・ルアーングー・ソーピターノッパウォングー　同
15、內務次官々房主計課長　同
16、タウキー・レエーングカム　書記委員

英米抑留のタイ國同胞が故國歸還の感激放送

左は昭和十七年十月一日午前六時半全歐羅巴向け、同十時二十分東部アメリカ合衆國、中南米向け放送されたタイ語ニュースの邦譯である。

外國在留同胞の皆様、此處は泰國より受けたニュースを放送する東京放送局であります。

九月廿日午後二時、南部鐵道によつて英國在留の同胞は無事に盤谷に歸還しました。歸還の際の歡迎は賑やかなものでありました。これは日本政府及び駐英タイ國公使の努力によるもので、英國歸りは留學生共三三名でこの外アフリカに抑留されてゐた軍艦スリジョタイ・ナーワー號乘組海軍士官兵員八名、在爪哇領事館員一名、米國から歸還の途爪哇に留まつてゐた留學生五名計四十七名で、此の外印度系タイ人も若干名ありましたが、皆無事に到着しました

歸還同胞は九月十九日午前十時三十分、ハード・ヤイ驛にて日本軍官憲の手によりタイ側官憲へ引渡された。四十七名共、縣知事のライエット・ピブンソンクラーム中佐の歡迎で賑かでありました。又軍、警察、縣民、生徒などが國旗を打振つて盛んに歡迎されましたが、歸還の人々は嬉し涙に暮れて「まるで生れ變つた樣な氣がする」と述懐しておりました。この歸還の人々を載せた特別列車は十九日午後一時ハード・ヤイ驛を發車したが、各驛に停車する毎に多數の人々に歡迎されて、時にはお坊さんが讀經して歡迎した所もありました。この特別列車は翌二十日朝七時五十三分にホワヒン驛に着きましたが、ピブン首相は他の閣僚と共に出迎へられました。歸還の人々は皆下車して挨拶し駐英公使マヌウエート・スマーウオング氏が歸還の人々を一々首相に紹介されました。首相は之に對へて「諸君が無事に故國に歸へられた事は誠に喜びに堪へません、私は此處へ來たのは子供を迎へに來たのではなく、諸君全體を迎へんがために參つたので、それは戰爭が勃發して以來、私は同胞の諸君が他國に在留してゐることが心配で堪らなかつた。私の政府の名に於て今回の留學生諸君及びタイ國民諸君の歸還された事を心から喜んでゐます。又、諸君は敵の宣傳に乘ることなく、確乎たる氣持で歸還されたと云ふことに感謝します。」首相は更に語を繼いで「諸君が盤谷に歸られてから新しく見聞されるであらうが、永い間外國に居られて種々の事情が不案内であらうから、諸君の眼で見て我國がどの程度に日本と同盟してゐるかを解つて貰ひ度い。又盤谷に歸られてから、よく新事情を感得し、國家は如何に變化してゐるかを洞察し、タイ國の文化がどのやうに高くなつたかを見て、然る後、諸君の力により、より以上の高度の文化を建設するやうに希望して已まない。」終りに「歸還の諸君が手を執つてタイ國發展のために盡されんことを念願する」と結ばれました。マヌエート・スマーウオング氏は歸還の同胞諸氏を代表して「首相の御期待に必ず副ふ樣に努力します」と誓はれました。

斯くて特別列車は廿日午後二時盤谷驛に着きましたが、そこには歸還同胞の親兄弟、家族、親戚、友人、知己、青少年團、青年少女團、一般市民の歡迎陣で埋まり、國旗と歡呼の聲に場内はドヨめきました。新聞記者、外國通信員の一團はマヌウエート・スマーウオング公使及一部の留學生をラチヤタニー・ホテルに招待して歸朝感想を聽いたが公使は之に對して「今回の歸國に際し申上げたいことは、在外同胞がタイ國が日本と共に英米に宣戰を布告したことを聞いたとき、皆が國王陛下の政府を信頼し自重した。尚は場所によりては不安な所もあつたが、皆が自國政府を信

じ、政府の確固不動の方針に全幅の信頼を懸けてゐた。英國では物價暴騰のため暴動が起り、家屋抔大分破壞されてゐた所があつた」と語られました。終りに記者團は「公使の無事歸還を衷心より慶賀申上げる」と述べ散會しました

九月廿日は陛下の御誕辰日に相當し、天長節儀式は國王陛下の御名の下に嚴肅に行はれました。各官廳は廿日、廿一日の二日間休業し、全國民は國旗を揭揚して祝意を表しました。各新聞は陛下の御高德を讃へ奉り、又締盟各國より祝電が寄せられ、攝政殿下が陛下の御名により御答禮電を發せられた由に承ります。

現在タイ國は大いに音樂を奬勵し、音樂文化の振興に力を注いでゐます。日泰兩國の親善關係は益々密接となり、兩國首相の言葉が何時も一致して、兩國新聞紙の論調、聲明がピタリと一致してゐます。これで兩國民は同人種の兄弟であると言ふことが頷けるのです。

日泰兩國民は協力して大東亞の建設に邁進してゐることを報告します。尙ほピブン首相は在外同胞の諸君に政府を信頼しタイ國民としての榮譽を汚さぬ樣行動自重されんことを望んで居られます。

本協會主催 日タイ學生夏季林間寮の記

總記

タイ國學生會館學監　高久正義

日タイ兩國學生に交際の機會を與へ、兼ねて夏季休暇中の鍛錬に資する爲め、本協會が主催となり、日タイ學生夏季林間寮を開設することゝし、六月初めより其の準備に着手した。

一、入寮生の選拔

(イ)本協會經營の學生會館寄宿タイ國留學生を主とし曾て寄宿した留學生中の希望者から。

(ロ)將來渡タイするか少くともタイ關係の事業に携るべく運命付けられた東京外國語學校タイ語部學生中から。

斯くして選定の結果、入寮した者は次の二十六名である。

タイ國留學生計十一名

		年齢
國際、日語學校	サワン・チャレンポン	(二一)
城西學園中學	タオ・チャックスラクシャ	(一六)
高田第五、國	ソムバット・キタサンカ	(一四)
立大豫科	サノン・チャンカセム	(二〇)
同	アナン・シンサク	(二〇)
青文、日語學校	ブンサーン・ヤケオ	(二〇)

早大商學部　ブラユン・シーヤンヨン　(二三)
國際、日語學校　ブィブル・ワラワン　(二〇)
同　チャレーム・ポスヤノン　(二二)
同　チャロン・ポスヤノン　(二〇)
工業大學　サノ・ウィムクターノン　(二四)

外語・タイ語部計十三名

第二學年　田中正明　(年齢)
同　今井晋作　(二一)
同　春日慶司　(一九)
同　鰻田連　(二一)
同　食堂三郎　(二二)
同　瀧澤信司　(二〇)
同　諏佐硯藏　(一九)
同　君山英雄　(二二)
第一學年　外山慰　(二〇)
同　野田茂　(一九)
同　鈴木守助　(一九)
同　四月朔日丈司　(二二)
同　大内雅夫　(一八)

外に指導者として本協會より左記職員を參加させることにした。

學生會館學監　高久正義
本協會職員　椛島輝夫

二、場所の選定

箱根、山中湖畔、野尻湖畔、中禪寺湖畔と三四の候補地が擧げられたが、結局中禪寺湖畔とし、尙天幕生活は天幕借入れ、殊に食糧其他の入手困難な事情の爲中止し、同湖畔龍頭・山の家を宿舍として、林間寮を開くことに決定した。

三、日課及行事豫定表

日課表

時	分	事項	備考
前六・六・	〇一〇	起床 點呼	
		洗面 整理、整頓	寢室、寢具、服裝
六・	三〇	國旗揭揚(朝禮) 國歌奉唱	兩國同時 隔日交互に
		ラジオ體操	
七・	〇	朝食	
九・	〇	行事(其ノ日ノ)	行事表ニヨル
正午		晝食	宿舍又ハ辨當
後六・	〇	國旗降納	
六・	五	入浴	
七・	〇	夕食	
七・	三〇	營火	全期中二回
九・	三〇	點呼	
一〇・	〇	就寢	

行事表

日	(曜)	行事	備考
二二	(水)	開寮式	午後二時
二三	(木)	二荒山神社參拜 東照宮參拜 寶物殿拜觀	中宮祠—西參道(電車)
二四	(金)	登山(男體山) 營火(夜)	西參道—中宮祠(電車) 全部徒歩 中宮祠男女青年團參加
二五	(土)	自由	
二六	(日)	華嚴瀧 中禪寺湖岸	觀光 エレベーター 徒歩、遊覽船
二七	(月)	ハイキング、湯本 營火(夜)	入湯、水泳
二八	(火)	閉寮式	

往復旅程表

往路(七月二十二日)

時	分	發	着
前七・	五〇	集合(上野驛待合室前)	
八		乘車、出發(日光行準急)	
一〇	五〇	日光驛下車	
一一	〇	乘車(バス又は電車)	
一二	〇	ケーブルカー乘車(馬返より)	
後〇	三〇	中宮祠驛下車	
一	三〇	龍頭・山の家着(徒歩)	

復路(七月二十八日)

時	分	發	着
後〇	三〇	出發(徒歩)	
二	〇	ケーブルカー乘車(中宮祠より)	
二	三〇	乘車(バス又は電車)	
三	二〇	日光驛着	
四	二〇	日光驛乘車(上野行準急)	
六	五〇	上野驛着(下車)	
七	〇	解散	

經過日誌

七月二十二日(水)晴

寮生一同上野驛に集合し午前八時二十分發車、山口外語講師も行を共にさる。車中にては日タイ學生夫々適當な相手を見付け、日本語、タイ語入混りの會話に大いに親善振りを發揮す。

午前十一時日光驛に到着．町役場から二名の吏員が案内として出迎へ色々斡旋してくれた東朝、東日、讀賣、報知各社のレンズの放列に遇ひ一電車遲れる。途中田母澤では、御駐輦中の御用邸を遙拜す。馬返からケーブルカー、明智平でバスに乘替へ中宮祠に着いたのは午後一時半であつた。出迎への手塚中宮祠國民學校長の斡旋により、菖蒲ケ濱まで湖上をモーターボートで渡る。再びリュックサックを背負ひ湯の川に沿つて登ること約一粁左側に韓鞳たる瀑布の懸るを望む。これ即ち龍頭の瀧であり、我々が一週間錬成を試みんとする山の家は此の瀧のすぐ上に在る。勇を鼓して登り、湯の川に架けられた素朴な木橋を渡ると、白樺と落葉松の林の中に目指す山の家を見出した。管理者青木貞次氏に挨拶し、食事を終つてから開業式を擧行す。案内の日光町役場吏員、中宮祠國民學校長、山の家管理者等の參列を乞ひ、高久學監開寮の辭を述べ、山口外語講師の祝辭と激勵の辭があり、青木管理者の挨拶で式を閉ぢた。

それから兩學生を按配して寢室を割當て、左の四名を班長に任命した。

外語學生　田中正明
　　今井晋作
タイ學生　プラユン・シーヤンヨン
　　サノン・チャンカセム

其の夜は休養の豫定であつたが、中宮祠青年團が午後七時から男女約六十名山の家へ參集、庭上に篝火を焚いて歡迎の夕を催した。青年團側の鄕土舞踊の間にタイ國學生側の歌謠を交へ、最後に青年團は團歌、學生側はタイ國々民歌を合唱して散解した。午後九時半、日課表に依る最初の人員點呼をして夫々床に就いた。

七月二十三日（木）晴

午前五年頃起床して溪流で顏を洗ひ、六時半兩國旗を揭揚し、宮城遙拜の後兩國々歌を奉唱した。次に上衣を脱いで半裸となり、元氣一杯ラヂオ體操をした。

朝の食事を濟ませ少憩の後、今日の豫定行事である二荒山神社並に東照宮參拜へと出發した。六粁の中禪寺湖岸を徒歩して、中宮祠から乘車、十時半西參道口へ着いた

順路二荒山神社へ參拜し、齋藤彌宜の好意により、特に昇殿參拜を許され、神樂（劍の舞）を奉納して吳れた。境内の國寶化燈籠や神木三本杉などを拜觀の後東照宮へ向つた。丁度其の時、前夜晩く日光町へ來泊した日本寫眞協會關、松下兩君が來合せて參加した。これから各所でパープジツプンに載せる撮影をすることにして、東照宮參拜を始めた。

晝食後後寶物館拜觀の豫定だつたが、食事の終る頃から黑雲が男體の中腹に盛上り、電光の合間に遠雷が轟き始め、ボツ〳〵と夕立が降出した。中々晴れさうもないので、寶物館は斷念し、小止みを狙つてバスに乘込み歸路に就いた。

本日ブラサート學生監督官及び日本映畫社の村瀨、高間の兩君が、一同の起居、寢食、行事等の全般を記錄するために當地に到着した。尙ほ山口講師は歸京した。

七月二十四日（金）晴

今日は男體登山の日であるが、撮影の都合で二十六日の豫定と交換することにした。前日觀光ホテルに宿泊したブラサート監督官は、サノ君の案内で朝食前に來訪、湯の川溪流の洗面や、國旗揭揚、朝禮、ラヂオ體操等を見られ、時に學生等と共に撮影班のカメラに收りなどして歸られた。

午前十一時一同は宿舍を出發し中宮祠まで徒歩、暫く休憩しながら、協會より視察旁々本日及び明日の行事に加はるため來られる川村常務理事其他を迎へることにした。常務理事一行は午後二時から湖水周遊の豫定で來られたが、丁度其の頃から雲行面白からず、躊躇してゐる中に愈降出して來た。仕方なく雨宿りをし、晴間を待つて遊覽ボートに乘込んだ。日本映畫社及び日本寫眞協會派遣員等も一行の行動を撮影のため同乘した。大尻口から出帆、立木觀音、八丁出島、上野島等もボートの窓より見る外なく、上野島から菖蒲ケ濱へ直行、上陸しようとしたが雨は中々止まない。仕方なく僅の小止みを窺つて宿舍に歸つた。

本夕は豫定の營火の晩である。幸ひ雨も霽れたので、入浴、晩餐も早目に切上げ、一同菖蒲ケ濱發電所前の廣

場へ繰出した。プラサート監督官も參會し、廣場中央、大木の近くに赤々と營火を焚き、それを圍んで夫々圓陣をつくり開始の合圖を待つた。折柄日中の雨は清々しく霽れ渡り、陰曆十日餘りの月は木の間を漏れ、凉風に隨つて色々の紋樣を地上に織出してゐる。

先づ一同國民儀禮の後、手塚中宮祠國民學校長の歡迎の辭に對して、川村本協會常務理事が謝辭を述べ、プラサート監督官また本協會及び地元青年團の好意を謝して次の餘興に移つた。男女青年團は日タイ兩國旗を飾付けた揃ひの菅笠を持つて、瑞穗踊、和樂踊を踊れば、タイ國學生は武技の型、タイ舞踊等を以てこれに應へ、交々驩を盡して月の傾くのも知らない程であつた。此の間、兩撮影班は腕に縒をかけて各場面をカメラに收めた。終に青年團は團歌、兩學生はタイ國々民歌を合唱して散解した。

七月二十五日（土）晴

朝食後菖蒲ヶ濱で水泳を爲す。これ亦撮影班は諸場面をレンズに收め、これを最後に前後三日間の成果を携へて歸京することとなつた。水泳後は自由行動である。

午後二時過ぎ、歸京の川村常務理事一行を中宮祠に送り、遲れて入寮するタオ・チヤツクスラクシヤを迎へ六時山の家へ歸つた。

七月二十六日（日）晴

今日は男體登山の日である。夫々仕度も嚴重に、日の丸辨當を腰にして、午前八時宿舍を出發した。中禪寺湖畔の二荒神社中宮祠に參拜し、奥宮登拜の手續をした。

登山路は相當險岨で、三合目邊から遲れ勝のものが出來た。五合七合と落伍するものが出たが、それでも大部分は頂上に達した。雲のために眺望は不如意であつたが西方遙に白根、榛名、赤城の連山を望み、東南、關東平野の廣漠たるを模糊の中に眺むることが出來た。タイ學生始め日本學生でも、是程の高山に登つた者は無かつたので、生れて初めての經驗でもあり、よい鍛錬になつた。

この日午前十一時日光着の列車で、プラユン・シーヤソンが參着入寮した。

七月二十七日（月）晴

日光町役場から、助役（町長代理）が吏員二名を伴つて來られ、慰問の辭と土産物を受けた。終つて我々は湯本へ向つて出發した。昨日の登山で疲勞したのか、タイ學生中には宿舍で休養する者もあつた。

宿舍を出て、白樺の林を拔けると高山植物で名高い戰場ヶ原である。湯瀧から湯の湖を廻り、湯本山の家へ着いたのは正午過ぎである。こゝで少憩、晝食をしたゝめた後、暫く自由行動をとることにし、人煙稀なる奥日光の仙境で各自浩然の氣を養つた。

今夜は最後の營火の夕であるが、豫定を變更して茶話會と模樣替をした。晩食後寮生一同は食堂に集り、主婦（管理者不在）始め山の家に働く人達を招いて感謝の意を表した。

寮生活中の失敗談や隱藝なども飛出して、娯しい一夜を過した。

七月二十八日（火）晴

此處での朝禮も體操も今日限りと思ふと、一層嚴肅に遙拜もし、活潑に體操もした。午前九時閉寮式を濟ませ歸途に就いた。中宮祠前から男體山頂を伏拜み、二荒の神に御加護を謝して中宮祠驛に向つた。ここから再びバスケーブルカー、電車と往路を逆行し、日光驛から汽車に乘込み、午後七時上野驛に安着した。

この林間寮は初ての試みであり、研究準備も不充分であるに拘らず、病氣其他の事故も出來ず、概ね所期の目的を達することが出來たのは、關係各方面の絶大なる御援助と寮生各自の自覺に依るものである。

尙ほ本協會の趣旨に贊同され、この林間寮に終始格別の御厚意を寄せられた次の各位に對し深甚の感謝を表する次第である。

中宮祠國民學校長　手塚善作氏
二荒山神社禰宜　齋藤繼胤氏
東照宮社務所　太田氏
日光町役場　鈴木町長殿
同　助役殿
同　楡木氏
同　小西氏
山の家管理者　青木貞次氏

感想ノ一　タイ國人の立場から

國際學友會日語學校學生　サワン・チヤレンポン

今年は例年より大變暑い。在日本殊に東京に留學して居るタイ國學生は如何に熱帶人であつても、此んな暑い氣候は非常にいやです。東京から風の涼しい場所か、海岸の所へ旅行し度いと希望者が多い。其の中には私も含まれて居ます。

×

丁度日タイ協會は兩國學生の友情及び個人的關係を奬勵する爲めに、日本の有名な場所である日光を目的地として、一週間の共同生活旅行を開かうと豫定しました。其れはタイ國留學生を樂ませるニュースであります。如何かと言ふと、御存知の通り日タイ親善關係及び緊密なる個人的關係は現在だけではなく三百年前にありましたが、德川時代に長期の間切られた事は惜しいです。今兩國の關係を復興させる爲めに此の樣な會を開かれるのは此の上もなく滿足と思ひます。又大東亞戰爭が始まつて以來、日タイ兩國は大東亞共榮圈を確立する爲めに、十二月二十一日に日タイ攻守同盟を締結したのは、非常に双方の國民にとり滿足をきたすでせう。未來に必ず兩國共大東亞の指導者と成る爲め、双方の國際的及び個人的に良く理解しなければなりません。國際的の方を見れば其れは滿足しましたが、個人的に見れば完全では有りません。即ち兩國はお互に隣合つて居なく、何千粁と言ふ驚く距離も離れて居ますが、同樣な生活は出來ないかも知れないが其れを奬勵する爲め、日タイ協會は指導者として双方の國民の代に日タイ兩國學生共同生活旅行を開くのは大なる意味を含み、良い計畫であります。

七月二十二日に我々兩國學生は東京の上野驛に集まつて汽車に乘りました。汽車は八時十五分頃に驛を出發しました。我々が乘つた汽車は工業地帶と紫色の田畑の間を通る時、見渡す限り廣い〳〵田畑ばかりであり、非常に我々タイ國留學生の故郷が懐しくつてたまりませんでした。日本は如何に海國でも農業を忘れずに改良させつゝあり、土地を殘らない樣に山とか森林を開拓して田畑と變て居ます。汽車の中で日タイ學生は日タイ語をかわり〳〵に教はり話しかけたりしました。非常に愉快でした。短期に出來上がつた友情は驚くべき程深い。若し長期で有ればどんなに親密であらうか。

×

汽車の中で我々はお互に色々の事に就いて話し合ひ、十時頃に我等の終點日光驛に着きました。其處で始めて我等は、所々の爲めにわざ〳〵出迎に來た町役場吏員に會つた。本當に我等の心の中で深く感謝致しました。のみならず多數の新聞記者に寫眞を取られました。此れも日タイ親善關係に深く興味を持つて居る日本人の內心を示した現れであります。

其れから我々は電車に乘つてケブルカの有る場所へ行く途中、丁度當時　天皇皇后兩陛下が日光の御用邸にいらつしつてをりますから、通る時儀禮する爲めに帽子を脫ぎました。遂々ケブルカ驛に着きました。其處で我々は又我等の邦人の能力で出來上かつた立派な仕事をはつきりと見ました。我々が中禪寺に着いてから船で中禪寺湖を渡つて、山の間に建てられた山の家と言ふ良い名前の家に行きました。

極て簡單に出來上かつた家であり、寮の附近に綺麗な瀧があり、何時でも音を立てゝ流れ落る非常に自然の環境に惠れて居る。此んな寮は大自然らしいから私は大好きです。其處で兩國學生は規則正しい共同生活及び本當の鍊成を始めました。朝六時に起きてから、寮の前に建てられた竿の前に整列して兩國旗を一緒に揚ける。兩國旗を上げる時、双方の國歌をかわり〳〵に聲を揃へて歌ひます。日の丸旗と三色の旗は、竿の最高に青い空にひら〳〵とはためいて居る。私は涙が出る程嬉しい。双方

の國旗は此の大東亞戰爭のビルマ方面に揃つて進んで居ますが、此の度又銃後に揃つて振つてあるのは何よりも滿足であります。タイ國留學生は皆私の樣に考へるでせう。即ち日の丸の旗と三色の旗は如何にどんな方法であつても離れないでせうと感じます。其の理想の具體的表現は心に深く印象が殘ります。

其れから制服を脱いてラジオ體操を五分位やつてから朝食を食べますが御飯は錬成する爲めに何にも有りません。大根二切、飯一杯、スープ一つしかない。非常においしいですが皆良く食べますから不足であり、若し我々は此んなおかずに不服思わずに食べれば、國へ歸ればどんな物でも食べられるでせう。

皆の事は規則が定まつておりますから、兩國學生は規則正しくなければなりません。錬成の豫定は多數有ります。例えば寺院の參拜、登山、溫泉の見物、中禪寺湖の島々の見物等であり、特別な事も有つて即ち外務省の報道課の提供に因つて映畫を取られます。撮影した樣子は大抵兩國の林間寮及び共同生活であつた。間もなく此の映畫は兩國の國民の間に見られるでせう。見給ひ、兩國の友情關係は鐵の樣ではないか。

×

寺院の參拜、第一は日光の名高い寺へ行き、色々の御神殿、例、日本で一番古い燈籠及び短刀の踊も見物しました。見た事が有りませんから不思議に思ひます。其の次は日光の一番有名な寺院へ行きました。其處で案内人が我々に種々の事を細いに說明しました。日本の歷史を一層深く覺えました。陽明門へ入つた時、日本の古來の美術は私に興味を起させます。其れは中々立派な門であり、最近的建築家でも其んな細い仕事を出來ないでせう二千六百年前に出來上かつた日本は色々の自然危機を冒しましたが、古來の御神殿が澤山殘つて現在の人々に見られて居るのは、古來の日本の靜かな精神を示しました

日光住民の大歡迎、最近タイ國の名前及び日タイ親善關係の噂は方々に知られて居ます。殊に三ケ月前にタイ國の前首相ブラヤー・パホン閣下が日光を訪問した時、日光の住民に大歡迎を一回受けました。此の度我々の爲めに第二回の歡迎を受けた事は眞心から感謝致します。日光住民の歡迎は大抵良い風影の踊であり、其の晩我々タイ國留學生は何でも準備しなかつたので唯一つ拙い歌を歌ひました。第二回は發電所の前に午後六時から開かれました。其の晩丁度日タイ協會の川村理事一行がわざ〳〵兩國學生共同生活林間寮を訪問してから其處で演說しました。日光住民代表の答辭が終つてから會は多數の見物者の間で開きました。其の晩我々は出來るだけ種々の事、例へばタイ國の拳闘術、刀の踊、しばい、田舍の歌等をやりました。お互に樂ませました。會は十時半に終了しました。我々タイ國留學生は其の晩の事を何時迄も忘れない樣に心の中で深く印象が殘ります。

登山は本當に體を鍛へる爲めに必要な事であり、面白いだけではなく戰時にも良く利用します。日本の政府は登山の用途を良く知り、出來るだけ民衆に擴げます。現今日本人、男子始めとして女子及び少年少女は、登山の用途を深く理解して盛にやつて居ます。中々良い政策であります。私の一生は假想の登山は何回でもやつた事が有りましたが、本當の登山は一回でも未だやらない。此の度二千三百九三米、傾面四十度の男體山を登る事は出來るかどうか思ひましたが、良く頑張りましたので最高の所迄登りました。登つた途中腹が大變減りましたから寮から戴いた二つの握飯を食べてから力が殖えました。遂々私の先に登つた友達を追つきました。握飯の爲めであらう。最高に何にも有りませんですが濁つてある水が有り、我々ののどが乾いて居るから思はず飲みました。記念物の爲めにはんを澤山紙におしました。「タイ國留學生は男體山の頂上迄登つた」と紙に文章を書いて竿の所に張りました。十五分位休んでから又下りました。下り時間は登時間の三分の一、即ち下りは一時間又は一時間半、登り時間は三時間半しかかりませんでした。寮へ歸つた後死んだ樣に眠りました。

×

翌日溫泉の見物の豫定が有りまして、行かれるタイ國學生は私一人しかない。皆足が痛いとか病氣になつて居る者も居ます。溫泉の所へ着いた後直ぐ入りましたが、

本當の溫泉ではありませんが元の溫泉から木管で導いて來た物であります。風呂がすんでから元の溫泉へ見物に行きました。其の場所には溫泉が五つ位有つて皆湧いて居る。卵を完全に煮れる程熱い。其の附近は硫黄の香がただよい、木の葉は大抵良く繁茂しない。私は高久樣に說明されたのは昔其の附近は火山だつた。日本は火山の國であり、だから溫泉が幾つも有ります。此れは大切な事であり忘れてはならない點であります。日本は火山が世界中で一番多い國であらう。如何に日本は色々の自然的危機が有つても、一億の國民は何とも無い樣に國の榮える爲めに良く働いて居るのは私に深く不思議に感じさせます。斯樣な事に因れば日本は本當に自然的危機國であり、國民の心は自然的危機環境に育てられ次第に世界無比な精神になりました。

我等の歸京豫定は段々近つきました。兩國學生は此の度の共同生活旅行をお互に忘れない樣に住所を尋ました最後の晩は我々兩國學生及び山の家寮に泊つて居る人は別れの會を開きました。非常に面白くつて各人は種々の事を出來るだけ行ひました。遂に我等が日光を二十八日午後四時頃に離ました。日光さやうなら。別ても心の中に深く印象が殘ります。機會が有れば又訪れませう。日光から出發した時、親切な町長の代理に吏員二名は我等を見送りに來ました。汽車が日光驛を出る時我々は兩國旗を振りました。副町長樣有難うございました。さやうなら、萬歲〳〵と皆聲を高く上げて叫びました。

此の度の共同生活旅行林間寮の結果を果する事が出來ました。日タイ親善關係及び個人的關係は一層に强力となり、のみならず日タイ學生は双方の缺點をお互に直し又お互に忠告する事も有りました。私は此んな旅行が何回でも開いて戴き度い。日本及びタイ國は同じ佛敎、同じ大東亞に於ける同じ民族及び同じ心であり、未來に疑ひなく必ず本當の兄弟になるだらうと思ひます。兩國の關係は永久にちつとも溶けない。私が大東亞戰爭の大勝利は必ず大東亞諸國の手に歸すだらうと豫告します。

もつと書き度いですが、日本語の程度が未だ低いからこれでおしまひです。終

（註本稿の筆者サワン・チャレンポン君は、本協會經營の目白タイ國學生會館に在舍し、國際學友會日語學校に通學してゐる。本那に留學してからまだ滿一年餘にしかならないが、日本語の知識は相當進んでゐる。本稿は筆者の文章に殆んど手を加へないで掲載した。（編輯者）

感　想ノ二　日本人の立場から

東京外國語學校タイ語科學生　田中正明

さすがにこゝ海拔一千米餘の中禪寺湖畔は非常に涼しい。

東京の暑さはタイ國より暑いと云つたタイ人も、此所の涼しさは氣に入つたとみえる。勿論、タイには、これ程涼しい所は、北方國境附近の山中のジャングルにでも入らぬ限り一寸ないであらう。

日タイ兩國の學生總勢二十餘名は、七月二十二日午後奥日光龍頭山の家の鍊成所へ着いた。彼等タイ國の學生は、既に、將來タイ國での指導階級たるを約束されてゐる人達である。我等外語生も日本代表格で充分矜持をと思つたのも、タイ國學生達の餘りにも打解け易い所からそも〳〵の始めから裸と裸である。その方が今思つてよいと思つてゐる。一見、色も同じ、顏付も似てゐて、使用する言語に注意せざる限り見分けがつかない。

服裝は、多く昔時（と云つても數年前）は一般にアメリカニズム横溢と云つた感がしたのも、今日ではさ程にも思へない。況して日本の敎育を受けたものは、皆淸好みへと入る樣である。最近どのニュース寫眞をみても皆端正な服裝をしてゐる。一體にきれい好きである。タイの學生は、皆親切で叮嚀である。面倒な質問によもく答

へてくれる。皆同年輩の爲かよく氣が合ふ。ユワチョンの勢力は相當なものらしい。學生は一人殘らず籍に入つてゐる。

ユワチョンの話をする時は、隨分熱中する。こゝにも民族觀念の旺盛さがみえる樣である。革命以來、タイ國は民族の團結がより強くなり、プラヤー・パホン中將、ピブーン元帥等と比較的壯年の熱意ある指導者により、新しい教育を受け、より民族觀念を強め、自由獨立への強い誇りを持たせられた彼等タイ國學生は、友邦タイ國の頼もしい力である。

龍頭山の家には、我等一行と共に少數のお客と、三十七歳になる一人の獨逸人がゐる。極めてアメリカ臭い英語を話す。日タイ兩學生等と毎日一階の休憩所で顏を會はす爲に大分親馴染となつた。彼との交際から推してタイの學生は、西洋人、就中、日本人から敬意を拂はれ過ぎる感のある獨逸人に對しては、或る程度の尊敬こそ持つても、寧ろ日本人の方を餘計に優秀なものとしてゐる樣である。それには種々の理由もあらうが、日本人にとり非常に欣快の事であると思つた。

男體山登りの時「やりきれない」「たまらぬ」「つかれた」と云ふ日本學生のタイ語で言ふのを聞き、之からのタイ人はさう云ふ言葉を言はなくします。と言ひ、誰か寫眞班の人が「タイ國の陸海軍士官學校は、休憩時にはダンスをやつてゐたよ」とタイ國見聞談をすると口惜しさうな顏をしてゐた。之は當然の事とは言ひ乍ら、大分國家觀念が強い表れであらう。彼の如き人材がタイ國に多ければ多いだけ發展するのであらうと思ふ。日本へ來てから未だ一年しかたゝぬのに新聞用語の大半は理解出來る頭の良さ、行く〳〵の偉大な存在が、今から覗はれた。友邦國民として頼もしい感と共に、タイ國が將來相當の大國になるであらう事を喜び且祝福するのである。

今朝も山の家のバルコニーの前には、のしかゝる樣に男體山が聳えてゐた。タイ學生の誰かが「オー、タンマチャート」(おゝ自然よ)と叫んだ。何れの民族を通じても偉大なるもの美しいものに對する憧憬は通有である。中宮祠湖畔を歩いてゐた時タイ人に易しい日本語で湖の風景の描寫を頗るドラマティックな美辭麗句を用ひて表現した時、彼等は半可通乍らも「良いですね」(ナーイアーシング)「良いな」(ナディーチンナ)を連發した。タイ語と日本語、文の構成が異つても思考法形容法には、東亞民族の持つ共通性が多分に含まれてゐるのを見逃し得ない。

タイの學生達はこゝが氣に入つたらしい。毎日中宮祠まで一里を往復してゐる。こゝもやはり日本の印象の一である。中禪寺湖は今日も蒼く藍色に澄んで深い。湖上の青空には、とり〴〵の雲が浮んでゐる。恰も日本の姿を象徴するかの樣に。

バーンコーク クロニクルから

新國民議會議長及副議長

國民議會定例會議の第一回會議は去る土曜日(六月二十七日)、アーナンタ・サマーコム御座所に於て開會され、プロト・ウィティアン・ナ・ソングクラー氏(プラヤー・マーナワラーッセーウィー)は會長に、プク・マハーディロク少將(プラ・パチョン・パッチャヌック)は副會長に萬場一致を以つて可決された。

長老格のチォム・スタム・ヴィニチャイ氏(プラ・スタム・ヴィニチャイ)は臨時議長を務めた。(六月二十七日)

タイ國民の飛行機獻納

チャイナート縣アムプオーサームハヤーの地方官吏の努力により政府官吏及び一般民間の獻金による飛行機一臺、王國航空隊々長に獻納された。飛行機は革命記念日に獻納され、集つた獻金は一萬二五バーツ九二サタンであつた。(六月二十七日)

新一バーツ紙幣發行

六月二十四日に公布された大藏省布告によれば新一バーツ紙幣が發行されるとの事である。新紙幣は大藏大臣の署名があり、改良紙が使用される。(六月二十五日)

新二十サタン貨幣流通

大藏省布告によれば、間もなく二十サタン貨幣が流通するとの事である。この貨幣は重量三瓦、直徑二二粍にして他の點は總べて十サタンと同樣である。(六月二十六日)

タイ語音聲學ノート（二）

江尻英太郎

一、子音（尾子音）の部

前號に於て說明したる子音は、成音中末尾に着けたる時は尾子音となり、「音止」卽ち促音の役割を演ずる。

タイ語に於ける促音は、k、t、p、n、ng、mの六種である。

促音は息を閉鎖したるまゝ音が終り、ロ腔外に息が放出されず、何等のものも聞き取る事が出來ぬ。第一聲の時には閉鎖が完全であるが、第二、四聲の時に於ては元來息を詰めて出すため、ロ腔內に充滿しあだかも藥鑵內で水が沸騰し、湯氣が藥鑵外に出る如く完全閉鎖を破り、少量の息がロ腔外に露出され、末尾に母音ɯ'がかすかに聞き取れる。

（イ）kの促音

この促音に屬する子音はk、k'である。舌と軟ロ蓋間にて閉鎖が行はれる。

この場合舌がkの構へを取ると同時に音が終つて了ふ閉鎖は舌根と軟ロ蓋間で行はれる。この促音が伴はれる時には第三聲（平聲）はない（聲調の項に於て詳述する）

（ロ）tの促音

この促音に屬する子音はd、t、č、c'、s、t'である。舌と齒及び硬ロ蓋間にて閉鎖が行はれる。

dの場合は第一聲の時には閉鎖が完全で、音がロ腔外に漏れないため、聲帶の振動が聞き取れず、無聲と同樣となる。第二四聲に於ては多少の息が露出されるため、極めてかすかな聲帶の振動が聞き取れるが、殆んど無聲に近い、又末尾にɯ'オとの中間的に母音の音が聞き取れる。

尾子音（促音）表

k音	ก ข ค
t音	ด ต ถ ธ ท ส จ ช
p音	บ ป ภ พ
n音	น ร ล (ญ)
ng音	ง
m音	ม

尾子音（促音）に用ひられざるもの　ผ.ฝ.ฉ.ฟ.ฬ.ห.ฮ.อ.ย.ว

čの場合は舌の中葉面と硬ロ蓋の間で完全に息が閉鎖され、摩擦を引起す餘地が與へられない。

c'とt'の場合は閉鎖のため帶氣したる息が聞き取れなく無氣有氣の差別がつき難い。從つて無氣と見なし得るc'の高音は促音に使用されない。

sの場合は兩齒の間にて完全に息が閉鎖される。

この促音が伴はれる時には第三聲（平聲）はない。

（ハ）pの促音

この促音に屬する子音はb、p、p'、fのものであり、fは促音として用ひられない。舌と唇間に於て閉鎖が行はれる。

bは兩唇間にて完全に息を閉鎖して、聲帶の振動が聞き取れない。無聲と有聲の區別が對き難く。第二四聲に於ける時に息がロ腔外に多少漏出される場合に於ても聲帶の振動は極少にしか聞き取られず、殆んど無聲である又この時には母音ɯ'が末尾にてかすかに聞える。

p'の場合は閉鎖のため帶氣したる息が聞えず、無音氣

有氣の差別がつき難い。

この促音が伴はれる時には第三聲（平聲）はない。

（二）n の 促 音

この促音に屬するものはn、r、l子音である。舌と上齒の後槽の間に於て閉鎖が行はれる。

nの場合第二と四聲、時には上齒と舌端の間にてなされた閉鎖より息が多少漏出され、母音uがかすかに聞き取れる。尙聲帶の振動が伴はれても、閉鎖され口腔内で音が終り、口腔外で聞き取れず無聲有聲の差別付け難く、有聲が無聲化される。

日本語と同樣な發音で、日本語に於ては息が口と鼻の兩方から流出されるのであるが、n促音の場合には通路が完全に閉鎖される故に、息は初子音の時よりも多く鼻より放出される。第一聲の時のみ多少口腔から放出される。

rは舌端が硬口蓋に完全に接觸閉鎖が行はれるため、振動を起す隙間の餘地がなきため振動が生じない。

lは舌端が上齒の後槽に接觸完全な閉鎖が行はれ、一度側音として流れて來たる息はこの閉鎖口で遮斷され、音が終る。

この促音の場合母音長母音であるか短母音であるかを問はず、中音の時に平聲（第三聲）があり、閉鎖の度は第二と四聲に於けるものと第一聲に於けるものとの中間にて、第二と四聲に於けるが如く沸騰した時の湯氣が藥鑵より無理矢理に蓋を持上げる樣にして出るが如き急激さはなく、又第一聲の如く湯が沸き立たない內に火が消えて湯氣が生じない程の閉鎖はなく、頂度、沸騰しない時に藥鑵の蓋をそつと取り上げた時に立つ湯氣の如くなぬらかに閉鎖の隙間を流れ出る樣に息が露出されるのである。

第二、四聲の時、末尾の母音uは殆んど明確に聞える第一聲の時は口腔內で消滅され、殆んど外部では聞き取れない。

（ホ）m の 促 音

この促音に屬する子音はmである。

この場合は兩唇間にて閉鎖が行はれるのであり初子音の時には鼻腔だけでなく、口腔からも息が放出されるが、促音の時には口腔內で完全に閉鎖が行はれるため、鼻腔のみから息が放出される、第一聲の時だけ、息が多少口腔の閉鎖の隙間から漏出する。聲帶の振動も息が閉鎖されるため殆んど聞き取れず、有聲無聲の差別がない第二と四聲の場合は母音促が末尾に稍々明確に聞き取られる。

（ヘ）ng の 促 音

この促音はng子音である。

n。場合は閉鎖が舌端と齒槽間に於てなされたが、ngは閉鎖が舌根と軟口蓋間に於てなされ、nの「音止」のg音が連續され、二重子音となつてゐる。nの構にて音は口腔で遮斷され閉鎖され、たるまゝ、音が終る前に一度放出されたる息は口腔で更にgの地點にて閉鎖される其間nの閉鎖は解放されるが、次に起る閉鎖と解放とは殆んど一致し同時に行はれる。nの閉鎖地點より引戻されgの地點にて完全閉鎖されるのである。

第二と四聲たると第一聲たるを問はず、末尾に母音。が聞き取れる。第二と四聲の場合は第一聲の場合よりも強く聞える。

尙三十一字の子音中p'の高音、fの高低音、sの低音、y音、v音、hの高低音、o'の十字である。

y音の場合、從來別添表中括弧內のものは外來語の促音、卽ち梵語、巴利語等のñに當て嵌め、nの促音であつたが、今回の改正にて外來語をタイ語色に改組される事になり、全部n子音の促音nに改められてゐる。又表中圓內のものはyの促音として用ひられるが、促音としてよりは半母音の要素を含む故母音の頂にて說明する。

v音も同樣に半母音の要素を含んでゐる。

尙ゟ、p、p'、tは梵語並に巴利語に當嵌めた促音の場合はd及びf子音の促音が用ひられる。

梵語、巴利語とタイ語の關係は別項に於て詳述する。

一、尾子音の末尾に聞ゐる母音

尾子音による「音止」の後、口腔を開いた時に閉鎖されて音が既に終つた後の餘である有聲呼が摩擦の響を伴はず口腔外に放出される、これが即ち尾子音（促音）の末尾にかすかに聞き取れる母音である。口腔を開く瞬間に放出されるのであるから、口腔の位置は鎖閉されたる形を取り、又緩かに放出されるから、筋肉の狀態は弛緩されてゐる。故にこの時の母音は短音である。尚正しい圓唇ではなく口腔を開く時の自然動作として唇の位置は左右に引張り、上下に開かれる態勢を取る。この時に出る母音が促音の末尾に聞えるのである。

訂正 前號中「三〇字の子音と二大字の母音」とあるを「三一字の子音と二七字の母音」に訂正す。鼻音中mとnの「無聲無氣音」を「有聲無氣音」に訂正す。

新聞論調

ピブーン首相萬歳

バーンコーク・クロニクル紙六月二十六日附社說

ピブーン首相は去る六月二十四日革命記念日に當り、赤心を吐露して國民に呼びかけ、同首相が國民の指導者として念願しつゝある唯一のことは、國家の安寧と國民の福祉にあることを明かにした。同首相はタイ國參戰の避くべからざるものであつたことを强調し、堅忍不拔全力を盡して時局に對處せんことを全國民に要望して、その傳統的精神に訴ふるところがあつた。

首相は、武人として前線の將兵に最大の同情を表し、その家族の安否を顧念すると同時に、政府の首班として、國民が能く國家の再建と戰爭遂行に關する政府の施策に協力しつゝあることに對し深甚なる感謝の意を表明した。同首相はいつもの明快卒直な語句をもつて「諸君の喜びは余の喜びである。諸君の憂ひは余の憂ひである。」と述べた。

首相のこのラヂオ放送を聽いたものは、いづれもその赤誠に感動し、同首相及び政府に對する信賴の念を愈々深くした。この赤誠に加ふるに、同首相によつて今日まで成就せられた巨大なる事蹟の存することを憶ふとき、同首相に對する國民的感情の奈邊にあるかは、容易に之れを察知することが出來る。

タイ國は參戰したとはいへ、戰爭の禍害は全然受けてゐない。之れ全く政府の現實に卽した施策の賜である。タイ國は正義に基く外交を實施して來たものであつて、最初多少の混亂を見たが、局面は恰も魔術によるが如く忽焉として轉換し、今やタイ國は强大なる盟邦日本及び諸友國の支援と尊敬と信賴を受け、その國軍は共同の勝利の爲めに戰つてゐるのである。

然かしピブーン首相がタイ國民の尊敬を一身に集めてゐるのは、政治家とし武人としての功績のみによるものではない。國民をして同首相に對し敬愛の念を禁ぜざらしむるものは、同首相が國民の日常生活と其の福祉に對して示しつゝある深き關心である。首相は國家の外交と軍事に對して關心を有すると同樣、國民の臺所を守る蔬菜圃に、或は養鷄に、或は公衆衞生事業に、或は又國民の服裝や禮儀作法にも關心をもつてゐるのである。

國家興亡の重大時期に際して、斯くの如き指導者を上に戴くことは、タイ國民の至幸とするところである。全國民はピブーン首相の安福を祈り、同首相の指導によつて戰爭の必勝と國運の進展とを期するものである。

ピブーン首相萬歲！

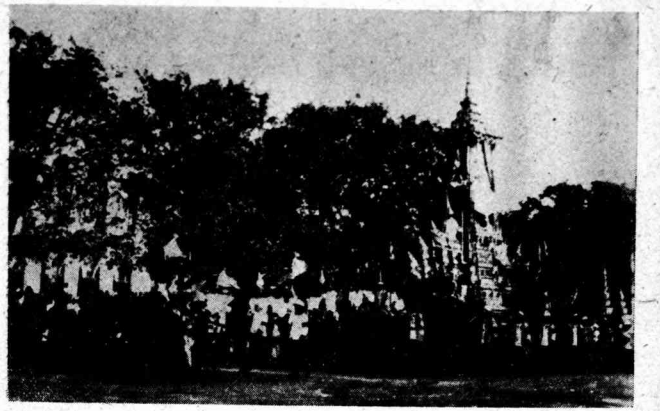
南京政府の使命

バーンコーク・クロニクル紙七月二日附社說

重慶政權が過去數ヶ月間に演じた割役は、言ふまでもなく一大悲劇として大東亞戰史に殘るであらう。今や、全東亞が外國勢力の支配を排除せんとする戰ひに從事し、その聖戰のため擧つて日本に協力しつゝあるに際し、重慶政府は侵略者たる英米の先手として働いてゐる。蔣介石と其の同僚は現實の事態を解せずして英米援助に狂奔し、同胞たるアジアの諸國民を制壓せんとした。今や彼等は、一方に於てアジア諸國民の排斥を受け、他方彼等が援助せんとした諸國は彼等を窮地に放棄して顧みない。その現狀は眞に憐れむべきものであつて、アジア人のアジアを目指す戰の最後の障害たる重慶の瓦解は最早遠きにあらざるを思はしめる。

重慶打倒は軍事行動によらねばならぬ。何となれば重慶の支配者達は條理に服することを知らぬからである。日本軍は今正にその軍事行動を著々進行せしめつゝあるのである。重慶は其のため總べての友國から隔離せられ、全海岸線を封鎖せられ、今や日本海軍は大平洋及び印度洋を制壓し、陸軍は四川省周邊の各地域に行動を展開中である。重慶政府が其の信用を日に增し墜しつゝあるに對し、王精衞氏を首班とする南京政府はその聲望を高め、重慶側黨人の南京政府に投ずるもの日に多きを加へつゝある。かくて、日本軍の威力と南京政府の聲望とは兩々相俟つて重慶沒落を招來し、普く世界をして南京政府を支那の正統政府として認めしむるに至るであらう。

南京政府は日本の全幅的支持を受くる王首席及びその同僚の精勵努力によつて、漸次その實力を增しつゝある。彼等は、支那救濟の道は日支提携を措いて他に無いことを力說して同胞の迷妄を解くに努めて來た。今やその主張の正しかつたことが大東亞戰爭の進展に伴つて實證せられつゝある。故に、日本の南京支持は今後南方に於ける軍事行動の進展と共に益々强力となり、又世界のこの地域から英米勢力の後退するに從つて重慶は無力化し、東京が支那を支配して故孫逸仙氏の熱望した國家の統一と進步のため努力するに至るべきことは疑ひないところである。



タイの靈柩車（竪棺）と葬列

資料欄

タイの外棺（コート）の由來

原著者　タイ國　ターニーニワット殿下

タイでは富貴な者が死ぬると、死體を坐棺に納め、更にその棺を被うて外棺とも云ふべき立箱に納める、この立箱を指してコートと呼ぶのである。これはタイ國獨特の習慣であり適當な譯語がないから原語のまゝ使用する。又原文がタイ語であるから、コートなる語もタイ風に發音する。併し語源が梵語であるから、西洋の學者にはKos'a（コーサ）として知られてゐる。（譯者）

（一）

富貴な者の死體を普通の棺のかわりにコートに納める習慣は

何處から又何時の頃から傳はつたものかと云ふ研究は、未だ明かにされてゐない。もつともこれは我々が餘りにもこの習慣に馴れ過ぎてしまつたせいでもある。筆者がコートを見る度毎に、何故坐棺（即ち死體を寢かすかわりに坐らす）を立箱に納めるかと云ふ疑問が湧き、同時に少なからず興味を覺えるのである。故に何等の豫備的知識がないにも拘らず、識者の研究參考に供せられん事を念願して、この考察を試みた次第である。

ダムロング親王、ソムモットアモラバン親王、ナリッ・サラ又ワットウォング親王の合著『コート並びに富貴者の棺の由來』によると、現在宮內省で使用されてゐるコートには左記十四種ある。

（一）　ブラ、コート、トーングヤーイ

（譯者註＝ブラは國王、王族の使用品を呼ぶ場合の敬稱である。トーングは『金』でヤーイは『大』である、故にこのコートは一番大きい金で造られたものと云ふ意味である。併し實際は金で造られたものではなく、木造に金箔を塗つたものである。）

（二）　ブラ、コート、トーング、ローング、ソング

これは前者と同格式のものである。

（譯者註＝ローングは受ける、ソングは尊體と云ふ意味）

（三）　ブラ、コート、トーング、レック

（譯者註＝レックは『小』と云ふ意味）

（四）　ブラ、コート、トーングノーイ

（譯者註＝ノーイは『少ない』と云ふ意味）

（五）　プラ、コート、クダン、ヤーイ

（六）　プラ、コート、クダン、ノーイ

（七）　プラ、コート、モンドブ、ヤーイ

（譯者註＝モンドブは尖塔と云ふ意味である。）

（八）　プラ、コート、モンドブ、ノーイ

（九）　プラ、コート、マーイ、シップソーング

（譯者註＝マーイは『木』、シップソーンは『十二』と云ふ意味。）

（一〇）　元コート、ラングカーと稱してゐたプラ、コート、プラ、オング、チャ

（一一）　コート、ラーチ、ニクトン

（譯者註＝ラーチニは『王妃』とクーンは『氏族』と云ふ意味）

（一二）　コート、クロ

（譯者註＝クロは『鎧』と云ふ意味）

（一三）　コート。ベーッ、リェーム

（譯者註＝ベーッは『八』リェームは『角』と云ふ意味）

（一四）　コート、トォー

（譯者註＝トォーは壺と云ふ意味）

右の內（十三）のコート、ベーッ、リェームと（十四）のコート、トォーが一番古いもので、トンブリー王朝時代のものであると記述されてゐる。しかしこれはただ宮內省で使用されてゐるコートの歷史を說くに止めコートに死體を納める習慣に關しては何等詳述されてゐない。

この研究は、コートに富貴者の死體を納める理由及びタイの傳統的習慣か又は他から傳來した習慣であるかを主題とするものである。

知つてる限りでは、カムボヂアを除く他國ではどの時代にもこの習慣が見受けられない。後期のカムボヂャに於ける習慣は殆んどタイから傳來したものであるから、タイがカムボヂャからこの習慣を受入れたものではないのである。日本には墓地の面積を節約するため貧者の死體を坐棺に納める風習がある。しかしこれはタイのものとは目的を異にしてゐる。卽ち、タイの如く富貴者の死體ではなく、貧者のものを納めるのである。いづれにせよ日本の習慣は何等タイの習慣に影響を及ぼしてゐないのである。支那に於ても死體を棺に坐納する風習が見受けられるが、これは宗教的觀念より發祥したるもので、何等富貧貴賤には關係がない。次にこの習慣がタイの傳統的のものであるかと云ふ問題であるが、これは史蹟に基き考察を試みる事にする。

前記三親王の合著に依ると、現在使用されてゐる坐棺には、トンブリー時代より古いものはない。卽ち今より百七十年前のものである。しかしコートを使用しはじめた時代については、アユッタヤー史によると、エー、カートッサロット王（佛曆二一四八年卽位）がナレースアン大王の死體をマハークリッダーターンに納めたとあり、其後もナーライー王（佛曆二一、二三一年卽位）が崩御された時コートに納めたとの記錄が殘つてゐる。其後ずつとコートが使用されてゐて、佛曆二二七五―二三〇一年頃の一王の名にもこのコートなる字句が取入れられ、プラチャオユーホアプラブロムコートと稱した（譯者註＝チャオは『主』ユーは『居る』ホアは『頭』ブロムは『大』の意味である。タイ語

では國王をプラ・チャオ・ユー・ホアと云ふ。これは頭上に坐す神と云ふ意味である。)前記マハクリッダーターンなる語（マハ＋クリッ＋ダーン）がはたしてコートの意味であるかは判明しないが、著者はさうでないかと推想してゐる。

(二)

次に語學的で考察すると、この語は梵語より來たもので『包み又は掩被』と云ふ意味である。石碑にもしば〳〵記されてゐて、その意味解譯に付て絶えず西洋諸學者の論爭を惹起してゐる。あるものはシワの像を安置する玉座であるといひ、あるものはシワ像であると說べ、あるものは佛塔と譯してゐる。中亞に於てはカーンヤー・クッチャ・ナコーン國のハンサー王の歷史であるハンサチャリット傳說が著れたパーンナカウィー時代（佛曆一一八八年）にムックコートと云ふ語が使はれてゐる。このムックコートは像（卽ちシワの像）を被せる露臺の付いた掩被であると說明されてゐる。

チャーム族のチャムペー王國が隆盛を極めてゐた時代にも像をコートで被せたと云ふ記錄がある。こゝで像の事に付いて一言說明を要する。

印度に於ける佛敎の衰微に伴ひヒンヅー敎が隆盛を極めた。ヒンヅー敎の骨子は三體の神、卽ち世界養育者のブラム、萬物の創造者のシワ又はイスアン破壞者のウィサヌ又はナーラーイである。信仰者はシワを主として奉戴するかウィサヌを主として奉戴するかの二派に分類される。前者は建設又は成功の表象として像を祭り、これを他の神器や聖地よりも崇敬したのである。このシワ奉戴者であつた印度人が、チャムペー王國に移住して來て、先住民チャーム族を支配した。かうしてシワ崇拜主義は海を渡り傳來して來た。尙シワの表象である像は、單なる像に止まらず、神化して遂に實際にシワが像に再生してゐると信じられるに至つた。そしてタイ國に於て種々の佛像を造り、各々に名を附けてゐる樣に、このシワ像の一體々々に名稱を附けてゐたのである。たゞ異る事は、タイでは佛像は佛恩を永久に記憶せしめる單なる像にすぎないが、チャム族のは像にシワの再生を信じてゐた點である。

コートに關し記錄した石碑にチャムペー國ミソーンの石碑がある。(Finot : Notes d'épigraphie XI BEFEO, IV)

例一（佛曆一六二三年）

(Finot : Notes d'épigraphie 中 p. 937-8. inscripticns XII B の譯)

眩しく光る寶石を鏤めた金のコートは、太陽の光線よりも輝かしい。寶石で晝も夜も眩しく照らしだされてゐる。このコートは四面寶に鏤められ、ワラマン王が建立したシワ像プラ・シー・イーサーン・パテラ・スアンに獻納されたものである。

其後、聰明なる王は、シワ像プラ・シウェーサーナリンヴに獻納するため、一、〇〇二年（佛曆一六二三年）に、四面の露臺に寶石を鏤めた月よりも美しい金のコートを造つた。

例二（佛曆一六三一年）

(Finot : Notes d'épigraphie 中 inscriptions XVI B の譯)

チャヤインタラワラマン王はシワを世のすべてのものの支配者であると信仰し、シワ像プラパッタレースアンに献納するため龍（ナーク）の飾りを施し尖頂に寶石を鏤めた六角の金のコートを造らせた。コートの木體は全部黃金で、コートの臺には各面とも寶石が鏤められてあつて、先は細く龍の頭になつてゐる。東に面した龍の頭頂には紅寶石、東北と西南に面した龍の眼には黑耀石、南に面した龍の頭には紅寶石、西に面した龍頭には黃玉石、北に面したもの

には翡翠が嵌められてゐる。この金のコートは、三一四ティン九ソゥ、六角の尖頂並に龍の頭及び臺は、一三六ティンにて、全部で四五〇ティン九ソゥの目方がある。一〇一〇年（佛曆一六三一年）

例三（佛曆一七九七年）

（Finot : Notes d'épigraphie 中 inscriptions XIII の譯）

この王（パラメスアンワラマン二世）は、五つの德即ち、仁德、譽德、恩德、美德、勇氣の德を有つ王である。この德を一時に世人に傳へるために五面のコートを造つた。このコートは、二三二個の金、寶石八二個、眞珠六七個、銀二〇〇個で飾られてゐた。

（三）

前記三つの石碑によると、コートはシワ像の掩被に使はれてゐたものである事が明確に解る。この掩被はたいていい金か又は高價な金屬で造られ、寶石並に美麗な模樣の裝飾が施されてゐる。六面（タイ語では六角と云ふべきである）のもあり、五面のもあり、四面のもあり面數に何等制限なく樣々の種類がある。又シワ像の掩被は三部に區分され得る。下部はタイ語で臺といひ、チァーム碑文の梵語ではアーターン『受けるもの』となつてゐる。中部は掩被の實體でウーランゥワコート『立掩被』と稱されてゐる。上部は蓋でありナークプサナ『龍の形をした飾物』と稱されてゐる。あるものは上部を龍の頭にし、あるものは龍を各面に造り、下部のアーターンを渦卷いた龍の飾にする等種々ある。こゝにアーターンなる語に注意を惹かれる。碑文にはアーターンをコートの臺の意味として使はれてゐる。歷史（アユッタヤー史）に記されてゐるアーターンは、ナレースアン王の死體を納めた棺の部分を稱するに使はれた。現代タイ語はチッタカーターンと云ふ語がある。これはコートの部分ではなく薪と云ふ意味になつてゐる。これはアーターン『受けるもの』と云ふ意味から變化したもので、コートの全體（下部の臺をも含む）を載せる薪の臺と云ふ意味である。コートは部分に分解されるものである事は、前記第二の石碑にて各部分の目方が記錄されてゐるのを見ても充分に立證されてゐる。タイのコートも同樣に分解出來得る樣に造られ、內側はタイがチァーム族のを眞似た點もある。

（四）

上記の如く、コートの研究資料は非常に乏しい。史蹟も何等正確にして滿足し得るものを與へてくれない。この考察で得られたる結果は左の通りである。

（一）佛曆十六世紀初葉に、シワ像にシワ神が再生してゐると信ずるやうになつたチァーム族は、シワ像を我々がコートと稱してゐる高價なもので掩うた事實

（二）タイでは、佛曆廿二世紀より王の死體を納めるものとしてコートを使用した事實

問題は、この二つの事實が何等かの點に於て關聯してゐるか否かである。

既に知られてゐる如く、チァーム族の文化と同じ文化がカムボヂャに見受けられた。カメーン（＝クメール）碑文によると、チャヤワラマン二世がジャワから約佛曆一三四五年に渡來した頃、シワ像を神そのものであると信じ崇拜してゐた。尙國王はシワ神の化身であり、シワに代り國を統治するものであると考へ、シワ像によりこれを世人に指示してゐた。從つて國王が崩御すると、當然神化し、神として祭られる習慣となつた。王の戒名のプラプロムウィサヌローク、プラプロムシワローク等にも、この信仰の結果が現はれてゐる。死んだ王は神化され、神と同位になるか

ら、當然神に使用する掩被もやはり死んだ王にも使はれると其時代の人々は考へてゐた。タイはこの習慣を受入れて國王の死體をコートに納める樣になつたのである。其後コートは國王より低位の者にも使はれる樣になつた。これは官位階級の觀念が時代に從ひ異つて來たからである。敬稱を例に取つて見ても、當初國王に對するものであつたのが、いつしか低位の者に對しても使はれる樣になつたものが少くない。例へばカープラブッタチャオ（譯者註＝カーは奴隷　プラブットは佛陀、チャオは主である。即ち主である佛陀の奴隷と云ふ意味で、私と云ふ事である）と云ふ敬稱も、段々下落して現今では、著者の階級に對しても固く禁じてゐるに拘らず使用する人がある。

（五）

尙この他にチャオ・プラヤー・タム・マ・ティ・コラナー・ティ・ボー・デイーが指摘した事實も重要な材料である。この事實によると火葬場にコートを安置する場所をメーンと稱す。現在このメーンは、一般にコートや普通の寢棺を安置する場所の俗稱となつてゐる。メーンは昔シワ神及び他の神々が君臨してゐた山を摸倣したもので、死體を納めるコートがシワ像を被ふものであるなら、コートを安置するメーンもシワの住居でなくてはならないのである。故にメーンは高くして階段で上り下りをしなければならず、富貴者になるほど高くする。

又メーンに安置される前にコートはベンチャーの上に乘せられる。このベンチャーは、ダムロンヶ親王によると、カムボヂャのアンコル・トムの廢墟中の神鳥が刻まれた籠形の神居臺と同じもので、シワ神のものである。

（譯者　江尻英太郎）

フアン・フリートの「暹羅王國誌」による

アユチヤ時代の宗教（二）

奥村鐵男　譯

僧侶の住居と生活

僧侶の住居と僧院とは、すべて寺院の周りに建てゝある。大抵、これは木造である。表と裏は、鏡板や浮彫細工で巧みに、しかも立派に飾られ、内と外は、目も綾に黃金を被せたり、繪具を塗つたりしてある。屋根は瓦葺で、隅々には石灰を塗り込めて、精巧に切つた木の裝飾がつけてある。ある住居では、梁や屋根梁、さては瓦木舞がすつかり金を被せるか、繪具を塗るかしてある。これらの僧院には、大勢の僧侶が（平和に）住んで居て、彼等は方丈以下と（非常に嚴格に取締り、且つ偉大な權力をもつた）教會の役員とに分たれてゐて、彼等はまた、最高の支配者、即ちアユチヤの主な寺々の四人の司教の命に服さねばならないのである。ナープラターテの司教が、最も威嚴をもつてゐる。

これらの司教たちの宗教上の權力は、驚くべき程偉大で、彼等の人格は非常に敬はれ、且つ尊まれるが、世俗の事柄では、國王の命に從はねばならないのである。アユチヤには、凡そ二萬の坊さんがゐる。全國に於ける彼等の數は、正確なところはわからないが、アユチヤにゐるものの四倍以上であることは間違のないところである。修道僧は

すべて例外なく、粗末なありふれた黄色の亞麻布を身に纏ひ、わづかに二三の主だつたものが、赤い布を右の肩にかけてゐる。彼等は頭を丸めてゐる。最も博學なものが司祭となり、この中から、國民に非常に敬はれる寺々の住職が選ばれるのである。僧籍にあるものは結婚を禁ぜられ、これを犯すものは火炙の刑に處せられる。女人と話をすることもまた禁ぜられてゐるが、(彼等の意志の薄弱なことは周知の如くで)僧門を去つても一向差支なく、肉慾のため多くのものが還俗するのである。しかし、結婚生活がいやになれば、また僧衣を着て差支なく、こんなことをする人たちすら、非常に尊敬されるのである。どの僧院でも、住職、托鉢僧、執事及び寺男等が朝夕讀經詠歌する。彼等は何等財寶を集めようともしなければ、また何か他の世俗的な品物とか、財産とかに對して熱意をもつてゐない。彼等は一部分は、國王及び役人たちが彼等に與へたもので、また教會所有の地所から得る果物や收益で生活をする。しかし大部分は、一般の人々から喜捨を受け、人々は彼等に食物やその他の必需品を供給するのである。各僧院から毎朝、托鉢僧や執事が幾人か、頭陀袋をもつて外へ出される。しかし彼等は一日分以上は集めないのである。彼等は酒またはアルコール類を飲むことを禁ぜられてゐるが、普通の水かまたは、ココ椰子の汁を飲むことだけは差支ない。またありふれた食物をたべても差支がなく、しかも、晝過ぎからは、蒟醤(キンマ)だけを少々嚙んでよろしい。これを要するに、僧侶は頗る簡素な生活をしなければならないといふことになる。これらの男僧のほか、主な寺々には大勢の老女が關係をしてゐて、彼等もまた頭を丸めねばならない。彼等は白い布に身をつゝみ、法話、詠歌、儀式、その他、宗教に關する機會には、必ず參列してゐる。彼等は、しかしながら、何等特別の掟には縛られてゐず、宗教的情熱と自由意志とから、萬事を行ふのである。彼等もまた、人々から受ける施物で生活しなければならない。その中には、若い娘とか姙婦はゐないのである。

異教の根本

これらの異教徒は、自分たちの宗教に就いて、いろ〳〵の意見をもつてゐるが、一般に、天上には永劫無邊で、萬物を創造し給ふた最高神(とその他多くのそれ以下の神々が)在しまして、その聖なる力によつて、萬物を保持し給ふのであると信じてゐる。彼等もまた、人間の邪惡に對する神の怒により、この世界は一度は滅亡すると信じてゐるが、靈魂は不滅で、人間の身體を離れると、彼等の生活や神々から當然受くべきことに基いて、象とか馬、牛及び他の家畜や家禽とかの凡らゆる種類の動物に乘り移る。しかし、この世界が破滅してから、誰も彼もまた生き返つて、その行ひにより、善因善果惡因惡果を受けるのである。善根功德を積んだものは、後には神々と幸福に暮らし、罪障の深いものは、惡魔のひどい責苦に會はされる筈である。これが彼等の宗教の根本で、彼等のいふ、二千年よりもつと以前に書かれた掟であつて、多くの上人たちによつて確認されてゐるのである。これを記念して、人々はこれらの上人たちのために(恰も小さな神々でもあるかの如く)影像を建てゝ、迷信深く拜んでゐる。その上、教會や偶像、僧侶や貧民に施物をして、生きとし生けるものに慈悲を施さうと努める。彼等は、惡魔の怖ろしい責苦をのがれるため神や天帝を悅ばせようと、一生懸命になる。極く信心深い敬虔な人々は、寺々の祭に際して、澤山の鳥類を放すが、このためにこれらのものが澤山賣つてあるのである。何故かうするかといふに、人間を救ふものは罪障だけで、その死後は、動物に生れ變ると信ぜられてゐる如く、これが完成してしまへば、動物ではなくなるのである。暹羅の宗教でもまた、人間の惡行はすべて、罪障といふことになつてゐる。これにも拘らず、かういふ罪が頗る頻繁に犯されてゐるのである。僧侶は生々とした說教や教訓、或は警告といふやり方で、人々をよくしようと絕えず努力してゐるが

往々にして殆んど功を收めてゐないのである。といふのは、人々は滅多に悔恨の情を示さうとはしないからである。これは人々を後悔させて、その行の償ひをさせる國王の强い力や、壓制的な支配以上のものである。

主なる儀式と信心

通例月に四回、新月、滿月及び弦月の時、人々は眞心籠めてお寺詣りをする。年に數回、(特に三月及び十月に)特別の大祭があつて、大勢の人々が、(如何にも、滅多に外へ出ない婦人連や高位高官の人々によつてさへ)嚴かに擧行されるのである。この異教の主なる儀式は(僧侶が印刷(註一)した書物を讀むのであるが)前にもいつた通り、昔の有名な國王を讃へ、その生涯及び行爲に關する教義で、詠歌、朝夕の潮の滿干、僧侶への供物で、これと一緒に寺へ澤山の籌、蠟燭、香、草及び花をそなへるのである。法話が始まる前と、終つてから、大勢の人が手を合せ、寺の周りに身を屈めて、彼等の作り上げた(註二)最高の神やそれ以下の神々及び上人たちを現はす偶像を一生懸命拜むのである。かうすれば、人間の邪惡に對する神々の怒を防ぐと信じてゐる。彼等は自分をよい方へ懲らしめるため、毎年三ケ月間續けて、數種の食物をとることをやめる。しかし、今の國民は頗る信心深くて、これに尙怪三ケ月の斷食をつけ加へ、この期間中は何人も(その生活を懲らしめるため)如何なる家畜も魚もつかまへてはならず、殊にどんな生き物も殺したり、アルコホール氣のあるものを飲んではならない。彼等は、わづかに神や自然が野原に實らせてくれたもので、露命をつながねばならない。これは勿論、人間は動物をまもるため苦しまねばならぬといふ、間違つた憐憫の情であり、奇妙な迷信である。彼等もまた靈魂を祈り、死んだ人々をうやまふ。かういふことが迷信深く、洗ひ清め、頭を剃り、聖油をそゝぎ、幾度も〳〵よく祈り、毎日泣き悲しみ、親友や(男女の)奴隸がその頭を剃つて、萬事火葬の

用意が出來るまで、いろ〳〵の儀式を行つて腐敗せぬやうにしておく。この儀式は死者の地位によつて行はねばならず、非常に時間を要し、それ故に、時には死骸を箱に入れ、地上に十二ケ月から十三ケ月置くのである。愈々最後に死者の身分に從つて、僧侶の祈禱、芝居、いろ〳〵の樂器をつかつた音樂、花火及びその他の見世物を一緒にやつて、寺の近くで荼毘に附する。それから遺骨を拾つて、小箱に納める。この箱に聖油を塗つてから、寺の近くに埋めるのである。富裕な人々は、この埋葬地に立派な、黃金を被せた高價なピラミッドを建てる。これがために、巨額の富が費され、無駄にされてゐると、われ〳〵は結論を下しても差支ないのである。この世界で、暹羅人は死後、遺骸の埋葬を何物にもまして、心にかけてゐるのである。その存命中は如何に貪しく、無茶であつても、彼等は荼毘の用意に何かを殘して置かうと、いつも努めるのであらう。しかし、過つて溺死したもの、殺されたもの、或は疱瘡で死んだものは、火葬にせずに河か野つ原へ投げ棄てなくてはならない。しかし、時折、(誰もゐないところで、寺から遠く離れたところで)密かに火葬にされ、僧侶も見て見ぬふりをしてゐる。

註一　經文はバイランの葉に書いたものを誤つて、著者はかく記してゐる。

註二　原文にある Opuis は Opus の誤。

他の宗教を適度に敬ふこと

聖職者や俗人の間には、この宗教に就いていろ〳〵の意見が行はれてゐるが、彼等は極めてもの靜かに暮らして、何等口論したり、不和であつたり、反目したり、或は分派對立することがない。キリスト教や回教に對しても、極めて控目に振舞つて、誰の意見も非難せず、また何人の良心も强要しようとさへしない。しかし、今の國王は(暹羅生

れの回教徒を兩親にもつ）或る種のムーア人を強要して、異教に抱擁しようとした。いろ〳〵様々の宗教では、人間は天國に入ることが出來、また多くの宗教は、最高の主のお氣に召すものであるといつて、僧侶たちがこれに反對した。とはいへ、彼等自身の宗教は、多くのもののうち最善のものであると、掟や經文で堅く信じ込まされてゐて、容易には變へられないのである。しかも、これを證據立てるため、彼等は、ローマン・カトリック教を傳へようとした數名のポルトガル人の企圖が、殆んど、或は何等の成果も擧げ得なかつたことを引合ひに出すのである。回教徒もまたポルトガル人同様、自由にその宗教を行ふことを許されてゐたにも拘らず、何等の成功も收めなかつた。ポルトガル人が殆んで成功しなかつたことを、その僧侶たちが殆んど熱情がなかつたせいにしてはならないが、主として、暹羅人の古くからの習慣と頑固さによるものである。

惡魔への怖るべき犧牲（いけにへ）

既に述べた如く、これらの異教徒は頗る迷信深く、且つ敬虔ではあるが、（多くの僧侶の意見や學識に反對して）、彼等は（僧侶の意見によると）善の神に於ける如く、惡の原因である極惡非道の惡魔に公然と仕へてゐるのである。病氣の時は、彼等は幾多の儀式や、賭事、飲酒、舞踊、跳躍をして、奇妙な饗宴を催す。數箇の果物や動物が供へられこれらの動物が、踊つたり、歌つたりしてゐるうちに死ぬと、これは惡魔を滿足させて、病氣が直るしるしである。惡魔に生贄を捧げる時、キリスト教徒には、これを正視するに堪へないやうな怖ろしい醜行や、信じられぬやうなことが、往々にして演ぜられる。何故かといふに、これらの饗宴には、時としては、老年で腰が曲つて、ごつ〳〵して踊れない婦人が雇はれてゐるが、その弱々しさや老齢のためではないが、惡魔の力でこんなことどもを實地にやつて見せ、且つ不思議にも、跳んだりはねたりすることが出來るのである。若し、若い娘が踊ることゝなると、惡魔はこれを益々悅んで、如何にも、奴は娘たちと肉體の交りをさへもする。こんな供物や犧牲を供へて、貧しい、さまよへる人々は、强大な主を滿足させようと努め、これがために、彼等は惡魔の不道德に身も心もゆだねて、全智全能の神が全然顧みられなかつたと結論を下してもよろしからう。（つゞく）

タイ國閣僚名簿

（九月八日現在）

＝官位廢止に伴ひ公名の變更されたるもの＝

內閣總理兼國防大臣陸海空軍元帥	プレーク・ピブーンソングクラーム
大藏大臣陸軍少將	パオ・ピエンラート・ポリパンユッタキット
外務大臣	ウィチット・ウイチットワータカーン
農務大臣海軍中將	シン・コムマラナーウィン
文部大臣陸軍大佐	ブラユーン・パモーンモントリー
內務大臣陸軍中將	マングコーン・ブロムヨーティー
司法大臣海軍大佐	タワン・タムロングナーワーサワット
厚生大臣陸軍少佐	チュアーングチャウエーングサック・ソングクラーム
商務大臣陸軍少佐	クアングアパイウオング
產業大臣空軍中將	ムニー・マハサンタナ・ウェーチヤヤンラングシット
交通大臣陸軍中將	チャルーン・ラタナクン・セーリールアングリット

昨年度タイ國檢定試驗結果

諸地方に於て昨年中（佛曆二四八四年）に實施された檢定試驗の結果は左の通りである。

	志願者	合格者	比率
第一次試驗	六一、一〇〇	四一、一六四	六七・三七
第二次試驗	三三、七三九	二四、七九〇	七三・四七

尙、プラタボーンダ、パタニー、ピブンソンクラヽムに於ては、初級タイ語特別試驗を施行した。受驗者一、一〇一名中合格者九二九名にして八四・三七の比率である。

（バーンコーク・クロニクル　六月三十日）

タイ國に於ける新國旗掲揚法

タイ國旗を外國旗と併揚する場合の取扱規定に關する國旗條例（第四號）が五月十九日附の官報（週報）で公布された。

同條例に基き官報と同時發表された內務省令によれば、宣傳局は適時に臨み國旗掲揚又は外國旗併揚を奬勵すべく任命された。

國旗掲揚の規定は左の通りである。

一、外國旗又は二旒以上の外國旗が掲揚される場合にはタイ國旗も併揚すること。

二、外國旗が一旗の場合のタイ國旗の位置は內側から見て外國旗の右手に竝べること。

三、一旒以上の外國旗と併揚する場合、タイ國旗を合せて奇數ならばタイ國旗を中心になすこと。

四、一旒以上の外國旗と併揚する場合、タイ國旗を合せて偶數ならばタイ國旗は內側から見て右手に對して中心になすこと。

第二條によれば、外國旗と共に併揚される場合、タイ國旗は外國旗よりも小さくなく、高さも低くなく、瑕瑾のない色の區別のはつきりしたものでなければならぬ。

（バーンコーク・クロニクル　五月二十日）

タイ國七會社の定款登錄

左の諸會社が商業登記局に會社定款を登錄した。

會社名	資本金	職別
ルアーム・ミット會社	四萬バーツ	貿易業其他
マーイ・タイ會社	一一萬バーツ	林業
チャイ・パット會社	一〇萬バーツ	食料品其他

チァイ・タレー會社	一六萬バーツ	農產品及び家畜業
タイワラ會社	一二萬バーツ	
アンチャリー會社	一萬バーツ	
タイ・ニ・ティ會社	五〇萬バーツ	輸出入其他

（バーンコーク・クロニクル　六月三十日）

紙の製造及び輸出に關する規定

六月二十三日附商務省より發布された內閣條令中に左の如き條項が含まれて居る。

一、第七條に因り凡ゆる種類の筆寫用紙及び印刷用紙の輸入禁止。

二、第五條に因り家庭製紙業に從事する者は左の條件に從はねばならぬ。

a　藁、コイ、樹皮、カサー、ジュート又は麻、ジュート類の纖維を原料とすること。

b　製紙方決として機械使用の場合は三馬力を超えざること。

c　勞働者の採用人數は十人を超えざること。

（バーンコーク・クロニクル　六月二十七日）

同盟慶祝答禮使節訪泰日誌

答禮特派使節隨員
在タイ日本大使館商務書記官　丸山眞壽夫

左は過般日タイ攻守同盟慶祝答禮特派大使廣田弘毅氏、全權大使矢田部保吉氏等使節一行の隨員としてタイ國に派遣された丸山氏の手記で、使節一行の訪タイの情況は、これによつて委曲盡されてゐる。よつて玆に全文掲載、會員諸賢の御參考に供することゝした。（編輯部）

七月十日

午前十時（バンコツク時間：以下同じ）ドンムアン飛行場着、泰國儀典局長陸海軍儀仗兵および坪上駐泰大使、館員等の歡迎を受け、兩國國歌の吹奏のうちに廣田大使の儀仗兵視閱、沿道ギツチリ堵列したユワチョン、ユワナリのうち振る日泰兩國旗の波を拔けバンコツク・チツトラダー宮廷停車場着、ピブン總理、各大臣、人民會議長、パホン中將、陸海軍司令長官らの盛大なる出迎へを受け、驛頭花々しき交驩の幕を切る。正午過ぎ一同停車場發、街々を飾る日泰兩國旗の大アーチを拔け、凡そ一萬人のユワチョンの〝チヤイヨ〟を浴びて一行の宿舍バントムシンの館に入る。これは前式部長官が皇帝から賜つた宏壯華麗な邸宅で、泰國では一行のため十五萬圓を投じて手を入れ、まだペンキの香りが殘つて居たが、心盡しの日本式風呂場まで造つてあつた。

七月十一日

今日から一行は國賓待遇に入る。宿舍のボトイ（宮內省差廻しの役人）警護の人數はとみに殖え、嚴重を加ふ

午前一行は宮中に參内（御幼少の皇帝はスイスに御滯在中）次いで三攝政、人民會議長、外相、國防相を訪れ夫々記帳を行ひ、外の大臣は一行の名刺を通ず。午後は宮廷内の王室の菩提寺エメラルド・ブッダ參詣、御本尊は凡そ二尺の高さ、全身エメラルドで造られ黄金の衣をきとつた佛像で、泰の主權の表徴としてあがめられ、過般の日泰攻守同盟調印もその前で行はれた由緒を持つ。次いで一行は泰國無名戰士の墓碑に參拜、廣田大使は花環を捧げ、整列の儀仗兵を視閲の後プラシーハマツト寺院にも參詣した。

七月十二日

午前宮廷において二攝政に謁見、廣田大使は國書を捧呈したが、この時の大使の慇懃な物腰は深き印象を殘し爾後の修交を極めて效果的に導いた。廣田、矢田部兩大使、水野隨員、岡本、岩越兩少將、三島隨員にこの日泰國の最高勳章が夫々贈られた。正午賜餐。この日バンコックおよび對岸のトンブリー兩市は見る目も遙かな日泰兩國旗の波で埋められて居た。午後は宿舍で泰國新聞記者團と會見、ステートメントを發表した。婦人記者や外國通信員等を交へた凡そ四十名の記者團と廣田大使の間には色々の應酬があつたが、大使は九十四歳の嚴父の寫眞を示し、泰國の人も健康に留意され國家に盡されたいと語る。翌日の新聞は早速德平翁の寫眞を掲げて居た。使節團は總理、人民會議長、パホン中將、外相および國防相らを訪問、それ〴〵會見、夕刻宿舍へ答禮客が相次ぎ、夜は揃ひのメスジャケットに勳章を佩用して外相官邸の晩餐會に臨んだ。席上泰國國立技藝學校生徒の幽玄な古典舞踊は見ものであつた。

七月十三日

午前は日本軍隊の英靈奉安所、兵站病院を訪問、花束と慰問文を送つたが、夜は大禮服を着用、總理大臣官邸で招待晩餐會が開かれる。泰國軍樂隊の演奏のうちに、天皇陛下と皇帝陛下のために乾杯が高く擧げられた。

七月十四日

午前チュラロンコーン病院および毒蛇血清試驗所見學に次いで、泰國海軍兵學校で學徒の訓練ぶりや珍しい擊劍を視察、正午泰の商業會議所主催の午餐會において盟邦の實業界代表と隔意なき懇談を行つた。午後は泰國陸軍病院を訪問、日本軍と共に武器をとつて勇戰傷ついた將士を懇ろに見舞ひ、大使は國防省管下の泰國病院に對して十萬バーツの寄附を行つた。夕刻坪上大使のお茶の會に招かれ、泰國各大臣も出席、鮎やおでんの懐かしいふるさとの料理に舌鼓を打つた。夜は國防相招待の晩餐會が開かれ泰國陸軍軍樂隊の勇壯な吹奏樂があつて、兩國陸海軍將兵は軍事專門家の立場から懇談、握手を交はした。

七月十五日

朝特別列車でアユチヤに向ひ、同縣の少年團の歡迎裡に縣廳を訪ひ、近邊の史蹟を遍歷、博物館に〝日本人街〟の興味深い參考資料を見學した。次いでアユチヤから二隻のランチでメナム河を下り、途中で〝日本人町〟の遺蹟を訪ひ、山田長政神社に參拜、偉大なるその足跡を偲んだ。船でバンコックまでの川下りは連日の暑い生活に爽快な風を入れ、一行大喜びであつた。夜七時廣田大使は宿舍からラジオを通じて泰の全國民に呼びかけ、歡迎の謝意と共に兩國將來の固き提携を說いたが、次いでオリエンタルホテルで開催された日本大使館主催の晩餐會では、使節團が日本から携へた「パホン使節歡迎」の映畫を上映、南國の夜の庭園には泰國顯官の破れるやうな大喝采、大感激がいつまでも續いた。

七月十六日

午前十時ワツトアルン、タラツト兩寺院參詣、泰國僧侶の讀經のうちに、兩大使は日泰兩國民共通の宗教的敬虔をこめて慇懃に禮拜、兩寺院に喜捨を行つた。午前十一時人民議會を參觀ののち泰國に二頭しかゐない珍しい白象を見せてもらひ、廣田大使自ら飼料を與へ、好奇の一時を過した。正午議事堂脇の國立アンブン公園で泰國の日本—タイ協會主催の午餐會が開かれ、同席のかつて日本へ遊學した泰人三十名に對して兩大使は心からの激勵を行つた。ついで一行はバクナム水中寺院に參詣、バンブー海岸でバクナム縣知事招待のお茶の會に招かれ、爽涼の風に寛いだ。夜九時からチャラン國立劇場で花々

しく、〝觀劇の夕〟が開幕され、劇作家としても名高いヴイジツト外相が使節團のために特に書きおろした自作の劇が王立技術學校出身の粒揃ひの舞踊家達によつて絢爛豪華に演ぜられ、兩大使は舞臺で記念撮影をして南國の麗しい藝術的香氣にひたつた。廣田大使は觀劇中いさかの疲勞も見せず、外相と歡談する光景は人目をひいた。

七月十七日

午前九時宮中に參内、ワツトベチヤマン寺院に參詣、市内見物、正午はバホン中將邸で午餐會、純粋の泰料理に香辛料の美味を味はつた。午後はワツトスタツト寺院における佛教協會主催、泰隨一の高僧が導師となつて盛大な供養會に列席、ついでバンコツクおよびトンブリー兩市長主催の茶會がアンポン公園で開かれ、泰國の拳闘、劍術、體術を興味深く見た。夜九時半からトロカデロ・ホテルで廣田大使主催のお別れの晩餐會で泰國顯官を招く。この日から一行の國賓待遇は終り、政府の公式賓客となつた。

七月十八日

午前中はお暇乞ひの記帳に各方面を訪れ、午後からは特別列車でフアヒンの避暑地に赴き、松林に圍まれた風光絶佳の海岸でゴルフ等に打ち興じて、一泊。翌日バンコツク歸着、夜はタイニヨム國策會社主催の晩餐會に臨んだ。

七月二十、二十一日

歸國の準備のうちにイタリア、ドイツ公使、タムロン法相等の午餐會や隨員の個人的な交驩が續けられた。

七月二十二日

いよ〳〵歸國の日、午前七時宿舍に別れを告げ、停車場着、ドンムアン飛行場まで沿道の熱狂的な歡迎をうけて午前八時サイゴンに向けて出發。さしもの飛行場を埋める旗の波に機上から答へながら窓外を見ると、泰國の爆擊機九機と戰闘機九機がひしと離れず、われ〳〵を國境近くまで護衛してくれたので、感激した。

タイ國關係雜誌記事

本協會調査部編

三月（つゞき）

○南方諸國發券機關及通貨概要　東亞經濟事情

四月（つゞき）

○泰國の資源について　矢部茂社　交洋

○タイ國改正豫算（一九四二年度）　南

○泰國の勞働事情—南方勞働事情解說　永丘智太郎、國策研究會週報

五月（つゞき）

○泰國使節團の來朝　週報

○變貌する泰　吾妻隆男、海

○タイ國經濟の現狀と今後の問題點　東洋經濟週刊（九日）

○泰國「バート」貨の磅難脫　本堂經夫、東亞經濟月報

○南方圏の人口分析と資源研究　公藤雄國民公論

○泰國を語る　二見甚郷　ダイヤモンド（十一日）

○戰時泰國の指導者ピブーンと彼を繞る人　仲功世界週刊（十八日）

○日泰爲替協定の本質的檢討　經濟タイムス

○香港星港の潰滅と泰國經濟の變貌　杉山清國際經濟研究

○東亞留學生の印象　富永次郎觀光

○かくてわれら結ばれたり（スキーの日記）　ソムシイ同

○同　（雪の思ひ出）　ナーヴイン　同
○觀光局在外事務所の動靜に就てーバンコック　國井富士利　同
○泰國に於ける本邦商品狀況(四)　秋友安　貿易情報(四二報)
○泰國事情座談會—泰を語る(五)　同
○タイ國の經濟建設　川田富久雄　新亞細亞
○タイ語の月名について　東元多郎　同
○タイ國破產法全文(二)　奥野金三郎　同
○泰の女たち(繪と文)　川島理一郎　國民服
○泰國慶祝使節來朝に關する外務省發表　國際月報
○日泰爲替換算率改訂に關する外務當局談　同
○日泰爲替換算率改訂に關する大藏當局談　同
○タイ國の服裝を語る　田中正夫　被服(十三卷三號)
○南方の先驅者　柴田賢一　政界往來
○バホン特使を迎へて　酒匂秀一　南洋
○タイ國對外政策の史的考察　永丘智太郎　同
○南方共榮圏に於ける立體的高度國防の重要地下資源(二)　吉野楢三　南方
○タイ國政治とラタニヨム運動　秋永肇　同
○泰國雜記　平坂義尙　同
○泰・佛印紀行　泰佛印旅行團　臺北高商南支南洋研究
○泰國經濟の急轉換　田中山城　貿易統制會々報
○タイ國の勞働問題　明石二郎　社會政策時報
○泰國の近世に於ける諸外國との接觸(二)　乾演生　地政學
○新興タイの旅行記　笹川泰彦　世界知識
○タイ國の動向　田村浩　東洋
○泰國の新生活樣式(盤谷タイムス一・三)

○職前の泰國の列國投資　綿輪月報
○日泰通貨等價協定　ダイヤモンド(一一日)
○日タイ通貨の等價成立　外交時報
○南方の佛教　久野芳隆　東亞月刊
○東亞のスエズ、クラ運河開鑿問題　東亞文化圏
○タイ國金融制度の外貌と性格　山下太郎　臺灣時報
○バンコック素描　山脇巖　經濟タイムス
○日泰通貨及び決濟協定に就て　國際文化(一九號)
○圓・バーツ等價を實施・日泰間に圓貨決濟協定成立・　日本興業銀行調査月報
泰國經濟再建に着手　同
○Japan Honors Thai Mission : Japan Times Weekly Vol. XII, No. 1
○Japan-Thailand Reach Yen-Baht Agreement : „
○The Yen-Baht Agreement : „
○New Broadcast From Tokyo : „

六　月

○ピブン首相と大東亞を語る　山本實彥　改造
○アーンコール詣で　武藤智雄　知性
○泰國の住宅　大山周三　朗
○白象物語　矢代不美夫　科學
○泰國事情座談會—泰を語る(六)　貿易情報(四三)
○泰國事情座談會—泰を語る(七)　同　(四四)
○タイ史話フォールコンとその妻(二)　郡司喜一　新亞細亞
○アンコール　荻須高德　新美術
○新たなるタイ　宮原武雄　南方情勢
○タイ國の一習俗—生產から成年まで　奥村鐵雄　經國
○メナムの水祭(小說)　大倉燁子　日本女性
○クラ地峽連洋運河開鑿計畫　東亞經濟月報
○南の踊り(南方圏の舞踊)　光吉夏彌　サンデー毎日(十四日)
○南方資源讀本(チーク材の卷)　寺島良三　週刊朝日(十四日)
○泰國使節團の來阪　海
○泰國北境雜記　西野源　同

○南方農民經濟と協同組合—タイを中心として(一)　山田武實　務知識
○南方華僑の經濟力　竹井十郎　經濟マガジン
○風雲兒長政　山内秋生　良國民
○泰國の會社企業　ダイヤモンド(十一日)
○歌劇ラーチャマヌー(十三)　ワータカーン　外交(一日)
○同(十四)　同　同(十一日)
○同(十五)　同　同(廿一日)
○對タイ文化工作は白紙から　柳澤健　報道寫眞
○日泰借款成立　國際經濟週報(廿七日)
○タイ國棉花の概況　南洋栽培協會々報
○泰國改正通貨法　同
○ピブン首相の胸にあるタイ國の新首都　サンデー毎日(二十一日)
○シャムの諸民族とその生活形式(上)　瀧田勝　東亞研究所報
○タイ民族考　宮原義登　時局月報
○華僑の獨占下にあつた南方精米事業の過去と將來　世界知識
○タイ國の農産資源と土地利用　矢鳴仁吉　地理學研究
○泰國水産業の概要　高山伊太郎　海洋漁業
○泰國の立憲革命(中)　竹村和夫　東亞論叢
○タイ國農業の概觀　臺灣農會報
○タイ國經濟の動向　川田富久雄　南洋

七月

○タイ王國に山田長政の遺跡を偲ぶ　竹下康國　南進
○泰國經濟政策の飛躍　國際經濟週報(十一日)
○タイ佛印新國境の劃定成る　同
○タイ史話フォールコンとその妻(十三)　郡司喜一　新亞細亞
○南蠻美術と南方回顧　石黒敬七　週刊朝日(十五日)
○泰の宣傳ポスター(グラフ)　國際文化
○南方諸地の教育はどう行はれて來たか　文部省教育調査部　週報(二九日)

雜報欄

○タイ佛國境劃定調印式

我國外交史上に一新時代を劃し、皇國が大東亞共榮圏の盟主たるの現實をあまねく顯示したタイ・佛印國境紛爭に關する調停はめでたく結實し、現地議定書調印式は七月十一日サイゴンにおいて行はれた。東亞をめぐる英米蘭諸國の狂躁的な對日包圍陣結成のさなかにも拘らず、日、佛印、タイ三國の眞摯な努力と、互讓的な平和理念によつて成立したフランス、タイ間の平和條約及び附屬議定書の調印成り、批准交換されてより滿一年、國境劃定委員會はあらゆる障害を克服して、國境の實地劃定に、地圖の作成に、境界標識の建設に全力を傾倒し、七月二日を以て難事業を完成、かくて作業開始以來滿一年の七月十一日午前九時(日本時間十一時)からサイゴン市廳會議室において日本(矢野)佛印(ロック)タイ(サヤマカン)各委員長以下全委員出席、現地議定書の歴史的調印式が行はれ、新東亞建設の一つの礎石は固く築かれた。三國委員が北部國境から蜿蜒メコン河に沿ひ、ラオス、カンボヂアの秘境二、二三一キロにわたつて、兄弟のごとく助け合ひつゝあつた、一年の間に、歴史はめまぐるしく轉換し、大東亞戰勃發、日佛印共同防衛、日タイ攻守同盟と新秩序建設の歩武が耳をとどろかす時、記念すべき調印の日を迎へたのである。委員の感慨は無量なるものがあらう。この日定刻市廳舍に着いた矢野混合委員會議長は包みきれぬ喜悦を浮べつゝ佛印側委員長ロック・タイ側委員長サヤマカンの兩氏らと感激の握手を交はした。正面の大日章旗を中心に、タイ、佛兩國旗が莊嚴に掲げられた調印式場に三國委員が肅然と並び、矢野議長の開式の辭あつて調印に移り、佛領印度支那、タイ國間國境劃定に關する議定書、非武裝地帶に關する議定書及び最終議定書の調印を行ひ、矢野議長及び佛印、タイ兩國首席委員はそれ〴〵演說を試み、同演說は議場のマイクロフォンを通じて各地に放送された。

また同委員會は左の如きコンミュニケを發表した。

佛印、泰國々境劃定委員會は昭和十七年七月十一日午前九時サイゴン市廳において第四回會議を開催し、日、佛、タイ三國委員は左の議定書に署名せり

一、佛領印度支那、泰國間國境劃定に關する議定書
二、非武裝地帶に關する議定書
三、最終議定書

（七・一一、サイゴン發朝日）

○日タイ合辦米會社設立

輸出餘力一千餘萬石を有するタイ米の東亞共榮圏内における役割は、頗る重要性を持つが、最近これを一元的に統制して、圏内食糧需給の上に活用するの必要愈々加重するに至つたので過般來日タイ兩國間において種々折衝を重ねた結果この程日タイ合併のタイ・ライス・カンパニー（資本金一千萬圓）を創設、輸出タイ米一元的統制會社たらしめ、圏内食糧の需給に有意義なる活動を行ふことに正式の契約が成立した。しかして日本側においては新統制會社に對し半額の五百萬圓を出資することゝなり、これが出資は近く設立される中央食糧營團が全額引受けることになつてをり、社長はタイ國側代表が就任し、副社長に日本側代表を置くことゝ決定した。よつて同社は今後大東亞圏の食糧需給計畫に從ひ、輸出タイ米の一手買付並に輸出を行ふほか、將來ビルマその他も包含した過剰米の處理に當るものと豫想され、今後の活躍は頗る注目される。（七・一二、讀賣）

○タイ國名譽領事勳章傳達

タイ國大使館では曩に在日タイ國名譽領事、副領事に對し、多年の功勞に報ゆるべく本國より贈與されたる勳章を傳達するため、六月十日大使館に於て傳達式を擧行し、次の諸氏に名譽ある勳章を授與した。

横濱名譽領事倉田猛郎、神戸同複並充造、名古屋同加藤勝太郎
神戸名譽副領事菅谷認、大阪同安住悅太郎、横濱同中川省吾

○タイ國紡績局長、技師來朝

タイ國產業省紡績局長海軍豫備大佐C・Pマダヨンチヤンドラ氏（五〇）は同技師P・ラチヤナプラナ氏（三〇）を帶同、七月十二日神戸に來朝、また海軍省から派遣の駐日留學生チヤウオン・ナマサンデイ君（一六）も一緒に到着した。マダヨンチヤンドラ氏一行は一泊の上、十三日の三宮驛發「かもめ」で東上したが、タイの紡績界について次のやうに語つた。

タイの紡績界は從來英國資本に頼つてゐたが、大東亞戰爭を契機に日本に依存して行くやうになつた。來朝の目的は紡績機械の買入と紡績工場の視察である。タイでは日獨英三ケ國の紡績機械を購入して運轉してゐるが、日本の機械は獨英に匹敵し得る優秀なものである。またタイ國では近く國營の紡績工場も作る計畫を樹てゝゐる。（七・一三、中外）

○輸入調整機關追加

商工省では日タイ爲替換算率改正に伴ふタイ國輸入品に對する特別賦課金の徵收に關する暫定的措置を實施するに當つて、四月告示第四〇一號を以て輸入調整機關を指定したが、七月十四日更に左記三品目に就て輸入調整機關を追加指定すると共に鹽を輸入調製品目から削除、この旨同日附告示第七八二號を以て實施した。追加指定左の如し。

屑護謨　日本護謨輸入組合
デリス根　日本南洋輸入組合
タングステン鑛　重要物資管理營團

（七・一四、中外）

○ピブン首相夫人中佐に任命

ピブン泰國首相の誕生日にあたる七月十四日、首相夫人が陸軍砲兵中佐に任命され、王室附特別副官とする旨同夜の放送で發表された。（七・一六、バーンコーク發東日）

○日タイ文化會館候補地

大東亞共榮圏の一翼としてタイ國の新建設は最近各部面にわたづて目ざましい進展を見せてゐるが、パイロート同國宣傳局長は七月十六日の同國新聞記者團會見席上、バン・クン・プロム宮殿（王城北方の離宮）内に文化會館を設立して日タイ文化交流を圖る豫定である旨を言明した。（七・一七、バーンコーク發同盟）

○タイ國民の國防献金

タイ國民は七月十四日のプビン首相の誕生日に際し、軍需品購入費として二十八萬バーツを贈り、戰ふ國タイの意氣を示した。（七・一六、バーンコーク發朝日）

○日タイ親善の舞踊會

日本タイ協會では、兩國親善のため七月十九日午後二時から赤坂の藤間節子孃宅で日本舞踊鑑賞會を開いた。デイレック・チヤイヤナーム大使夫妻のほか館員十餘名と、留日タイ國女學生等をはじめ矢田部大使夫人、矢田元公使夫人、三島子爵令孃など參集、小寺融吉氏の解説で舞踊「田植」「菊づくし」等優美絢爛の日本舞踊を觀賞、會を閉ぢた。（七・二〇、東日）

○ピブン首相の戰時小賣商

さきに突如として木炭商を開業して、市民を感激せしめたピブン泰國首相は、市民の生活必需品確保と運輸難緩和のため燃料のほかに、魚類、卵その他の食料品をもあはせて販賣し、値段も市場のそれより割安で、市民には貴い親心を店頭に飾るソンクラーム・パニナといふ店を經營することゝなり、名前を披露

したソンクラームといふのはタイ語で戰爭を意味し、ピブン首相はいみじくもソンクラームの名を冠して、戰時下タイの方向を示したもので、首相經營の「戰時小賣商」ともいふべきこの商店は、早くも市民の人氣を呼びつゝあり、商賣の方法を敎へこまんとする首相の「戰ひの店」は、日毎にふくれて、店頭擴張のうれしい悲鳴を擧げてゐる。(七・二一、バーンコーク發朝日)

○タイ國攝政ヨチン大將逝去

タイ國攝政會議第二攝政ビチヤーイエン・ヨチン大將は、かねて心臟病で病臥療養中であつたが、七月二十一日午前十時三十分逝去した。享年七十一。同攝政はラーマ五世時代より現皇帝ラーマ八世に至るまで四代の皇帝に奉仕、一九〇九年のシヤム、マレー國境劃定委員會委員長として活躍、故ラーマ七世が眼病治療のため日本を經由して渡米された際、扈從して日本を訪問したこともある。なほ同攝政の逝去によりタイ國攝政會議は議長アーチット殿下、第三攝政ルアン・プラヂットの兩攝政となつた。(七・二一、バーンコーク發同盟)

○ピブン首相の令甥救出

ピブン泰國首相の令甥がネグロス島の皇軍の手に保護されてゐる事實が、このほど軍政部への報告で明かにされた。皇軍のネグロス島上陸當時同島のドマゲテにあるシリマン大學で砂糖に關する研究をしてゐたタイ國の學生十二名があり、その中にピブン首相の令甥サムルイ・キタサンガ君(二五)がゐたが、同君は皇軍上陸の報を聞くや、同窓のタイ國學生達と共に戰火を山中に避け、やがて皆と一緒にドマゲテに歸つて來たところを皇軍に發見され、その溫い保護を受ける身となつたものである。同君等九名は近くネグロス島からマニラに到着の筈(七・二一、マニラ發同盟)

○タイ國の帽子奬勵運動

帽子、帽子…バーンコークの街は帽子の濫氾である。妍をきそつて朝市につどふ若い娘さん等は勿論、地べたに坐つた賣手の女たちも、ちやんと帽子だけは忘れない。「帽子を被るべし」とは政府のきついお觸れであつて、最近こんな挿話がある。散歩してゐたピブン首相が無帽の一人の娘を見つけた。翌日父親の官吏は免官になつたといふ。まづ形式の中に國民をピンピン嵌めこんでゆく、それが今のタイのやり方である。(七・二二、讀賣)

○日タイ學生の鍛錬會

奥日光龍頭の山の家で日タイ學生鍛錬會が七月二十二日から六泊七日間開かれる。タイ側は日語學生チヤロン君ほか十一名日本側外語泰語科學生今井晋作君ほか十三名で、高久タイ國學生會館學監の引率で七月二十二日午前十一時日光驛着、午後開會式を擧行翌日より鍛錬を開始した。(七・二三、朝日)

○タイ國女兵團組織

タイ國に近く女兵士が出現する。七月二十三日タイ國パイロット宣傳局長から「タイ國は近く女兵團を組織する」との發表があつた。先にはピブン首相夫人が陸軍砲兵中佐に任ぜられたが宣傳局長の談話によれば、女兵團の組織についてはすでに政府はその大綱を決定してをり、これはタイ國民に對し目下の情勢から極めて有效なる方法であると思ふ。ユワチヨンの新編成といひ、今回の女兵團の組織計畫といひ、タイ國の國防國家建設の努力は、最近非常に顯著なものがある。云々(七・二五、バーンコーク發東日)

○東京のウエーサーカ祭

インド、ビルマ、タイ、佛印等南方佛敎諸國の最も大きな年中行事ウエーサカ祭(南方佛陀祭)のわが國における第二回祭典が國際佛敎協會の主催で在京インド人、タイ國留學生等多數參會の下に七月二十四日午後六時から日比谷公會堂で嚴肅に行はれた。先づ國民儀禮、讃佛歌合唱についで南方佛敎僧としてセイロン島で十餘年間修業した釋仁度師が黄の法衣姿で導師となり、パーリー語經典を讀誦、國際佛敎協會々長井上哲次郎博士、デイレック・タイ國大使の挨拶、木村日紀氏の講演の後、童謡合唱舞踊劇「シビジヤータカ」映畫「アジアの光」などの催しがあつて、九時すぎ盛會裡に祭典が終つた。なほこの祭典の模樣はAKから國内へ中繼放送したが、南方佛敎諸國へも夫々錄音放送する。(七・二五、中外)

○日タイ首相メッセージ交換

タイ國ピブン首相は、日タイ同盟慶祝使節としてタイ國に赴き七月廿九日歸京した廣田特派大使に託し、東條首相宛次の如きメッセージを寄せ、これに對し東條首相は次の通り返電した

ピブン總理より東條首相宛メッセージ(譯文)

閣下、今回日タイ同盟條約慶祝のため廣田弘毅閣下を特派大使とし、特命全權大使矢田部保吉閣下を副使とする使節團の御來訪に當り、余はタイ國政府及び國民がタイ國の盟邦たる大日本帝國より右使節團を迎接し、これを衷心御歡待申上ぐることを最も光榮とするものなることを閣下に對し報告致候使節團が短期間の御滯在にかゝはらず十分その御使命を達成せられ余並びに他の國務大臣その他諸官との會談または一般國民との接觸に當り甚だ敦厚なる友誼と理解と精神を能く披瀝せられたる點はタイ國國民にとり最も欣快とする所に有之候日タイ兩國の好誼は各方面に亘る相互的協力援助に依り日に厚きを加へつゝあり、例へばタイ佛印國境劃定事業の完了

の如き、タイ國國民が貴國政府の御援助に對する感謝の念は之を忘却し得ざるものとなす所に有之、余は茲に重ねて貴國政府に對し深厚なる謝意を表示せんとするものに御座候

如上兩國間交誼の基礎は同盟條約に明示されをる所にして貴國使節團は之が慶祝のため特に派遣せられこゝに能くその使命を達成せられたる次第にして今や兩國國民を結ぶ友誼の敦厚なること史上未曾有のもの有之候、而して若し閣下御自身に於かれ御來タイの機會も有之候はゞ余は最も欣快光榮と致す可く、又兩國國民間にとりても此の交誼を一層深からしめ得べき機會なるべしと確信致候余は謝意を表示し併せて貴國國軍及國民が最後の捷利を獲得せられ大東亞共榮圏のため彌々隆昌ならんことを祈念致候、ここに余は閣下に最高の敬意を表示候

東條首相のビブン首相宛返電

閣下の廣田特派大使に託せられたる貴翰本大臣において之を感銘を以て拜誦仕候、閣下の述べられたるが如く兩國を結ぶ友誼の敦厚なることは史上未曾有のものにして將に兩國相携へて最後の勝利を獲得すべき基礎たるべきものに候

今回日タイ同盟慶祝のため廣田特派大使を首班とする使節團を派遣せられたるに對しタイ國朝野の示されたる熱心なる歡迎と閣下がその書翰において述べられたる所は右の兩國友誼の證左として本大臣の感銘措く能はざるところに御座候、茲に深厚なる謝意を表するとともに閣下の御健勝と貴國國運の御隆盛を祈念致候（七・三一、東日）

○殘留する在タイ敵國人

日英外交官交換交渉成立に伴ひ、タイ國内に收容中の英國、オランダ、ベルギー、ノルウェー各國人百一名は、八月四日バーンコーク出帆のバラヤ號に乘船、サイゴンに向ひ同地で龍田丸に乘換へ、交換地に向ふことゝなつた。今回の引揚外人の中には在タイ三十餘年タイ國懐柔政策に辣腕を揮つたクロスビー英公使を始めトッセン和蘭公使、ハッセル諾威公使など外交官及び一般人を含んでゐるが、さきの米人引揚につゞく今回の交換の結果、在タイ敵國外人は英人百八十二名、ギリシヤ人三名を殘すのみとなつた。殘留組の中では相次ぐ本國の敗報に嘆氣をさし、本國に歸つても生活の方法がないため在留を希望するもの多く、タイ政府に殘留を申入れた外人は既に五十數名に上つてゐる。（七・三一、バーンコーク發同盟）

○タイ、スペイン外交關係再開

タイ國とスペインとの外交關係は、スペインの内亂勃發以來杜絶してゐたが、今回再開の運びとなり、駐獨タイ公使館付武官ラチオン・タン中佐がポルトガル公使に任命され、同中佐がリスボン到着次第、フランコ政府代表者との間に外交關係再開の交渉を行ふことゝなつた。（七・三一、讀賣）

○タイ國勞働法制定準備

タイ國では、目下ドイツで行はれてゐる勞働法をタイ國でも採用すべく、目下準備を進めてゐる。即ち勞働に堪へる身體をもつ男女を強制的に徴集して勞働奉仕に充てんとするもので、政府ではこれを五班に分ち、農業、家内工業、商業、商工業および一般工業者の分野にそれ〴〵分類する方針のごとくであるなほタイ國政府では商工業者および農業者の國家における役割は、極めて重大であるため、軍人および文官と同樣な名譽と特權を與へることに決定した。（八・五、バーンコーク發朝日）

○タイ國外相・日本外相宛謝電

ウイチット泰國外相は、廣田特派使節一行の泰國訪問に對し八月三日東郷外相宛左の謝電を寄せた。

本大臣は貴電に接し歡喜に堪へず、今次使節派遣の輝しき成功は貴國政府の適切なる銓衡に係る廣田弘毅閣下使節團各位の卓越せる才能に因るものなる旨を言明するものなり、閣下が泰國政府及び國民の日本使節團に對してなせる歡迎に滿足し居らるゝ趣を承り本大臣も亦滿悦の至りなり、右は日泰國交史中銘記すべき事件の一に數ふべきものといふべく、本大臣は右歡迎の爲吾人の拂ひたる努力は凡て衷心からなる親愛の情に滿てる意圖に出づるものなる旨を茲に確言するものなり廣田閣下が貴大臣に言はれたる如く泰國政府及び國民が日本に對する不動の信頼の下に飽迄兩國相携へて同じ勝利の大道を邁進するの堅固なる決意を有し居るは嚴然たる事實にして我政府は我方に勝利を招くの唯一の途は日泰兩國間の眞摯なる協力と親愛なる交誼とにあるべきを確信し凡ゆる手段により兩國の友好關係を常に緊密なる狀態に保つべく努力せるものなり、本大臣は茲に閣下に對し深厚なる敬意を表するものなり（八・五、中外）

○ヴ・タイ國駐滿大使赴任

新任タイ國駐滿大使ヴイラヨーター少將は八月二十日東京驛發赴任した。

協會記事

○日タイ同盟慶祝答禮使節歸朝歡迎晩餐會

本協會では、日タイ同盟慶祝答禮のため盟邦タイ國に赴き、七月末歸朝した廣田特派大使、矢田部全權大使以下の使節一行を迎へ、八月四日午後六時から大東亞會館で歸朝歡迎晩餐會を開催した。主賓、陪賓、主催者側を合して左記八十餘氏出席、食後本協會理事岡部長景子爵近衞會長に代つて左記の如き歡迎挨拶を述べ、廣田、矢田部兩大使より同じく左記の要旨で交々タイ國に於ける見聞談感想の披露があり、和やかに歡談、最後に特派使節一行の出發からタイ國における交歡振りを撮影した日本ニュースを觀賞して九時散會した。

會長代理の挨拶

閣下並びに諸君

本日は近衞會長は無據差支のため御出席が出來ず、又德川副會長は御承知の通り某方面で活動して居られますので、甚だ僭越でありますが私から一言御挨拶を申述べたいと存じます

今夕は廣田特使閣下並びに御一行の方々の御歸朝に際し歡迎の微意を表しまするために此の宴を設けた次第でありますが御一行には重大なる使命を帶びて悉なく長途の御旅行を終へさせられた直後御疲れの際、且つはバンコックにも劣らぬと承はります此の酷暑の砌にも拘はらず御揃ひで御出席を賜はりましたことは主催者と致しまして誠に光榮且つ感謝に堪へぬところであります。尙ほタイ國大使閣下を始め關係各方面の來賓各位にも御賁臨下され又本會々員諸君も多數御出席を得ましたことは之れ又本會の欣懷とし感謝致すところであります。

日タイ兩國は同盟國として大東亞戰爭の完遂と共榮圈の建設の爲め共に國運を賭して戰つて居るのでありまして數百年來の長き友好關係にも今日の如く重要且つ緊密なるは未だ曾つて見ざるところなることは申すまでもありません。兩國は相互に深き理解と同情を持ち渾然一體となつて努力を續けなければならぬのでありますが、今回特使閣下一行にはタイ國官民の熱誠なる歡迎を受けられその間廣く同國朝野の要人に接

せられて隔意なき意見の交換を遂げられたと承はりますが之れ等の事が兩國の理解を飛躍的に上にも深め提携を益々强固ならしめたことは想像に餘りあると存じます。

吾々は國民として特使閣下並びに御一行の御骨折りに對し多大の謝意を表すると同時にその使命を立派に果されたることを衷心御慶び申上ぐる次第であります。

特に本協會と致しては過去十數年來及ばずながら此の目的の爲めに努力して參つた關係上一層その感を深くするものでありまして、心から御歡迎申し上ぐるその氣持ちは充分御汲取頂きたいと存じます。序を以て申上げては甚だ恐縮でありますが、本協會は日タイ兩國關係の重大性に鑑みまして今後、さらにさらにその目的の達成に努力致したいと存じて居りますから來賓閣下各位に於かれましては本會の爲め一段の御指導御鞭撻を賜はらんことを御願ひ申上げる次第で御座います

今夕は折角の御光來を賜はりましたるに拘はらず時節柄何等の取設けもなく甚だ失禮で恐縮に存じて居りますが、どうか御打寛ろぎ下されまして、緩々御歡談下されば仕合せと存じます。

終りに臨み各位と共に廣田特使閣下並びに御一行の爲めに祝杯を擧げたいと存じます。

廣田特派大使の講演（要旨）

本夕、我々使節團一行の爲めに盛大な晩餐會を催して下さいました日本タイ協會に厚く御禮申上ます。

この度の使節團の使命は、曩に本邦に來朝せられたるプラヤー・パホン中將一行の日タイ同盟慶祝使節派遣に對する答禮の爲めであります。パホン中將及びタイ國政府は、使節團一行の本邦滯在中に於いて受けたる我國朝野の歡迎に衷心より感謝致して居つたのであります。

我々使節團のバーンコック到着以來、タイ國政府は非常な熱誠をこめて歡迎してくれました。晩餐會或は茶會を催して我々を歡待され、又は寺院に於ける儀式的な招待にもなつたのであります。

我々一行に對しては正に國民的な歡迎振りであり、併もそれは獨り首都バーンコークのみに限らず、我々の參りました地方に於ても非常な歡迎を受けたのであります。我々がアユタヤ訪問の途中、一老婆が地上に坐つて我々一行を迎へてゐるのを列車の窓から見ました。又、アユタヤの町では、小學生が日タイ兩國旗を手にしての歡迎振りは我々に深い印象を與へました。

ピブーン首相初め各閣僚は日タイ同盟に對して衷心感謝して居り、日本と死生を共にしたい、そして日本が米英を徹底的に擊滅してくれることを切望してゐるのを知り內心力强く感じた次第であります。我國の理想とする大東亞共榮圈の建設には南方民族の協力が絕對に必要であり、殊にタイ國を中心として南方民族の連衡を圖ることが緊要事であると確信致す次第であり

ます。

日タイ同盟が締結されたのは歴史的背景及び地域的環境によるものであるが、更に民族的繋りによるものであります。ウイチット外務大臣の話によりますと、ピブーン首相がまだフランス陸軍士官學校に留學中のこと、或る日安南の留學生がフランスの學生に苛められてピブーンに救ひを求めて來た。ピブーンは大に憤慨して報復した。この時の感情が今に至るまで變らない、と、首相自ら語られたことがある、また自分としても、國際聯盟事務局次長(在任の頃)新渡戸稲造博士がものされた「武士道」といふ書物を讀んで非常な感銘を受け、今迄歐米崇拜の誤つた考へ方を是正され、タイ國古來の藝術に心醉するに至つたといふことでありました。

またブローツ國會議長の話によりますと、氏が十七、八歳の頃、當時タイ國で法律を編纂されてゐた政尾藤吉博士の手傳をしてゐたが、博士の盡力によつて自分は歐洲に遊學することが出來たのを自分は今でも感謝してゐると話されました。現在第三攝政であるルアン・プラデイット氏は私の外相時代、本邦に來朝せられタイ國の獨立に關して胸襟を開いて語り合つたことがあります。プラヤー・パホン中將は心からの親日家であり、病體であるにも拘らず、我々の招待されてゐる會には常に出席されたのであります。其他多數の人々が我國に對して非常な親しみを有つてゐるやうに見受けられたのであります。現在日タイ兩國人は主として英語で話して居るのでありますが、將來は日本語やタイ語で話すやうになつたら實に愉快なことであらうと思つたのであります。最近バーンコークに在る日本語學校は大變な人氣で、入學志望者が數百人もあると云ふ話でした。言語による意思疎通は國交上極めて重要であります。

この度のタイ國訪問は飛行機で行き、國内では自動車を用いたので非常に愉快でした。

我々は第一線近くに行き、我が陸海軍將兵の活躍を目のあたりに見ることが出來ました。又佛印及びタイ國に居らるる我が傷病兵の方々を慰問致しました。

タイ國には邦人居留民が現在二千人近くも居ります。今後は日本人も段々多く行くやうになるでせうし、又タイ國からも留學生が我國に來て兄事するやうになり、今後日タイ兩國の關係は益々密接になることは必然であります。

從つて日本タイ協會の使命も愈々大きくなりますので協會も益々勉勵して戴き度いと希望致す次第であります。

矢田部全權大使の講演(要旨)

今回の我々使節團のタイ國訪問は、政治上經濟上の要務の爲めではなく、先般來朝せられたるプラヤー・パホン中將を主班とする使節團派遣に對する答禮の意味であつたのであります。

我々使節團に對するタイ國側の歡迎は實に至れり盡せりで、私がタイ國に在勤して居る時に遇つた外國の皇族に對する待遇よりも遙に盛大なものでありました。官民一體となつて全國民を擧げての歡迎振りであり、それも都市のみに限らず、地方に於いても、よく政府の意圖に從つて熟誠こめた歡迎を吾々に示したのであります。驛から相當離れた田舍の百姓家の人々も熱心に我々を歡迎してくれました。

タイ國が斯くも熱心に我々を歡迎してくれた理由の一つは、先般來朝せられたるピヤ・パホン中將一行に對する本邦朝野の熱誠なる歡迎に答へる爲めでありました。また重臣たる廣田弘毅氏を特派大使としてタイ國に送られた厚意に報ゆる意味からであります。更にもう一つの重要なる理由は、日タイ同盟は、日タイ兩國の衷心からの合意によつて締結されたものであることを國民に對して表示せんが爲めであつたのであります。

廣田大使のタイ宮廷に於ける敬虔なる態度はタイ國政府に深甚なる印象を與へました。七月十二日、宮廷に於て國書捧呈の儀式が行はれたのでありますが、その際の廣田大使の態度はタイ國の作法にかなつた誠に立派なものでありました。これは廣田大使が過去外相或は首相として屢々宮廷に參内せられた爲めに、皇室に對する態度がその儘タイ國の宮廷に於いてもその儘現はれるのでせう。後にウイチット外相主催の晩餐會に招待されました時に、列席の人々は廣田大使の立派なる態度を讃嘆して居りました。この度の我々使節團一行のタイ國訪問はタイ國に相當の好印象を與へたことゝ信じられるのであります。

ピブーン首相は、タイ國の隆昌は英國勢力の桎梏を脱して、日本に賴ることによつて始めてこれを期し得ることを國民に强調して居ります。この際我國としては大東亞戰爭に必勝するといふことをタイ國民に印象付けることが絶對必要であります。

タイ國在留の邦人中には、南方諸地域は日本の占領下にあり、その資源の分け前にも與られるが、タイ國は獨立國なので甘い汁が吸へないなどゝいふ誤つた考へ方をしてゐる者もなきにしもあらずであるが、然し「タイ人のタイ國」建設を信條としてゐる彼等の立場を考へてやらねばならないと思ひます。又タイ國民と致しましては、謙虚な心持で我國に兄事し、これと協力して行くやうに意圖すべきであると考へるのであります。

出席者芳名(順不同、敬稱略)

(主賓)

廣田特派大使　矢田部特命全權大使　水野南洋局長　岩越海軍少將・子爵三島通陽　朝海外務書記官　門松陸軍中佐　東光外務書記官　三宅外務事務官　丸山商務書記官　新井外務屬　宇佐美元章　丹羽善之助　柏木秀茂　出淵勝次　木村義吉　市橋俊夫　佐藤致孝　二宮新　平居芳三郎　吉田晴風　白石外務屬　伊藤外務省囑託

(陪賓)

デイレツク駐日タイ國大使　タウイ參事官　ヴイラヨーター陸軍少將　ソラキット陸軍武官　ソンプーン海軍武官　ラタ

ナチイブ書記官　タナツト　同　コーンシイ　同　チヤラオ
同　大聖吉次　安住伊三郎　小松榮　榎並充造　岩倉公爵
伊東子爵　淺野良三　佐々木喆山　小松隆　藤間節子、東郷
外務大臣　西外務次官　島津秘書官　友田　同　武田會計課
長　甲斐事務官　本間副領事　二見公使　堀情報局第三部長
市川海軍中佐　桑原　同　松村東京府知事　武田ゆき　宮崎
信一郎　高橋清一　北島多一　岡田永太郎　藤蔭千枝　江口
治　辻富三　三島良藏　向井忠晴代藤立、永井松三　平野英
一郎　阿部賢一　村上幸平　田中齊　中郷孝之助　山本忠男
土屋齊　荒木大將　今村秩父宮別當　西村正男　中村嘉壽
磯部美知　來馬琢道　井上雅二
（協會側）
川村博　遠山峻　高久正義　田中正夫
主人　岡部子爵

○藤間節子孃舞踊會

本會主催の下に、デイレツク・タイ國大使夫妻並に大使館員を招待して七月十九日藤間節子孃舞踊會を赤阪の同孃宅に於て開催した。（雜報欄參照）

○日タイ學生夏季錬成會

本協會主催の下に、七月二十二日より二十八日まで一週間、日光中宮祠龍頭・山の家で日タイ學生夏季錬成會を開催した。詳細本欄所載の通りである。

○タイ國畫家個人展覽會

本協會主催、デイレツク・タイ國大使後援の下に、タイ國々立美術工藝學校教諭チット・ブアブサヤー氏作油繪個人展覽會を七月三十日より八月　日に至る四日間、京橋區銀座西の日動畫廊に開催し、現今のタイ國美術の一端を汎く紹介して、所期の效果を收めた。

○役員異動

今般常岡寛治氏に本會理事を委囑十月一日就任せらる。

○會員異動

左記五氏が新に入會された。

維持會員　三輪　包信殿（名古屋）　名古屋市臨時東亞調査部々長
通常會員　武田　ゆき殿（東　京）　無　職
同　荻原幸太郎殿（大　阪）　新興アルミナ工業會社技師長
同　高田　豐樹殿（東　京）　陸軍中將
同　常岡　寛治殿（同　）　陸軍中將
同　富田竹二郎殿（盤　谷）　國際學友會交換學生

○會員の消息

△矢田部保吉氏（理事長）は八月十九日勳二等に叙せられ瑞寶章を授けらる。
△三島通陽子（常務理事）は八月二十八日大政翼贊會調査部第二委員會委員に就任さる。
△岡部長景子（理事）は滿洲建國十周年記念祝典慶祝のため大政翼贊會より滿洲國へ派遣せらる。
△鶴見左吉雄氏（理事）は九月一日に商業報國會、及び九月十九日に羊毛統制會の會長に夫々就任された。
△向井忠晴氏（理事）は七月二十七日附を以て南洋拓殖株式會社參與理事を命ぜらる。
△二荒芳德伯（理事）は八月十五日興業銀行監査役に再選重任、更に八月二十八日大政翼贊會調査部第一委員會委員に就任さる。
△船田一雄氏（理事）は七月二十七日附を以て南洋拓殖株式會社參與理事を命ぜらる。
△酒井忠正伯　理事）は八月二十六日に日本有畜機械農業協會、及び九月四日に飼料協議會の會長に夫々就任さる。
△北島多一醫博（理事）は八月二十八日大政翼贊會調査部第七委員會委員に就任さる。
△藤山愛一郎氏（監事）は八月二十四日附を以て大藏省會社部參與を仰付けらる。
△黑田清氏（評議員）は八月二十八日大政翼贊會調査部第五委員會委員に就任さる。
△榎並充造氏（評議員）は同第二委員會委員に就任さる。
△佐藤市郎氏（評議員）は同第六委員會委員に就任さる。
△有田八郎氏（名譽會員）は國民政府に對ずる答訪使節團特派大使として中華民國に派遣せらる。
△木戸幸一侯（名譽會員）は九月八日定期叙勳により勳一等に叙せられ瑞寶章を授けらる。
△穗積重遠男（通常會員）は七月二十日附を以て宮內省御用掛を仰付けらる。
△大谷登氏（通常會員）は七月二十七日附を以て南洋拓殖株式會社參與理事を命ぜらる。
△大河內正敏子（通常會員）は八月二十五日日本有畜機械農業協會顧問に就任さる。
△中川未吉氏（通常會員）は八月二十五日横濱商工會議所會頭に就任さる。
△桑島主計氏（通常會員）は滿洲建國十周年記念祝典慶祝のため大政翼贊會より滿洲國へ派遣せらる。

○寄贈圖書

左記の如く各々寄贈を受け厚く御禮申上ます。

單行書籍

一、南方地域歐文資料目錄—昭和十七年二月末現在　一部　東亞研究所資料課
一、全國學會協會要覽—(改訂)—昭和十七年三月　一部　日本學術振興會
一、日泰會話　三部　國際觀光局
一、市政概要　一部　東京市役所
一、泰國資源經濟論(三笠書房)　一部　吉田榮太郎
一、佛領印度支那貿易概觀(大同書院發兌)　一部　纖維製品輸出振興株式會社
一、比律賓華僑概觀(調査第二輯)　一部　同
一、蒙古案內記(岩崎編生著)—蒙疆新聞社發行　一部　蒙疆資料社
一、焦點下の北方問題　一部　東日東亞調査會
一、文學京都　一部　京都市役所文化課
一、H. E. Nai V. Vichitr-Vadakarn; The Evolution of Thai Music　一部　泰國大使館

小冊子、雜誌

△濠洲農產事情(東亞農產彙報第一六號—昭和十七年五月)一部　日本輸出農產物株式會社△我國南方輸入農產物に關する統計

(東亞農產彙報第一七號—昭和十七年五月)一部同△濠洲事情(資料叢書第五三—昭和十七年四月)一部府立東京商工奬勵館△最近に於けるタイ經濟(參考資料第八七編)十部タイ室東京事務局△アジアの地政學(小牧實繁博士述)パンフレット第一號一部昭和通商株式會社調査部△南方教育政策の特性(パンフレット第二號)一部同△貿易業整備統合ニ關スル資料一部神戸貿易同志會△公定價格品目一覽表(追錄五)一部中央物價統制協力會議△佛印主要會社要覽(資料丙第二六一號C)一部東亞研究所△味噌醬油等配給統制規則解說一部中央物價統制協力會議△建國十周年記念ポスター一部滿鐵鐵道課第二弘報係△南洋關係圖書目錄一部南洋經濟研究所△國史上南洋發展の一面一部同△菅沼貞凡傳一部同△最近の緬甸事情一部同△ダヴァオ開拓の回顧と展望一部同△ナウル島事情一部同△南洋群島の珊瑚礁一部同△比律賓群島の標準語一部同△黃麻の研究一部同△緬甸歷史概說一部同△山田方谷東亞經綸策一部同△印度支那に於ける佛國の醫療事業の沿革一部同△關印に於けるラミーの栽培一部同△緬甸に於ける印度人一部同△南方鮪漁場探査に就て一部同△緬甸概說一部同△ビルマ援蔣ルート最近の實情一部同△在緬英資事業一部同△大東亞林產物需給調表一部同△大東亞森林行政機構一部同△南方林業邦人企業者調一部同△トンガ諸島事情一部同△南方圈の有力なる水力地點の二、三に就て一部同△ミンダナオ概記一部同緬甸農地問題と英國の農業政策一部同△回教徒に接する心得一同△東亞調査並研究團體概要一部同△印度國民生活概況一部同△臺灣に於けるサバヒー養殖業の發達一部同△西ニウギニヤ探檢年表一部同△佛印の林業一部同△日本人の熱帶適應性太平洋協會一部同△ビルマ農村關係法規一部同△大東亞海漁業展望(水產日本社)一部同△財團法人富民協會第十三回事業報告書(昭和十五年度)、案內、一覽各一部富民協會△中央物價統制協力會議年報(二)一部中央物價統制協力會議△東亞共榮圈ニ於ケル農產物の需給表(摘要)殖產局出版第九四四號一部臺灣總督府殖產局△東亞共榮圈ニ於ケル重要農產物需給狀況(同第九四五號)一部同△同附錄(作成方法說明書)一部同△泰國醫事視察報告(抄錄)東寧(昭和十六年十二月)第七號別刷一部臺北帝大醫學部南方醫學研究會△印度支那地圖一葉東亞研究所△同地名索引一部同△南方佛教聖典第一輯一部國際佛教協會△米國を惱ます不足資源キナに就て一部日本輸出農產物株式會社△日華蒙北京經濟懇談會報告書一部東亞經濟懇談會△臺灣に於けるサバヒー養殖業の發達—南洋資料第四〇號)一部南洋經濟研究所△東印度在留日本人今後の生活態度に就て(同四一號)一部同△泰國の鐵道交通構造、地理學十卷四號別刷)—藤野義明氏著一部同氏△一九四一年タイ國政治經濟情勢十部三井タイ室△南方資源拓殖開發に就て(講演第八輯)—川本邦雄氏述一部日本貿易振興協會△南洋華僑事情(同第九輯)—井手季和太氏述一部同△南方開發金庫に就て(同第十輯)—北川勝敏氏述一部同△アジア復興レオナルド・ダヴインチ展覽會要覽・一部日本世界文化復興會△セレベス事情、インドネシヤ資料第二輯)一部インドネシヤ協會△同盟時事年表(昭和六—一七年)一部同盟通信社△南洋文獻目錄(昭和十七年六月)一部慶大圖書館△南洋を描く一部工業組合中央會東京支部△統制經濟と對外貿易(資料第八輯)一部日本貿易振興協會△聖戰五周年一部大日本興亞同盟△タイ人生活譜一部タイ室東京事務局△日本佛教と京都(禿氏祐祥)一部京都市文化課△日本文化宣揚講演會講演集一部同△京都古美術入門一部同△ラジオトーキョー(六七號)五部日本放送協會△蒙古概觀圖蒙古聯合自治政府弘報部一部蒙疆資料社△活字組見本一部日本出版文化協會△企業整備令解說一部中央物價統制協力會議△印度獨立聯盟代表ボース氏激勵會並に遭難印度志士慰靈祭報告書一部黑龍會本部△東亞經濟懇談會第三回大會報告書一部東亞經濟懇談會△大東亞共榮圈の所要船腹に關する一考察(調査資料第四輯)一部東亞經濟懇談會△東亞纖維資源對策(調査資料第五輯)一部同△馬來の貿易(資料第九輯)一部日本貿易振興協會△公定品目一覽表(追錄六)一部中央物價統制協力會議△南方共榮圈の纖維資源一部纖維需給調整協議會△大東亞科學經濟研究會(第一號)一部大東亞科學經濟研究會△南方共榮圈の殖產氣候一部南支調査會△比律賓貿易概觀(調査第三輯)一部纖維製品輸出振興株式會社企畫部△第一次及び第二次大戰と世界の纖維產業一部纖維需給調整協議會△貿易爲替管理と稅關手續(好田稔篤

氏著）一部府立東京商工奬勵館△昭和十六年度事業報告一部同△大東亞の農業立地計畫（伊藤兆司著）一部九大農學部農政學教室△大東亞に於ける宗教別信徒教概算一部國際佛教協會△茶—生產者から消費者へ（コイベットソン原著）一部日本輸出農產物株式會社△支那最近の狀勢概觀一部東洋協會△市政概要（昭和十七年版）一部東京市役所△Ministrial Regulations, B. E. 2469 (No. 2) 一部横濱泰國領事館△ministrial Regulations, B. E. 2480 (No. 7. 10.) and Notification of the Director-General of Customs, B. E. 2480(No. 7) 一部同△新亞細亞（四卷五、六、七、八、九號）滿鐵東亞經濟調査局△南洋（二八卷五號）南洋協會△南進七卷五、六、七、八、九號）南進社△太平洋（五卷五、七、八九號）太平洋協會△南方情勢（六八、六九、七〇、七一、七二號）南方情勢社△國際評論（七卷五、六、七、九號）國際日本協會△回教圈（六卷五、六、七、八、九號）回教圈研究所△比律賓情報（五八（五九、六〇、六一號）比律賓協會△海を越えて（五卷五、六、七、八、九、十號）日本拓殖協會△興亞（三卷五、六、七、八、九）大日本興亞同盟△支那（三三卷五、六、七、九號）東亞同文會△南方（四卷一、二、三、四、五、六、七、八、九號）南支調査會△有終（二九卷六、七、八、九號）海軍有終會△海（二二卷五、六、七、八號）大阪商船株式會社△觀光（二卷四、五、六、七、八、九號）日本觀光聯盟△文化日本（六卷五、六、七、八、九號）日本文化中央聯盟△國際文化（一九、二〇、二一號）國際文化振興會△海外之日本一六卷、四、五、六、七、八號）海外之日本社△東亞文化圈（一卷四、五、六、七、八號）青年文化協會東亞文化圈社△交易（二三七、八九、二四〇、二四一號）横濱貿易協會△經濟彙刊（三卷三、四、五、六、七號）華興商業銀行△東亞經濟月報（七卷五、六、七、八、九號）山崎經濟研究會△物價協力時報（三卷五、七、八號）中央物價統制協力會議△臺灣金融經濟月報（一四八、一四九、一五〇、一號）臺灣銀行調査課△纖維需給調整協會々報（三卷七、八、九、十、十一、十二、十三、一四、一五、一六號）纖維需給調整協會△南洋栽培協會々報（十六卷四、五、六、七、八號）南洋栽培協會△地學雜誌（六三九、六四〇、六四一、二三號）東京地學協會△高雄經濟情報（五卷、二號）高雄州商工奬勵館高雄商工會議所△小村侯記念圖書館報（一九、二〇號）小村侯記念圖書館△支那研究（三輯—臨時—六三號）東亞同文館支那研究部△國際月報（一七、一八、一九、二〇二一號）情報局第三課第二部△國際事情（二三、二四、二五、二六號）同△向上（三六卷五號）—修養團發行中島飛行機武藏野製作所△皇學（一八號）詔勅精神振興會△被服（一三卷三、四、五號）被服協會△調査月報（五、六、七、八、九號）日本興業銀行調査部△國語文化（二卷五、一〇號）育英書院△貿易統制會々報（一卷一、二、三、四、五號）貿易統制會△南支南洋研究（三六三七號）臺北高商南支南洋經濟研究會△日本諸學（創刊號）日本諸學振興委員會△報道寫眞（二卷六、九號）寫眞協會△新若人三卷四號）歐文社△南洋經濟研究（一卷七號、五卷九號）南洋經濟研究所△太陽（一、二、三號）朝日新聞社△日印協會々報（七九號）日印協會△東亞研究所報（第一六號）東亞研究所△科學技術動員（一卷一號）科學動員協會△地政學（一卷五、六、七、八九號）日本地政學協會△南方資料（一九、二〇、二一、二二號）東亞經綸研究會△横濱青年（二九九號）横濱基督教青年會△軍人援護（四卷八號）軍人援護會△日本園藝雜誌（五四年三號）日本園藝中央會△ローマ字世界（七、八、九號）日本ローマ字會△蒙古畫報（九號）蒙疆資料社△翼賛政治（一卷一號）翼賛政治會△絹人絹情報（一八號）日本絹人絹輸出振興會△青少年指導（八卷九十號）大日本青少年團本部△幼年倶樂部（一七卷十號）大日本雄辯會講談社△エホン・ニッポン（發刊ノ辭）日本宣傳文化協會△海外佛教事情（七卷五號八卷一號）國際佛教協會△西南學院論叢（第二號）西南學院△女學生（四卷九號）女學生社△外交（五二〇、一二、三、四、五、六、七、八、九、五三〇、一號）外交新聞社△貿易情報（四二、三、四、五、六、七號）府立東京商工奬勵館△出版文化（二〇臨、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、三〇、三一、三二、三三號）日本出版文化協會△興亞週報（九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇號）大日本興亞同盟△外務省通商局日報（二〇六號）外務省通商局△日本宣傳文化協會々報（一號）日本宣傳文化協會△北（一號）滿鐵鐵道課第二弘報係△カオ・パーブ（六、七、八、九號）國際報道工業株式會社△Bulletin of Eastern art No. 26.27. 28 東洋美術國際研究所△Home Life Vol. 4, 5, 6, 7, 8, 大每・東日新聞社△Front 1-2 情報局第三部△Pole Star Monthly Vol. XXII No. 5, 6, 北星堂△Nippon philippines No. 1, 2 ニッポン・フイリッピン社△Eastern Asia (No. 7.) ヤンチヤリヤ・デイリー・ニューズ社△Contemporary Japan Vol. XI No. 7 日本外事協會△Tokyo No. 18 五十部府立東京商工奬勵館

○購入圖書

一、民族と文化の諸問題（小山榮三著）　一部　羽田書店
一、泰國農村經濟論（明石二郎、關嘉彥共著）　一部　中央公論社
一、六昆王、山田長政（村上直次郎著）　一部　朝日新聞社
一、華僑裸記（根岸信著）　一部　朝日新聞社
一、大東亞建設と植民政策（岩倉具榮著）　一部　八木書店
一、南方經濟と開發（中外商業新報社經濟部）　一部　高山書院

一、大東亞共榮圈の基本理念（中保與作著）　一部　高原社
一、富山房大英和辭典　一部　富山房
一、比律賓統計書　一部　國際日本協會
一、蘭印統計書　一部　同
一、馬來統計書　一部　同
一、佛印統計書　一部　同
一、タイ語要諦（山路廣明著）　一部　螢雪書院
一、泰と馬來の鑛山行脚（福田連著）　一部　昭晃堂
一、南洋年鑑（第三回版）—臺灣總督府編　一部　南方資料館
一、南洋地理大系三（タイ佛印）　一部　ダイヤモンド社
一、大南洋地名辭典第一卷比律賓（三吉朋十氏著）　一部　丸善
一、佛印泰支那・言語の交流（後藤朝太郎氏著）　一部　大東出版社
一、英和活用大辭典（勝俣銓吉郎氏編）　一部　研究社
一、廣東、ハノイ、盤谷（永田直三氏著）　一部　河出書房

一、山田長政と南進先驅者（田澤謙氏著）　一部　潮文閣
一、日本語（日泰會話本）　一部　國際文化振興會
一、社會政策時報（二六〇號）　一部　協調會
一、山田長政と張騫（對照東亞英傑傳七）—白井喬二　一部　田中榮榮堂
一、萬國渡海年代記（小野忠重氏著）　一部　双林社
一、華僑、井手季和太氏著）　一部　六興商會
一、回教概論（大川周明氏著）　一部　慶應書房
一、南方統計要覽（上卷）　一部　東亞研究所
一、南方圈要覽　一部　朝日新聞社
一、My Country Thailand (Phra Sarasas)　一部　丸善

○財團法人日本タイ協會
總裁及役員並職員

總裁　秩父宮雍仁親王殿下
名譽總裁　アーテイツト・テイプ・アーバー殿下
會長　公爵近衛文麿
名譽會長　デイレツク・チヤイヤナーム

同　副會長　井上雄二
理事長　侯爵德川頼貞
常務理事　子爵伊東二郎丸
同　侯爵細川護立
理事　公爵德川圀順
子爵伊東二郎丸　子爵岡部長景
同　男爵石井康　同　川村博
同　子爵大倉喜七郎　同　河井彌八
同　子爵岡部長景　同　加藤勝太郎
同　岡田永太郎　子爵加藤泰通
同　常岡寛治　文學博士高補順次郎
同　鶴見左吉雄　同　鶴見左吉雄
同　向井忠晴　同　南條金雄
同　伯爵二荒芳德　子爵黑田長敬
同　古田俊之助　伯爵黑田清
同　船田一雄　同　倉田猛郎
同　淺野良三　同　矢田部保吉
同　齋藤晉次　伯爵二荒芳德
同　伯爵酒井忠正　同　江口定條
同　醫學博士北島多一　同　榎並充造
同　工學博士門野重九郎　同　出淵勝次
同　監事　藤山愛一郎　同　安住伊三郎

駐タイ國日本大使　坪上貞二
評議員

同　佐藤市郎
同　櫻井兵五郎
同　醫學博士　北島多一
同　子爵　三島通陽
同　關屋貞三郎
主事　遠山峻
タイ國學生會館學監
調査部職員　高久正義
同　星田晋五
同　田中正夫
同　今井泰三
同　江尻英太郎
同　桃島輝夫
同　小池康子
同　渡邊嘉子
同　岡本一子
囑託　山口武
同　大山周三

【編輯後記】

日タイ兩國關係が其後益々緊密の度を加へつゝある事は、最近兩國首腦者間に交はされた文書でよく表明されてゐる。

◇

即ち曩に日泰同盟慶祝答禮使節に托された東條首相宛ピブン泰國首相のメッセーヂには、「今や兩國國民を結ぶ友誼の敦厚なること史上未曾有のもの有之候」とあり、國際親善の表現として、殆んど最大級の辭句を用ひてゐる。また同國ヴイチット外相が我が外相に宛てた謝電に於ても「泰國政府及び國民が日本に對する不動の信賴の下に飽迄兩國相携へて同じ勝利の大道を邁進するの堅固なる決意を有し居るは儼然たる事實にして」云々として、日本に對する強き信賴を表明してゐる。

◇

今こゝに此の二者を並べて觀る時、それが徒らに美辭麗句の羅列でなく、所謂「外交辭令」の外被を脱して、深く內容的に盛りあがつた感激的表現であることは、容易に首肯し得る所である。これは最近　兩國間に取り交はされた美しい「花」である。しかゝ根ある花である。數日間に凋落する挿花では斷じてない。兩國相協力して大東亞戰爭を戰ひ拔き、やがては美味なる果實を結ぶべき花なのである。

◇

本號では、これに亦一歩調を合せて、駐日タイ國大使館參事官タウイ氏は一文を寄せて、亞細亞の指導者たる日本への信賴と全幅的協力の精神とを强調し、同時にタイ國は獨立國家としての健全なる發達を熱望するものであることを、力强く述べた。熱意溢るゝ同氏の論文は、短篇ではあるが、現下タイ國識者の所信を卒直簡明に披瀝して餘蘊なしといふべく本邦識者に多くの示唆を與へるものと信ずる。

〔非賣品〕
昭和十七年十月二十八日印刷納本
昭和十七年十月三十一日發行
東京市麴町區霞ヶ關三丁目四番地三
發行所　財團法人　日本タイ協會
電話銀座二六五六番
振替口座東京一四八三一番
文協會員番號二二二二三六
東京市麴町區霞ヶ關三丁目四番地三
發行兼編輯人　遠山峻
東京市淀橋區戸塚町一丁目二二〇番地
印刷人　河田保治
東京市淀橋區戸塚町一丁目二二〇番地
印刷所　明立印刷株式會社
（東東一二）
配給元　東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

郡司喜一著　日本タイ協會刊

十七世紀に於ける日泰關係

A五判　一一八七頁
地圖四葉
定價拾圓
送料三十錢

日タイ兩國の友誼關係は昨年十二月二十一日締結せられたる日タイ攻守同盟に至つて飛躍的發展を遂げた兩國の歴史關係は一朝にして成れるものに非ず、實に長きは深く認識せねばならない。タイ民族は悠久數千年の昔、支那の雲南地方に於いて優秀なる文化を誇つた。然るに忽必烈軍の鋭鋒下に蹂躙せられて南下して現在タイ國に定着、ムアン・タイ（自由國）を建設し今日に至つた。近世初期、我が國民南方發展の機運に乘じ、日タイ兩國關係も緊密となり、彼我の國交、貿易は頻繁を加ふるに至つた。更に邦人は多數タイ國に在留してアユチヤに日本町を築き、邦人先覺者等は同國の王室の爲めに忠誠を盡し、タイ國に寄與せるところ多大であつた。かゝる歴史的現實の上に、最近の日タイ親善關係は樹立せられたのである。タイ國に對する關心の昂まりつゝある今日、我等は舊き兩國關係を回顧研究し、益々將來の親善に資せねばならない。

斯る意味に於て今回本會が刊行する「十七世紀に於ける日泰關係」は此の目的に最も適合した貴重書の一たるを信じて疑はない。著者郡司氏は先きに領事としてタイ國に駐割し、公務の餘暇廣く内外の書籍を沙獵して本書を成せる眞摯學究の徒である。以て本書の價値を知るに足るであらう。

第一章　緒　言
第二章　海外貿易上より見たる十六、七世紀に於ける本邦の概觀
第三章　十七世紀を中心とせる泰國の外國關係概觀
第四章　倭寇、御朱印船及邦人の平和的海外發展
第五章　日　泰　國　交
第六章　邦人の泰渡航及在留
第七章　山　田　長　政
第八章　日　泰　貿　易
附　錄
一　アユチヤ王朝時代に於ける泰國の行政
二　泰國王族制度の研究
三　泰　國　官　位
四　泰國の奴隷階級制度
五　泰に關する支那古文書の記事

東京市麹町區霞ヶ關三ノ四霞山會館内　日本タイ協會
振替東京一四二八三一番
電話銀座二六五六番